

310.8  
So634s  
G



\* 0003976005 \*

0003976-005

310.8-S0634s-G

孫文全集

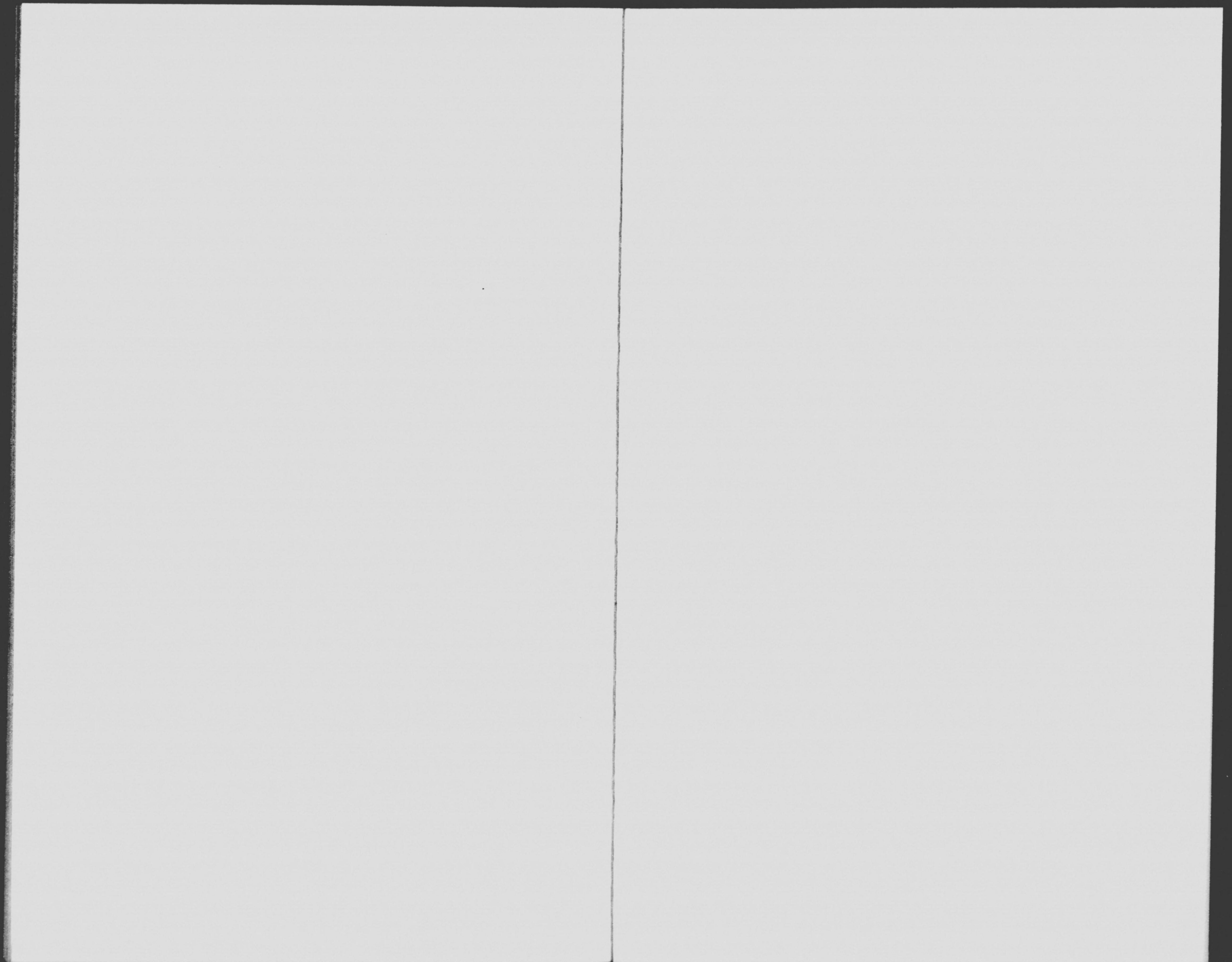
外務省調査部・訳編

第一公論社

1939-1940

ABA





6298

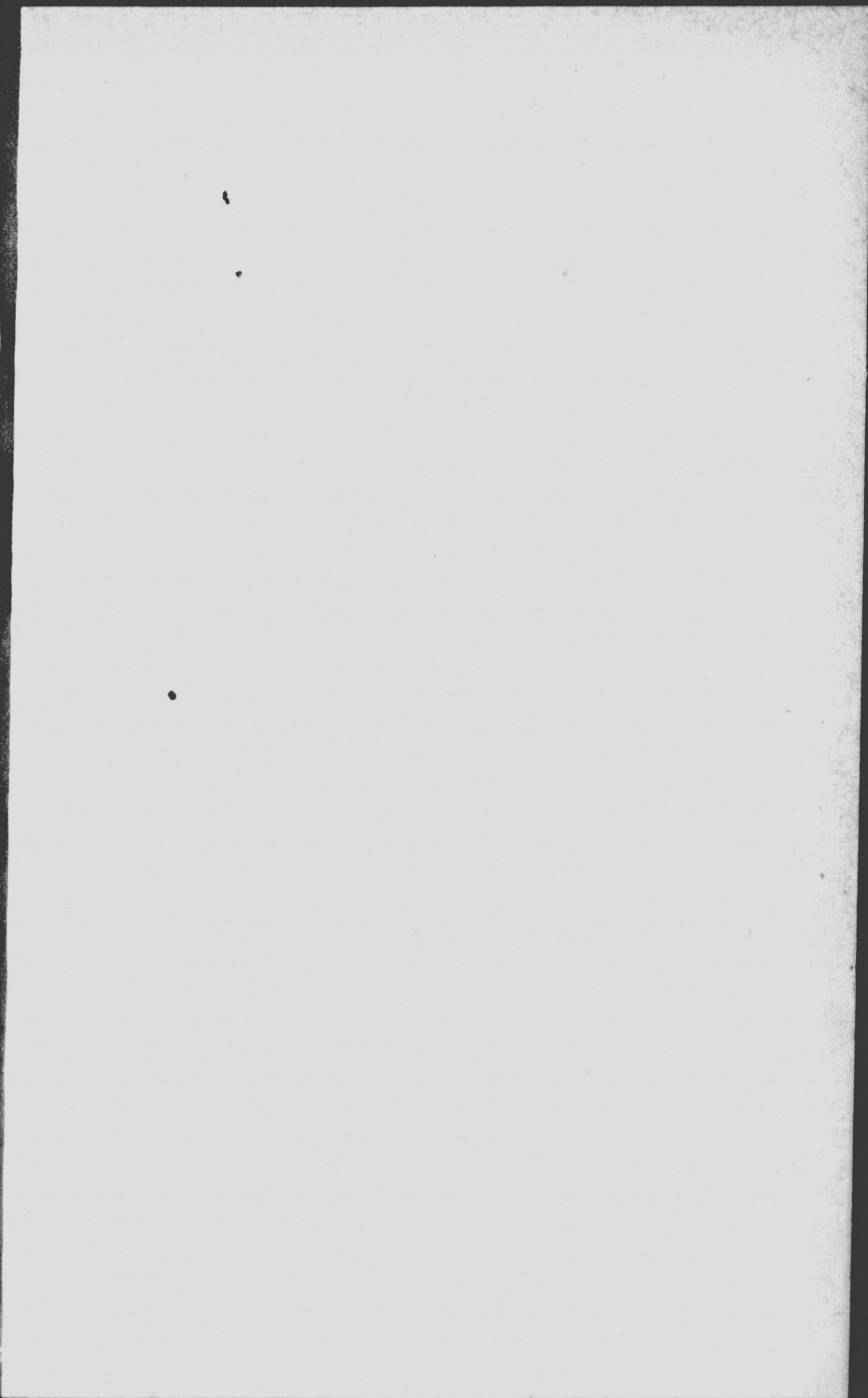
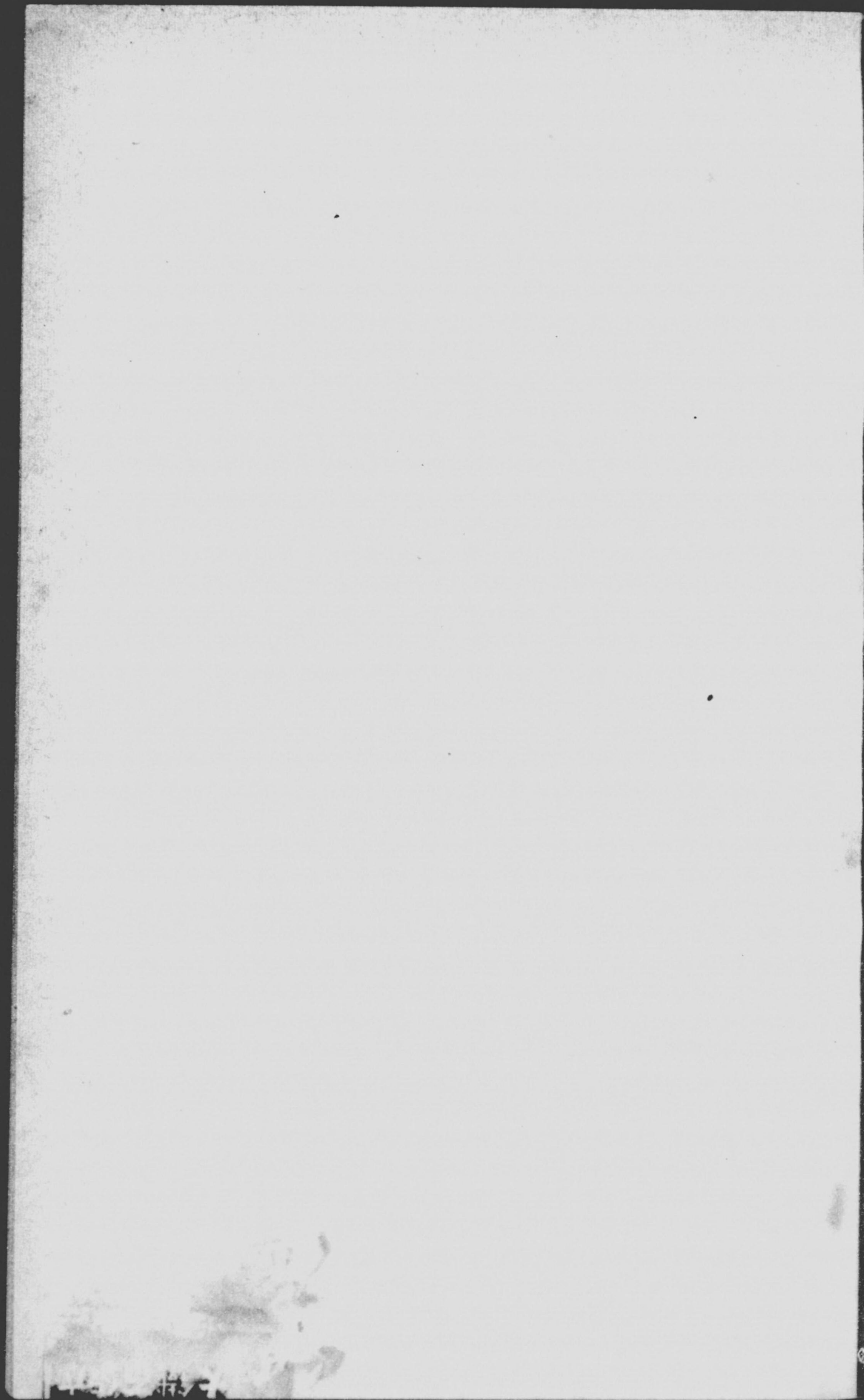
# 孫全文集

第 五 卷



講演及談話篇  
(下)

第一論社版



外務省調査部譯編

孫文全集

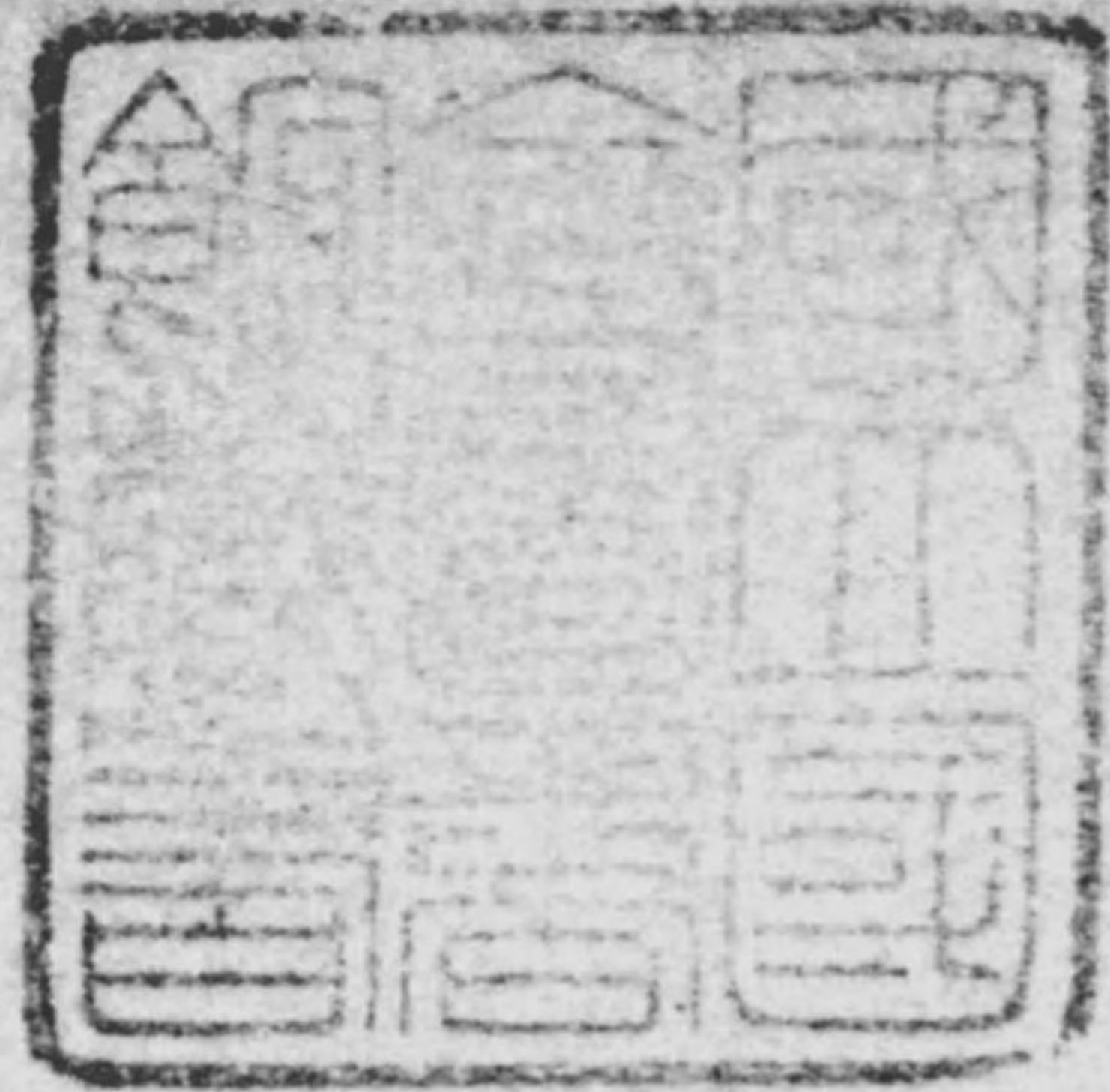
(第五卷)

東京都千代田区丸の内二丁目十二番館六号四二室

芳澤中國記念事業財團

電話(8)日一〇八六

310.8  
S0634A  
G



533040

# 講演及談話(下)

## 目次

三民主義の實行と新國家の改造.....	二一
行ふは易く知るは難し.....	二五
軍人の精神教育.....	三五
廣西の善後方針.....	一〇〇
陽朔富源の開發.....	一二三
兵を化して労働者とせよ.....	一〇八
國民は人格を以て國を救ふを要す.....	二六

求 學 と 救 國……………二三八

成功は軍隊の力に倚らずして黨員の力に倚るを要す……………二五七

革命の成功は主義の宣傳による……………二七一

主義宣傳は以黨治國の第一歩……………一九六

三民主義は舊思想打破の主義……………二一〇

黨員は應に軍隊と協同して奮闘すべし……………二三二

一を以て百に當る革命軍……………二四五

一 全 大 會 開 會 の 辭……………二四七

一 全 大 會 閉 會 の 辭……………二五三

一 全 大 會 代 表 歡 迎 の 辭……………二六一

革命は最後の成功を贏ち得る……………二六七

中 國 國 民 黨 改 組 問 題……………二七九

國民政府組織案の説明……………二八三

民 生 主 義 の 説 明……………二八八

中 國 國 民 黨 宣 言 の 趣 旨……………二九五

政黨の精神は黨員全體にあり……………二九七

革 命 軍 の 責 任……………三〇二

革 命 軍 の 眞 精 神……………三〇五

仁義の師は官途の昇進や蓄財を願はず……………三〇二

婦人はなぜ三民主義を理解せねばならぬか……………三〇七



同胞は皆三民主義を……………三五  
軍官學校開校式訓辭……………三九

彙に上梓せる上卷には、孫文の抱懐せる理論の基本要綱と思惟せらるるものを編纂したるが、本卷には専ら孫文の革命方略並に其の講演談話等中國の一般國情及び地方事情に對する之が應用を収録せり。尙最後に孫文の各種宣言文其の他雜著書翰電文等を適宜編録す。

昭和十一年一月

### 外務省調査部三課

講演及び談話  
(下)

### 三民主義の實行と新國家の改造

——貴州在住廣東人歡迎會にて——

今日は同郷の諸君が、此處に歡迎會を開いて下さつたが、丁度新年一月四日にあたつてゐる。然し我國內には二種類の新年があり、二十幾日たてば、又陰曆の新年がある。我國では甚だ陰曆の新年を尊崇し、陽曆の新年に對しては反對にあつさりして居る。従つてどうしても陰曆新年と陽曆新年とに區別せねばならなくなる。此區別は何によるかと云へば、新舊曆による區別である。民國十一年以來、人民の舊新年を尊崇し、新曆の新年を重んぜぬ者は、舊觀念より離脱し得ず、舊思想より離脱し得ぬ者のみである。國家の進化は、野蠻より文明へと進む。人類も亦然りで、無知識から有知識へと進み、舊い觀念を棄てて新しい觀念を發生させ、舊思想から離れて新思想を發生させる。諸君。今日はまさに當然舊觀念、舊思想を打破して新觀念新思想を發生せしむべき時である。新曆の新年は、民國の新年共和國家の新年であり、舊曆の新年は、君主時代の

新年、專制國家の新年である。專制と共和とは大いに同じからざるものがある。之れを商賣に例へると、商賣には主人の商賣と自己の商賣とがあるが、民國は株式會社の如く、國民は株主、官吏は會社の使用人の如き者である。故に、大統領も官吏も皆國民の公僕であり、國民は株主の如く權利を享有して居り、專制國家が一人を奉じて君主となし、人民は奴隸として毫も權利を享有する所がないのとは異なる。國人が新曆の新年を甚しくは重視せず、舊曆新年に對して却つて重きを置くのは、權利あれども享有するを知らず、既に自分が主人公となつたのを未だ知らぬものである。國人の新思想の缺乏せる爲め、權利を放棄し、國中の政治は遂に強盜なみの官僚が時に乘じて之れを操縦するに任せてゐる。故に民國十年以來の斯様な大亂は、其の原因は皆此處に在るのであつて、國中既に大いに亂れ、人々痛苦を蒙り、爲に懷舊の情を生じ、滿清時代は尙ほ民國時代よりも優つて居たと考へるに至つたのである。かかる反感に就いては、引例すべき一の故實がある。其の昔、米國が黒人奴隸を解放した爲め南北戰爭を引き起し、其の結果黒人は解放された。併し黒人は解放されたとは云へ、獨立して生活なし得ぬから、一旦其の據る所を失つて却つて非常に困難を感じ、奴隸時代の安樂なるに如すと考へたのである。故に「リンカーン」は當時に在つては却つて人々から反對された。併し今日では、黒人種はよく「リンカーン」の聖人たる

事を知つてゐる。されば凡そ新舊の交替には必ずある種の變更が行はれる。金儲けは人の願ふ所である。同様に子供の産れることも人の願ふ所である。ただ吾人は出産には必ず苦痛と危険との伴ふものなることを知らねばならない。之れによつても人は安樂を得んとせば、必ず困苦艱難によつて之れを得なければならぬ事が知られるであらう。

また民國成立の際、北方官僚も共和に賛成し、かの袁世凱の如きは率先して共和に賛成した者であるが、誰か知らん、彼等の賛成は全く虚偽なものであつて、陽には賛成し陰には反對するものであつた。之れが爲に國中の大亂を醸成するに至つたのである。吾人は今日、當に此の心にもなく共和を賛成する徒を排除し、眞の共和を實行し、必ず佛の如き、或は米の如き共和國を作り上げるべきである。然し米國と雖も數十年前には、土地は荒蕪で、極力之れを改良し、鑛山を開き、工藝を興して、漸く今日の富強をなしたのである。桂林地方は、物産豊富にして山水は幽秀、所謂桂林の山水天下に甲たるものである。今、ここで山石を以て論ずるならば、山石は種々なる方面に利用され、眞に地に隨つて寶と謂ふべきもので、假に、工藝が發達し交通が便利ならば其の利益たるや、到底擧ぐるにたへない。四川、雲貴の石炭に至つては、産額も亦豊富で、就中、北方各省の産額は最も多い。外人はみな我國を稱して炭田となし、若し盡く採掘したならば

其の利は到底計るにたへない。我國は、工藝が發達せず、商業も振興せぬので、使用する品物は大部分供給を外國に仰ぎ、毎年輸出品は原料品、輸入品は精製品が多く、之れが爲め利權は外に流出しつゝある。

佛、米の共和國は皆舊式で、今日はただ露國が新式である。吾人は今日、當に最新式の共和國を建設せねばならぬ。新式とは何か。國を化して家となす、是である。人々はまさに其の利己的個人的な氣持を取り去り、心を同じくし力を協せ、共同して之をつくりあげなければならぬ。國家は民を載せる舟である。大海を航海するうち、俄に波風に遇へば、どうしても心を合せ互に助け合ひ、そして共に濟ふ方法を計らねばならぬ。故に、吾人は今日、舊國家より一變して新國家となるのであるから、當然、舊思想を刈りとり新思想を發達さすべきである。新思想とは何か。即ち公共心である。今日、吾人が新國家を改め造らんとせば、何としても三民主義を實行せねばならぬ。何をか三民主義と謂ふ。即ち、民族、民權、民生の主義、之れである。民族主義は即ち世界人類民族の平等で、一種族が絶対に他種族に壓制せらるる事のないものである。滿人が中夏（支那本部）に入つて主となり、二百六十餘年に垂んとして居たのを、我が漢民族が起つて之を打倒した如きは、之れ民族革命主義である。民權主義は各人の平等で、同じ一族の中、絶對

に少數人を以て多數人を壓迫することは出来ない。各人は天賦の人權を有してゐて、君主を以てしても臣民を奴隸とする事は不可能である。民生主義は即ち貧富の均等で、富者を以て貧者を壓制するを得ざるもの、是である。民生主義は數十年前に於いて、既に之を實行した人がある。其人とは誰であらうか。即ち洪秀全其人である。洪秀全は太平天國を建設したが、その實施した制度は、當時の所謂、工人が國家を管理し、貨物は國家の所有となすもので、完全に經濟革命主義であり、今日の露國の共產主義である。

今日、同郷の諸君は、會を設けて、本大統領を歓迎されたが、本大統領が、深く諸君に望むのは、諸君が本大統領一人を歓迎するに止らず、本大統領の主義を歓迎されることである。これが則ち本大統領の大きなお願である。

### 行ふは易く知るは難し

——民國十年十二月九日廣西教育界の歡迎會に於て——

學界の諸君、今日諸君が此處に此の盛大なる歡迎會を催された事は、本大統領の深く感謝する所であり、誠に喜びとする所である。本大統領が之れによつて廣西學界の諸君と談話を交へ得る

が如きは、中々に得がたい機會である。されば今日は特に、平常學問研究に關して抱いて居る意見を述べて諸君の御清聽を煩はしたい。諸君が學界に在る人物である以上人類は如何なる理由で學問を研究するものであるかを、知つて居る必要がある。學問の研究とは即ち知識を求めることである。世界に極めて種々な事物が存在し、種々な道理があつて、いづれも吾人の知らざるものであり、また世界の文明が進歩するには知識才能がなければならず、知識有つてこそ、其の進歩も頗る速であり、而して吾人人類は文明の進歩を求むるものなるが故に、人類は知識を求めねばならないのである。

諸君の御存知の通り、世界に於ける文明の發達はこの二百年以來のことであり、最も其の急速になつたのは、最近五六十年である。今後人類の知識が發達すればする程、文明の進歩は當然の事として愈々急速となる。中國は二千餘年前には、頗る立派な文化を有し、しかのみならず文化の進歩も亦極めて速であつたが、二千年以來、何等の文化を有しない。現在の文化は、堯舜時代に及ばず、秦漢の世にも如かず、近人の知識は古人に及ばない。故に中國人は古人を崇拜するの情が他のいづれの國民に比するも遙に激しいのである。

何故に二千年以來進歩を見ないのか、この原因を探究して詳細に説けば、二方面に分けられ

る。第一は、政治上の關係である。それまでの政府のやり口は、頗る寛大なもので、例へば「天下を公けにする」時代の如きは、堯が天下を舜に譲り、舜が禹に譲り、政府は天下の政權をみな他人に譲つて居る。其の外、人民に對しては、之れ亦何と云ふ寛宏大量であつたらう。「天下を家にする」時代でも、湯武の革命は、「天に順ひ人に應じ」また「民を弔ふて罪を伐つ」ものであり、同じくみな人民の幸福を求めて居た。故に人民はよく自由に思想を發展せしむる事を得、そして文化の進歩を求めんとする思想を有して居たのである。後來、政府が日を追ふて専制に化し、「焚書坑儒」か、さもなくば「文字の獄を興こす」有様で、種々な方法を講じて人民の思想を束縛したのである。かかる裡に在つて、人民はよく自由に文化の進歩を求め得るであらうか。

第二は、古今の人によつて、進歩を求むる方法が等しくない事である。二三千年前には、進歩を求むる方法は専ら實行によつた。古人は宇宙内の事を知るには應に行ふべきであるとした。即ち實際に行つて見た。所謂、義を見るに勇であつた。成功すれば、更に再び之れを行ふ、故に更に進歩したのである。例へば、後稷は人民の饑饉は農業によつて、五穀を生産せねば救はれぬと知るや、自から民に教へて耕作せしめた。禹は人民が受ける洪水の苦痛には、適當の治水方法を講じ、高地の水はけを行はねばならぬと見るや、自から九河を流通したのである。其の他、燧人氏

の火の發明にしても、彼が木を鑽らなかつたら、如何してよく火を得る事が出来たであらう。神農氏の醫藥の發見も、彼が百草を嘗めなかつたら、如何して藥の性質を知り得よう。後に到つては「讀書を好んで、甚だしくは解するを求めず」か、さもなければ「述べて作らず」「坐して道を論ず」で、古人の言行に關する文字を、死讀死記して、別に或る解釋を施すとか、或は古人の解釋に更に解釋を施し、君が或る解釋をするなら、自分も解釋をしようといふ工合で、あたかも古い飯を油でいためるのと同様、何の進歩もあり得なくなつた。

以上の二つの理由に照して見る時、古人の進歩せる最大原因は、能く實行したに在る。よく實行し得れば、即ちよく知り得る。能く知るに至れば、よく進歩し得るのである。昔の中國人は、よく實行したるが故に、進歩せる文學、哲學、道德等を有し、其等は現在の中國人の知らざる所であり且又外國人も知らぬものであつた。内外の交通せざる以前に在つては、外國人は中國人を輕蔑し、中國人は、「アフリカ」、南洋等の土人と同様で、何等の文化を有しないと考へて居たが、併し、現在に於いては、漸く明白となり、頗る中國に敬服し、中國の文化を研究せんとするものも現れ之に加ふるに中國の文化には、外國が現在でも及ばない點が多々ある事を知るに至つた。外國の文化は、羅馬に源を發したもので、後來、羅馬が歐洲の野蠻人に征服されてしまつ

たので、其のため彼等以後の文化は進歩の跡を示さなかつた。元朝の頃に至り、「マルコ・ポーロ」と呼ぶ一外國人が有つて、中國に來て官吏となり、後に中國の文化に就いて一書を著し、彼等外國人に對し、中國の文化が實に素晴らしい事を傳へた。外の事は措いて、たゞ燃料のみについて論ずると、中國人は火を焚くに薪を用ひず、油も用ひない。ただ或る黒い石塊いしぐまを使用すると書いたが、外國人は之を信用しないで、極めて奇怪千萬な事と思つた。その黒い石塊と云ふのが即ち石炭である。近來工業の非常に發達せる外國では最も缺く事を得ない品物であるが、彼等は元朝の時代にあつては、中國で黒い石塊を燃やすと云へば非常に奇怪に思つたのである。其の時代以前には彼等は、却つて石炭を知らず、吾人は既に元朝の時に石炭を燃やす事を知つて居た事が證明され、又中國の工業がその時代に在つて既に相當なものであつた事が知れる。嘗つて、中國人が外國に留學し歸國してから、外國人は數百里、或は數千里の遠方にまで通信する事が出来ると云つても、中國人は信用せず頗る奇怪千萬と考へたのであるが、この通信するものとは、即ち電信電話で、現在中國の如何なる大都市に行つても、みな見る處である。以上によつて、或る時代には中國人が外國人を信ぜず、また外國人が中國人を信じなかつたことがわかる。これは各自、獨特の文明を有して居た爲である。諸君は之れを聽かれて、中國現在の文明が、一つには外

國に及ばず、二つには古人に如かない事を知られたであらう。中國古代の文明は進歩が甚だ緩慢であつた。では如何なる時にどうして進歩は急速なるを得るか。これこそ吾人學者のまさに注意せねばならぬ點である。從來、中國人は「士は四民の首である」と云つて居るのによつても、學者の勢力が社會上最も大なる事を知り得られる。詳細に述べると、學者は、先覺先知であつて、その一舉一動はよく社會の風潮氣分を轉化せしめ得る。社會の學者に對するやまた極めて尊敬を拂ひ、若し學者が主張すれば社會はみな服従する。故に學者は社會に對し、國家に對し、ある責任を負担しなければならぬ。現在の學者の責任は、中國を進歩せしむる點に存してゐる。

歐米の文明はこの二百餘年來の事に過ぎず、最も立派な文明は、最近數十年に在る。更に日本を例として述べれば、五十年前には彼等の文明は實に暗黒であつたが、最近四五十年は進歩極めて迅速である。また暹羅に就いて云へば、最近二十年來、文明が進歩して、中國もこれに及ばない。中國の文明は、昔は進歩が甚だ速かであつたが、歐米の文明は現在に及んで進歩が頗る速かである。日本と暹羅の文明も亦近來極めて進歩が長足である。この進歩の迅速な原因を推究すると、それはいづれも一樣に、正當なる學術を有し、正當なる思想を有したのによる。中國二千年来、文明の進歩せざる原因は、即ち學術思想が不正當な爲である。不正當な點を、簡単に述べ

れば、即ち一般が行ふ事は誠に困難であり、知る事は實に容易であると考へた。この思想が中國を誤らせ、學者を誤らせたのである。

中國近來の状態に就いて論ずれば、一般學者が、家に在つて學問する間は、十年室に倚り辛苦を極め、到底堪へきれぬ程の困難を感じる。多少成功會得して、出でて世に應じ、實行する時代になれば、社會の人々がみな、知るのは容易だが行ふのは困難だと云ふのに出會ふ。この言葉こそ、實に學者を誤らす事甚しい。どうして學者を誤らす事甚しいと云ふのか。即ち學問時代には十年室を離れず、腦を費ひ盡し心血を耗りへらし、そして求むる所の學問は實に容易に成就しない。若し少しく得る所あつて、實行せんとすれば即ち人が「おい。お前が學問する時も困難だつたらうが、實行するのは、一層困難だよ」と云ふ。一般の人は、此の言葉をきいて、怖氣づき、敢えて實行しようとしなない。實行せずして、どうして求め得た學問が、正しいか正しくないかを證明し得よう。實行しなければ、研究した學問は用ゐる處がない。學問が用ゐる所がないとしたら、誰が再び喜んで學問を志さうか。中國のその昔に就いて云へば、周朝以前の進歩は頗る速であつたが、周朝以後、文化は大いに爛熟してしまつた。文化の爛熟せる結果、遂に怖氣づく心持を生じた。この怖氣は、一體よいものであらうか、よい方面より論ずれば、老成自重であり、香



ばしからぬ方面よりは、志行薄弱である。總じて云へば、人間が怖氣づくこと、事に遇へば困難を畏れ、難事を行はず、ただ容易な事のみをさがし求めて行ふ様になる。あたかも一杯の水を地上にこぼすと、抵抗力のない低い部分に流れゆくのと同様の理窟である。人が畏れ難んずに至れば、敢えて軽々には物事を試みない。其れでは、文化の上はどうしてよく進歩が有り得ようか。此の原因を推究するに、根本的な誤謬は、即ち「知るは難きに非ず、行ふは之れ難し」で、困難なものを困難とせず、困難ならざるものを困難なりとする、之れが即ち大きな誤謬である。余は此の大きな誤謬を除き、正面に歸せしめんが爲に、どうしても、知るは難く、行ふは易しと説かねばならない。併し乍ら、我が中國人の心理では全く此の道理に反して行ひ、思へらく、行ふは難いを知るは難くないと。そして極めて容易に出来る事を見て、困難であるとなし、實行して實際の結果を求める事をしない。又極めて困難な事を以て、甚だ容易であると考へ、深く探求してみない。故に二千年來、一切の人情物理に對していづれも、徹底して頂を極め、極にいたるに及ばなかつた。科學知識の極めて豊富なる歐米人は決してかかる心理を有してゐない。例へば本大統領が嘗つて友人と「知るは難く、行ふは易し」を研究しつゝあつた頃、ある米國の工學博士が部屋に入つて来て、話す所によると彼等が米國の學校在學當時、或る日、米國のある先生が、彼

に知るは難く行ふは易しと語つた。所が其の工學博士は中國人で、早くから中國の學説たる「知るは易く、行ふは難し」の先入觀があるので、非常に米國教師の言葉に懷疑を挾んだ。するとその米國教師の曰く、「君が私の語る語をきけば、自然私に反對出來ぬ事を了解するだらう。私の記憶して居る事だが、嘗つて或る家の水道の管が損傷したので、その家の主人が、ある労働者に修理させた。その男は暫く仕事をして居たが、やがて完全に修理し終つたので、主人がその労働者に對して、代は幾何程であるかとたづねた。すると労働者の答が五十元何十錢と云ふので、主人が、君は完全に修理するのにほんの暫くの間仕事した丈である。そんな容易な仕事に、どうして多額の金を要求するのであるか。また君は五十元とか五十一元とか請求しないで、どうして五十元と何十錢とかが必要なのか。この工賃の金額は、奇怪極まるものだ」と詰つた處、労働者は主人に答へて曰く、君は私が修理し終へた後この仕事が馬鹿に容易だと云ふなら、何故に君がさきに、之を修理しないで、私を招んで修理させたのか、これは勿論君がどうして修理するかを知らないからである。私はどうして修理するかを知つて居るから、それで一寸手を動かせば修理し終へるのである。如何にして修理するかを明にするのが非常に困難である。故に私はその價値に對して多額を要求するのであつて、五十元は即ち、私の知識の價値である。手を動かして

修理を行ふ事は、實に容易な事であるから、私は工賃に對しては少額を要求し、その數十錢が即ち私の勞働に對する工賃である、と。主人はこの話をきいて、大いにうなづくと共に、一面勞働者に對し、君の云ふ所は大いに理窟がある。五十元と數十錢を支拂ふよ、と云つた。此の事實に照しても、知る事の難くして行ふ事の容易なるを證明するに足る。中國人の思想の誤謬は此の點に在つたのである。故に中國の文化は、數千年間少しも進歩しなかつた。この進歩せざる誤謬は、『南轅北轍』で全く路を進み違つてしまつたに基因する。

諸君が今日、本大總統を歓迎せらるるのは、本大總統の性質を歓迎せられんとするのである。本大總統の性質は、平生革命を愛するものであり、従つて、諸君は本大總統の革命的性質を歓迎せんとせらるるものである。本大總統は、中國を進歩せしむるには、單に政治に對し革命を主張するに止らず、學問に對しても亦革命を主張し、全國の人民が幾千年踏み違へて來た路を改正したいと考へてゐる。故に學問と思想とはいづれも革命を経過しなければならぬと主張する。中國の歴史に就いて云へば、湯武は革命を最も早く主張した人であるが、人々は之に對しみな、『天に順ひ、人に應ず』と稱し、本大總統が嘗つて革命を主張した頃には、人々はみな『謀反をなす者』だと云つた。學問思想の上に就いて述べれば、彼等を倒すには、即ち思想を反對ならしめぬ

ばならない。故に古人の説に「知るは難きに非ず、行ふは之れ難し」とあるに對し、本大統領は「行ふは難きに非ず、知るは之れ難し」と説かんとするのである。諸君にして若し本大統領の學理上の革命に賛成さるるならば、當然「知るは之れ難し、行ふは難きに非ず」と説かれるべきである。即ち知と行との難易の先後の説は、凡百の事情を知れる後行へば、頗る容易であり、若し知らずして行はんとすれば、中途にして必ず數多の迷路に陥り、幾多の誤謬を犯し、實に困難だからである。何故にかかる誤れる困難を避けないのであるか。之が一理由は、知るは甚だ困難であり、若し知るを待つて始めて行ふならば、その行ふ時は、幾百年幾千年の後に非ざれば不可であつて恐らくは時期を定むる事は不可能であらう。故に吾人類は、時には、知らずとも亦行はねばならない。例へば、電燈の電氣と、電報の電氣と、電話の電氣との如き、我が中國人にして現在果してよく幾人が、其の何物たるかを辨へて居るであらうか。併し乍ら、我が中國の大都市では現在のどの家にも此等のものを使用せぬ所はない。之等の利用は即ち、「行ふ事」であり、以つて、行ふの容易なるを知り得る。更に中國の指南針も亦、電磁氣の道理によるもので、之れを使用した時代と數とに到つては或者は、黃帝の發明せらるものと云ひ、或者は周公の發明であると稱する。無論誰が發明したとしても、いづれにしてもみな外國人が電氣を發明した以前の事であり、外國

には從來無かつたものを、中國では早くから使用してゐたのである。では中國人は一體、電氣を知つて居たのかと言ふと、さうではない。學者は四民の先達であり、中國の社會から頗る崇拜されて居るのであるから、普通人の知らぬ事柄があれば、彼等に教へて實行せしむるを要する。諸君は今や、「知るは難く行ふは易し」の學説を理解されたのである。然らば、此の學説は一體如何に應用すべきであらうか。只今主席は、廣西の學界が現在困難に遭遇して學校を開校する事が出来ないと言ふが、吾人は此の困難に對して、まさに如何にして之を解決すべきであらうか。吾人が此の問題を解決するには、第一に、此の困難の原因を知らねばならぬ。第二には開校の重要なこと及び其の方法を知るを要する。若し此の二つの道理がいづれも明瞭に理解されるならば、此の問題は容易に解決し得るのである。本大總領の今回廣西を通行する目的は北伐して、政治上の障礙を一掃し、中國を統一するに在る。此の原因のため、多數の軍隊を率ゐて居り、此の地方に在つては諸君の學校に多數の軍隊が駐屯して居る。第一の道理に就いて云へば、諸君が開校し得ない最大の困難は、或は、之れが原因であらう。惟ふに中國の現状は四分五裂、亂れに亂れて居り、一般腐敗せる官僚武人が金錢財貨を取り上げ、學校を占領し、開校を不可能ならしめてゐる事實は、獨り諸君の廣西一ヶ處のみではない。例へば北京の如きは大學以下、そ

の有する學校はみな、今年一ヶ年間一回も開校するを得なかつた。武昌の高等師範も同様に開校し得ず、安徽の學校は、開校し得ぬ所か、更に學生が殺されるといふ有様で、本大總統は彼等北方の學界がいづれもかかる悲惨なる状態に在るのを見て、彼等を救濟せん事を思ひ之が今回政治上の障礙を除かんとする所以である。北方學界の苦痛を救濟することは、即ち撥亂反正と云ふべきである。諸君は、撥亂反正こそ、諸君の背負ふべき大なる責任であることを知らねばならぬ。諸君が軍隊による開校不可能の困難を除くせんとならば、即ち諸君はこの責任を負擔して、人民と軍隊とは一體同心、協力して、軍隊をして速に北伐に出發せしめねばならぬ。

第二項の開校の重要性とその方法に就いて云ふと、卑近な點では、少年を教育せねばならぬ事である。少年が教育を受ければ十數年後には、有用の人材となり、諸君先輩の後をついで事に當り得るが、若し彼等が教育されぬ時には、諸君以後の人材は、新舊聯絡なく、その後の事業は之に當る者が不在であらう。更に深く云ふと、これは廣西を建設するに最も緊要なる事である。民國の人民はその一人一人が主人公であり、いづれも國家のために仕事をせねばならぬものであるが故に、新しきものを建設するには、先づ最初に教育である。教育を普及し、一般國民をしてみな教育を受けしめ得て、その後には於いてこそ、各人は國家のために働くべき事を理解するのであ

る。廣西の現状に關して云へば恐らく未教育の者が極めて多數あらうから、民國の教育を普及するを要する。故に本大統領は、諸君が桂林周囲の人民をして、貧富を問はず、凡そ十歳以下の兒童にはみな教育を受けしめられん事を希望する。その詳細なる具體的方法としては、諸君現在の學徒は、みな従來の舊い行動を一變して、その教師たると或は學生たるとに論なく、各自その力を盡し、責任を以て同心協力して各郷村の人口を調査し、小學校を多數設置の上、一般の貧乏人にもみな讀書させなければならぬ。これを先づ桂林より始め、各縣各村に推し廣め、先づ幼稚園を設け、次には小學、更に中學を設置して後、大學を設くべきである。本大統領が今回廣西に來てみると多數の同志がいづれも、廣西には現在當然大學を一つ設置すべきであると云つてゐるが、これは容易に實行し得ない事である。何となれば、當地には現在多數の適當な先生が居ないよし先生があつたにしても、何處からこれに合格する學生を搜して來るか。現在の中國は民國であつて、各人みな教育を有せねばならぬ。諸君廣西人數百萬全體に教育あらしめ様とするには、數人の力を以てしては教へきれぬものではない。また徒に空しく口に説くのみでは成就するものではない。各人がその力を傾け、一分の能力あれば、一分の事を實行する事が必要である。若し斯様になす時には、人々をして洩れなく讀書せしめる事が出来るし、これこそ普及せる教育制度

と云ふべきであらう。若し然らざれば、即ち貴族的教育制度であり、資本主義的教育制度である。諸君は既に教育の重要性とその方法に就いて了解されたのであるが、そこで現在の學校が軍隊に占領されて開校し得ず、學校内に於て教授し得ずとも容易に簡單なる方法によつて教授し得ることを思ひつかれるであらう。例へば北京大學の如きは嘗つて政府が彼等に開校する費用を支給しなかつたので、彼等教師學生は、校外に於いて、或は小學校を設け、或は露天學校によつて街頭に講演した。これは學校外に於ける教授の一方法である。

繰返へし廣西が現在開校し得ない原因に就いて見るに、廣西城内の人は、それは學校がないからだと云ひ、各縣各郷村の人は、學校は有つても金がないからだ云ふ。さきに本大統領は、中國の舊い學問と思想を諸君が打破されたいと述べたが、此の金がないといふ觀念をも亦諸君によつて打破して頂きたい、吾人が最初革命せる時代の如きは、果して金が有つたであらうか。而も吾人は奔走する事二三十年、種々の方法をつくして、奮闘努力し遂に金のある滿清政府を反對に倒してしまつたのである。方法が立つて奮闘するならば、如何なる事も成功し得るものである。

金錢の外觀形體に就いて云へば、現在廣西人の使用して居るものは、全部商務印書館の印刷せる紙幣であり、貨幣ではない。本大統領は、今回廣西へ多額の銀を携へて來て、梧州より桂林に

至る間、沿路に於いて之を用ゐたが、農村ではこれを受け付けない。では一體此の金は、何の力もないものであらうか。諸君の廣西銀行の發行に係る紙幣は、聽く所によれば、陸榮廷がなほこれを八百萬元程、廣西に輸送するため上海の商務印書館に有して居るそうである。若し諸君がなほ依然としてその紙幣を使用するならば、それは陸榮廷に買物として奉る様なものではなからうか。廣東人は銀を用ゐるので、銀行では紙幣を發行しても、人民が隨時現銀と兌換し得る様準備金として銀を有して居らねばならぬ。外國人は金を用ゐる英國は金鎊を、米國は金弗を用ゐる。諸君廣西人は現在好んで紙幣を用ゐ、既に金銀の觀念を打破し去つた。若し更に一步を進めて、紙幣の觀念を打破するならば、それは人類に共通なる金錢の束縛から脱離するものではないか。換言すれば、現在の廣西人は既に金錢の苦海から離脱して居るが、何故更に一步乗り超へて、紙幣の苦海からも超越してしまはないのか。金錢の本質に就いて再び述べて見よう。學者がみな之を有無相通する爲めに使用される一種の物貨であると説いて居るのを見ても、物貨の價値が金錢よりも高い事がわかる。若し銀が有つても物貨が無ければ、金錢は用ふる處がない。例へば、這般の歐洲大戰に於いては、各國の毎日費消する戦費は、いづれも數十萬に上り、英國の如きは毎日八千餘萬に上つた。若し各國が皆金貨を使用したとすれば、何處から其の莫大な金が得られるであらう

か。故に紙幣を使用せざるを得ないのである。併し乍ら、紙幣は發行額が大になればなる程、其の價値は其れだけ減少する。獨逸の「マルク」の如きは、從來中國の半元が一「マルク」に當つて居たのに、現在では一元が七八「マルク」に當るであらう。此の事實に徴しても、紙幣は貨幣と同等の價値を有して居らぬ。廣西銀行の紙幣は從來一元が銀一元に相當して居たが、現在では、僅かに五毫（五十錢）にしか當らぬ。此の紙幣は、陸榮廷が、諸君の現金を吸収せんが爲めに發行せるもので、元來、其の總額は二千萬元であつたが、其の後、奸商がまた二千萬を贋造し前後合計四千萬となつた。此の四千萬の中、半數は贋造であるが、人民は辨別する事が出來ず、政府も回収する事が出來ない。故に本來の價値が更に半を減じてしまつたのである。現に陸榮廷は外に八百萬元を上海商務印書館に有してゐる。將來廣西に之を持ち込むならば、諸君の紙幣價値は更に低下するであらう。諸君が此の危険を防止せんとするならば、まさに速に上海商務印書館に打電して破棄せしむべきである。若しさうしないならば、陸榮廷が上海に在る以上、禍の源は塞がれない。彼は其の紙幣を廣西に持込んで使用し、永遠に諸君の督軍となるであらう。貨幣の外形と其の本質とを綜合するに、貨幣は一種の勝負事に使ふ數とりと同様で、之を使用して物貨の價格を記するものであると云ひ得る。例へば錢を賭ける際必ずしも錢を賭ける事を要しない、

瓜子を以て數とりとし錢を代表させてもよく、燐寸を以て數とりとしてもよい。簡単に云ふと、貨幣は物貨を代表するものに過ぎない。故に物貨は萬能ではなく貨幣の力は更に一層大である。若し物貨が流通し得ねば貨幣の價值は從つて低下する。たとへば獨逸は歐洲大戰當時、各國に封鎖され、國內の物貨は從つて減少した。故に、紙幣「マルク」は貨幣の價值が失はれてしまつたのである。貨幣は物貨を代表するものであるが、では物貨とは一體何であるかといふと、勞働によつて生産されたものである。例へば此の卓上の造花は勞働によつて作られたものであり、この卓<sup>テーブル</sup>も亦同様である。造花は物貨であり、演卓も亦物貨である。之れに依れば、勞働より物貨が生じ、物貨より貨幣が生ずると云ふべく、あたかも父より子が出來、子から孫が出來る道理と同様である。吾人が孫の由來をたづねれば、當然父子二代の關係が出て來るし、貨幣の源を究めれば、そこには當然勞働と物貨との兩者の關係が存在する。吾人は現在ただ錢を云ふのみで、貨幣は物貨を代表するものであり、物貨は勞働を代表するものであると言ふ二個の關係を忘却してゐる。此の理由から、一般普通の人々は、貨幣の理論を知らず、金錢に束縛されて居る。此の束縛を打破するには、多量の物貨を必要とし、多量の物貨の存在するためには吾人が大いに仕事をしなければならぬ。

更に物貨に就いて述べよう。古人は貨幣の發明される以前には、相互に物貨の有無を通ずるには、みな「日中市をなし、交易して退き、各々その所を得」て居た。此の交易の状態は、丁度諸君廣西の大都市、小市街に於ける毎月三、六、九、或は二、五、八等の「市日」と同様である。物貨は勞働によつて作られたものであり、物貨は大小、長短、輕重の差があるため、それに費される勞働も從つて多少の不同が存在し、その勞働に對しては相當の報酬を要する。之によつて、物貨の價值には、どうしても多少の差が生ぜずには置かない。此の時代に於いては、各人は「その有する所を以て、その無き所に易へ」たが、併し、貨物の價值は、大なるもの有り、小なるものあり、相互に正確に相等しいといふ譯に行かず、その交易には必然的に多くの爭論と煩はしさとが伴つた。例へば指物師が、卓と椅子とを賣るに、その卓は一脚二元に當り、椅子は五十錢であり、且つ裁縫師の賣る着物が、一枚八十錢に過ぎぬとし、それを交易すれば一元七十錢だけ不相應となり、裁縫師は卓と椅子とを求める事が出來ず、指物師も亦衣裳を求める事が出來ない。即ち相互に交易し得ないのである。併し、彼等の物貨の價值はみな丁度相等しいものでなく、而かも相互に必ず交易せねばならぬ故、必然的に誰かがその物貨の價值に満足し得なくなる。故にその指物師と裁縫師とが、互にその交換する物貨の價值を説くことは、どんなにか困難な事であ

らう。後來、聰明な人間が貨幣なるものを發明した。これを學術上の言葉で云へば、百貨の「基準」であり、俗な言葉では交易の「媒介」である。茲に於いて、費されたる労働の多少による價値の大小が辨別されるに至り、交易が各人の欲望を満足させる報酬に一致し得ない事、並に計算に對する謂れなき紛争等の種々の困難は、みな一掃する事が出来た。かく觀察してみると、貨幣は物貨を交易する媒介たるに過ぎず、物貨は労働の結果であり、物貨の價値の高下は、また労働に對する報酬の多少である。故に貨幣、物貨、労働、この三者の能力を比較すれば、實際のところ、物貨の力は大いに貨幣にまさり、労働の力はまた大いに物貨に超えてゐる。

吾人が革命せんとする理由は、民族的壓迫、政治的壓迫、經濟的壓迫等種々の好ましからぬ事を知つた爲めであり、故に生命を賭してそれ等を打破せんとするのである。諸君は既に貨幣の理論を理解せられたのであるから、どうか、本大統領の革命に關する意見に賛成して貨幣の束縛壓迫をも打破し去られたい。若しこの束縛を打破し得れば、義務を果すには金錢を要しないが、若し打破し得ざれば、金錢が必要となり、紙幣の發行は多額とならざるを得ない。現在、廣西の紙幣は最早これ以上發行されてはやりきれないのである。若し此の上發行するならば諸君は將來如何にして之を負擔して行けようか。諸君は學者であり、廣西省四民の上に立つ者である。應に名

案を樹てて、速にこれを救濟せねばならない。若し金錢の束縛を打破し得れば、學校經營には金錢を必要としない。嘗つて北京に在つて、金なくして學校を開き、各校の學生が到る處で露天講演に參集した如きは、極めて好標本である。諸君が義務心を出して、責任を負ひ、各都市各市街に於いて、一般人に興利除害の事を講演するのも、また頗る好ましい事である。一切の事業の行はれない理由は、みな無知から起るので、若し之を知つたならば、行ふ事は極めて容易である。諸君廣西人の如きは日がな夜がな金がないいと苦しがつて居るが、貨幣が物貨より生ずるものである事を知らないからである。廣西省には物貨がないのであらうか、今回本大統領は廣西を巡遊し、さきに南寧に行き、今は桂林に來たのであるが、その沿道を視察して知り得た所では、地下には到る處に金屬礦、炭礦があり、地上は水も土地も頗る肥沃であつて、如何なる植物と雖もみな成長し得る。他は暫く措いて、單に諸君、桂林の周圍に就いて述べると、周圍には多數の石山があり、この石は（セメント）に製する事が出来る。若し「セメント」に製し得れば、一樽の値は五六元になる。換言すれば、一擔が一元餘に當るのである。諸君桂林の石灰幾萬擔があれば、それ丈、桂林の金が何萬元かある譯である。また現生の農産物、甘蔗、落花生、生果、五穀の如きも、若し交通に便利な立派な道路があつて廣東に運搬賣買すればいづれも極めて多額の金に上

るであらう。併し、現在交通の便がないので、運び出して賣買する事が出来ず、ただ其の地方に於いて賣買し得るに過ぎない。故に物貨はあつても決して金にならないのである。諸君はかくも多くの石灰岩や金屬、石炭などの物貨を有し乍ら、金に換へ得ない原因は、みな諸君がその用途と採掘の方法を知らないからであり、そのため、諸君は數百萬人の勞働力を有しつつ、なほ物貨を製造し得ず、利用する途もないのである。諸君の多量な農産物の多くを錢に換へ得ない原因は全く交通の便を有しないためである。故に諸君の既に費した勞働を僅かの金錢にしか換へ得ないのである。諸君の勞働力をして總て用ふる處あらしめ、礦産物及び物貨を産出し得んがためには、先づ知識が必要であり、知識あらしむるには、即ち教育が必要である。諸君の勞働によつて生産された礦産物並に物貨と、天然による農産物とを、いづれも運び出して賣買し、多額の金に換へるには、交通の便、即ち立派な道路のある事を必要とする。故に諸君が今日、本大統領を歓迎されるのに對し、本大統領が之に報いんとする第一は、教育の普及の必要、第二は、道路修築の必要である。この二つを本大統領は諸君が實行されん事を要求する。若し果して諸君がこの兩者を達成されたならば、その功勞は無限である。本大統領の提議は、即ち、諸君がこの無上の功績を成就せられんことを求むるに在る。而して諸君が此の無上の功績たるべき事を實行せらるる

ならば、それでこそ今日の此の盛大なる歡迎會に負むかぬものである。

## 軍人の精神教育

——民國十一年一月桂林に於いて雲南、廣東、江西各軍に對する演説——

### 第一章 精神教育

今日、諸君を一堂に集め、軍人の精神教育を授け様とするのは、乃ち諸君をして充分に軍人精神を有する者たらしむると同時に、前途非常の大業に任せしめんと欲するからである。諸君は本來、軍人であり、固より嘗つて軍人たるの教育を受け、また軍人たるの精神教育を受けて居る。ただ、諸君がさきに受けたのは、尋常普通の軍人の教育に過ぎず、非常の軍人たるの教育ではない。今、諸君の目前には非常の事業が横つて居るが、之れは必ず非常の軍人によつてのみ成就し得るものである。諸君は自ら非常の事業に當らんと欲するならば、則ち非常の教育を必ず受けねばならないのである。此の非常の教育とは何であるか。即ち軍人の革命精神の教育である。此度、諸君は遠く桂林より揚子江を渡つて北に向ひ、直に直隸北京を衝かんとしてゐるが、其の爲さんとする所のものは何であるか。卒直に云へば、革命である。革命とは、中國一切の政治上社



會上の舊習の汚れを一掃して、更に莊嚴華麗な新民國、民の有する所であり、民の治むる所であり、また民の享くる所の國家を作らんとするものである。之れが、今日天に順ひ人に應へる事であつて、志士仁人は之れを努めなければならぬ。吾人は、生を國に受けて、此の國歩艱難の時に當つたのである。種族の存亡は、各人ひとしく責任を有する。速に共に革命の責任を負ひ、以て此の非常の大業を成就せねばならない。ただ此の責任を負ふも、革命精神なくしては効果はあがらない。革命の事業は、十年以前に於いて、既に滿清を顛覆し中華民國は成立したが、而かも之れを以て成功とするには尙ほ早い。武昌革命後、所謂中華民國は單に其名有るのみで其實なく、一切の政權は、腐敗せる官僚と專横なる武人の手に握られ、愈々兵亂、水害、旱魃と全く寧歲なきに至り、人民の痛苦は一層甚しさを加へてゆく。之れ即ち革命が未だ完全な成功を見てゐないので、其爲に良好なる結果を收め難いのである。今回の革命は、今日までの未完全の事業を補足し、繼續して行ふものである。故に本總統は、此の行は、諸將士と同心協力して努力し、革命の時機に應じて革命の事業を建設せんとするのである。聲威の至る所、先を争つて響應し、糧をつんで慕ひ従はば、洵に兩者の交戦を待たずして既に勝敗は決するであらう。之は必然の勢であつて、疑を抱くべきものがないのである。諸君にして之を信ぜざれば、各國の歴史及び現今の時

勢を觀察するがよい。則ち革命が世界の潮流であり、また天理に順ひ、人の希望に應ずる事業である事を知るであらう。故に其の成功の證左は、豫め知る事が出来る。各國の中、米國の如き、佛國の如き、いづれも革命の先輩であり、最近の露國の如きも其の勞農政府は革命によつてつくられたものである。此等はその例である。

我國の革命は既に十年に及び、未だ著しい効果を收めないけれども、併し文化は日に開け、民智は日に進みつつある。現下の奸徒強暴の徒輩も、亦必ず民意に假託して始めて國內に存在し得るのであつて、之を以ても、時潮の猛烈にして人力を以て之に當るべからざる事を察知するに足る。故に此際、天命に順ひ人事に應ずる必要がある。即ち當に革命事業を以て自己の任となすべきである。端的に云へば即ち責任を負ひ得るか否かの問題である。此の問題の解決には、先づ革命精神の有無が問題である。革命精神を有すれば必ずや成功する、然らば革命精神は何によつて齎らされるか。それは精神教育によるものである。諸君の軍人たる所以は、軍人の資格を有する爲めではないか。嘗つて軍事教育を受けた爲めではないか。然らざれば執政者が諸君等を目して軍人々と云ふのは、誠に當つてゐない。今、此處に述べる所の精神は、諸君が此の精神を腦中に浸みこませて、須臾も離さず、造次顛沛の間と雖も守つて失ふなからん事を望むものである。

かくて後にこそ、軍人たりと云ふを得べく、革命を語るを得べく、成功をトし得るのであつた、之れに反すれば、則ち事みな否である。

今日の革命と古代の革命とは同一ではない。中國の古代に在つても、固より既に之れを實行した者がある。湯武の革命の如きは、帝王革命であるが、今の革命は人民革命である、この革命は即ち本總統が三十年前に提唱したものであり、この革命の主義は即ち三民主義であつて、一に民族主義、二に民権主義、三に民生主義である。第一の主義は種族革命、他種の民族を排除し、自己の民族を興隆せしめ、完全に獨立せる民族國家を組織するの謂である。第二の主義は、政治革命で、人民が直接政權に參與するの謂である。詳しく云へば、選舉權、官吏罷免權、複決權、立法權等の如きは人民が直接に之れを行ふもので、代議制度下の民権ではない。(本總統著す所の三民主義及び五權憲法参照)。第三の主義は社會革命、即ち經濟革命で、社會の財産を平均に分配し資本家に獨占せしめざるの謂である。三種の主義の大意は右の如くである。若し、種族革命を論ぜんか、さきの滿清專制時代には四億の人民が其の抑壓を蒙りながら、敢えて誰一人怪しむものもなく、姑息、一時の安きを貪る連中はまた民族主義を知らず、喜んで首をたれ、楽しんで臣僕となるを辭さなかつた。本總統が革命を提唱して以來、稍々覺る者を生じ、漢族は滿人の治を

受くべきではないと知りつつも、遂に遲疑逡巡するを免れなかつた。思へらく、滿人は既に優勝の地位を占め、根柢は深くして固い、大地を論ずれば二十省、兵力を論ずれば則ち陸海軍あり、身に尺土なく、手に寸鐵を帯びざる者がよし革命を鼓吹するとも、將に如何なる術策を以て之に勝つを得よう。これ螳螂の臂を張つて龍車に向ふに等しく、全く身の程を知らぬものである、と故に當時は余を嘲笑して狂人と云つたものである。それは此の事は絶対に不可能であると云ふ意味であつた。余は深く革命は天命に順ひ人事に應ずる事業と信じ、その不成功は、爲さざる也、能はざるに非ざる也と信じた。滿清の中國に於けるや、少數を以て多數を壓制し、野蠻人を以て文明人を壓制するもので、理に於いても勢に於いても、ひとしく不可である。我何ぞ憚れんやといふ、この決心を以つて、遂によく主張を貫徹し、革命の思潮をして漸次擴大せしめ、結局、武昌起戦によつて、民族革命は始めて實現し得たのである。これ則ち、革命黨員が革命精神を以て鑄あげられて居たからこそ成功したのである。惜しむらくは滿清顛覆後革命黨員は己れの凱歌を奏したのを以て意足りて前進を忘れ、政治上、社會上共に改良に意を用ゐなかつた。ために今日に及ぶも建設の事業がなほ完成しないのである。

今述べる所のは精神教育である。精神教育を知らんと欲せば、先づ精神とは如何なるもの

であるかを知るを要する。精神の何たるかを知らんと欲せば、當に先づ定義を下すべきである。定義とは、ある事物に就いて、簡單なる説明を以て、よくその如何なる事、如何なる物たるかを正確に知る事である。例へば人間は世界に於ける何物であるかを究むるに、哲學上より解釋すれば、人の人たる所以、人たるの眞義如何を確實に知つて、始めて完全なる答辯となるのである。若し、人は人也と云ふならば、之を定義と云ふを得ない。余の知る所では、古人が既に言つてゐる、「人は萬物の靈である」と。然らば則ち萬物の靈と言ふのが人の定義である。精神の定義如何に至つては、精確なる限界を求めんと欲しても、固より容易ではない。併し簡約して云へばただ凡そ物質でないものは、即ち精神となすも可である事を知る。

精神の何たるかは、須らく之を哲學上より研究すべきである。宇宙の内を大觀すれば、一切の現象は整然として配列され、種類は至つて夥だしい。今先づその手近なもの、小さい物から云へば、一室の内、一脚の卓の上にある茶碗、材木、腕時計等、自分の眼に映するものは、みなその名を指すことが出来る。之はその形體が求め得られるからである。更に一室一卓より推して廣西一省に至れば、地は大に物は博く、種類は更に多く、或は余の知り得ざる所のもの、名づけ得ざる所のものも有るであらう。廣西省より更に各省に推し、或は全國、或は世界に推し及ぼす時に

は、形體色彩等、多數の博物學者を集めてもその萬分の一をも考究し能はないのである。物の種類の夥しい事は、これによつて概ね察せらるるではないか。然れども、宇宙の現象を總括すれば物質と精神の二者以外に出づるものはない。精神は物質の對立物ではあるが、而かも實際は相助けて用を爲してゐる。從來科學の發達せざる時代を考ふるに、往々精神と物質とを絶對に分離して、其の二者は本來合して一たるを知らなかつたのである。中國の學者に於いては常に、體と用とを論ずる。何をか體といふ、即ち物質である。何をか用といふ、即ち精神である。例へば人の一身の如きは五官はみな體であり、物質に屬する。其の能く言語動作するものは、即ち用であつて、人の精神即ち之である。二者は相助けて分離するを得ない。若し遽に精神を喪失するならば五體は具はるとも、物云ふ能はず動作する能はず、用既に失して體も亦死物となるのである。此を觀察すると、世界に於いて、ただ物質の體のみを有して精神の用なきものは、決して人類ではない。人類にして精神を失へば則ち完全なる獨立人ではない。現今科學が進歩し機械も發明されてゐる。或は人造人間など、生れ乍らの人間に比較して毫も異なる所ないものが製造されしやう。併し人の精神は創造する事は出来ない。結局、直ちに之を人なりと云ふを得ないのである。人は精神の用を有し、單に物質の體を恃むものではない。我既に人たるからには、則ちまさに其

の精神を發揚すべきである。そして、それが即ち人たるの本分を發揚する所以である、故に革命は精神に在り、革命精神は革命事業の産んだものである、

精神と物質とが相よつて用をなすことは、前述の如くである。故に全然物質がなければ、精神も亦表現するを得ない。併し單に物質にのみ恃むのはよろしくない。現代人の心理は往々物質方面を偏重する。北伐について云へば、小銃を必ず一律に互る様に要求するか、さもなくば彈丸は必ず補充せねばならぬ。其の他、種々の武器も亦宜しく精銳、完備すべきである。さうでなければ、戦ひ得ないと人は云ふ。余の考よりすれば、武器は物質である。此の武器を使用し得るのは全く人の精神によるものである。兩々相比較すれば、精神の能力は實に其の九分を占め、物質は僅に一を占め得るに過ぎない。何を以て然る所以を知るのであるか。試に武昌革命を以て例に引かう。當日の滿清の武器と革命黨員の武器と、物質能力を以て論ずれば、晉に干に對する一位の比較ではなく、革命黨員が獨り卵を以て石にあたるを恐れず、敢えて毅然として實行したのは、當時漢口の革命黨の機關が既に曝露され、黨員名簿も搜し出され、兵士の入黨者はみな取調べを受けて悉く四川に赴かしめられ、僅に砲兵と工兵の二營が、武漢に駐屯するのみであつた。其中に同志はなほ多數含まれてゐた。熊秉坤は新軍の一小隊長に過ぎなかつたが、時機既に切迫して

正に黨員大搜索が始まらんとして居るのを見て、若し我先じて人を制せずんば、終に人に制せられる。死地に置かれて生きてゐるのは、死に等しい。速に事を擧ぐるに如かず、と決心し、よつて此の意見を同志に告げた。所が諸同志はみな彈丸がないと答へた。後、熊秉坤は退軍した其の友人から二盒の彈丸を借り受けて同志に分配したのである。革命軍の恃む所の武器は僅にこれ丈であつたが、銃聲一度起るや、砲兵隊先づ響應し、瑞徵、張彪は相次いで逃竄し、武昌は遂に革命黨員の手に落ちた。彼滿清の軍隊は多からざるに非ず、小銃彈丸備はらざるに非ずして而も斯くの如くであつた。革命の聲が漸く傳播する時に當つて、瑞徵は某國領事に相談し、若し湖北に事あらばその軍艦を出動せしめて援助せん事を請ふたのである。作戰は此くの如く周密であり兵力は此くの如く雄厚であつて、而かも革命黨員は二盒の彈丸を以て之れを打破つたのである。諸君試みに思へ、二盒の彈丸は多くとも五十發に過ぎない。若し一々みな命中するとも、五十人の敵を倒すに過ぎない、どうしてよく武昌を打破し得ようか。余思へらく武昌を打破せるものは革命黨の精神であると。兵法に曰く「先聲人を奪ふ」と、所謂先聲とは即ち精神である。以上に従つて觀察すれば、物質の力は小であり、精神の力は大である。武昌の一役之れを決すである。之れはただ中國に就いてのみ云ふも、既に此の先例があるのである。之を更に外國に就いて云へ

ば、嘗つて伊太利に「ガルバルジー」なる有名な革命家があつた。彼も亦之れと云ふ武器の力を有する譯ではなかつたが、海を渡つて城を攻むるに當つて、一千人を以つて三萬の敵と相對峙すること四五日に及び、急に別路より襲つて城を落した。これは戰略上からも戰術上からも、勿論如何にしても勝を得る事は出来ない筈であるが、事實はかくも相懸隔してゐるのである。正に寡を以て衆に勝つと謂ふ事は、外ではない精神が物質に勝つたのである。又日露戦争の如きは、露國の兵力は日本に數倍し、未だ戦はざるに先だつては、誰しも日本の露國に對するは羊豚を以て猛虎の口腹を充たすに當ならず、必ず碌な事はないと想像したのである。何故に其戦争の結果は、遂に露國が敗れて日本の勝利に歸するに至つたのであるか。外でもない、露國の敗北は、精神なきための敗北であり、日本の勝利は精神を有したが爲めである。

諸君は、彼の牛と牧童とを考察せよ。牛の力の牧童より大である事は、誰もが知つてゐる。而して牧童は一條の繩を以て牛を引いて、東すれば東に、西すれば西に動かし得るが、牛はよくその角、蹄を奮つて牧童に反抗する能はず、却つて喜んで首をたれ、命之れ聽くのは、則ち何の故であらうか。牧童に精神あつて牛に精神なき故に、牧童の力は牛に及ばざるも、而かもよく精神を以て、之れを制馭し得るのである。之れは最も明白でわかり易い例である。

以上で明な如く此度の北伐もまた、精神を恃む事によつて能く勝を制し得るのである。敵の彈丸の多寡、味方の彈丸の多寡は問はずともよい。ただ我が精神如何を問ふのみである。若し精神なければ、彈丸は豊富なりと雖も、それは敵に資するに過ぎない。一旦戦に臨んで之を遺棄すれば、敵の運び去る戦利品となるではないか。故に兩國交戦して、よく敵國の戦闘力を絶滅するものは、即ち敵の精神を奪ひ、その戦闘能力を失はしむるに在る。兵法に曰く、心を攻むるは上たり、城を攻むるは之に次ぐと。心を攻むる者は、先づ務めて敵の精神を打破するを要する。城池を取るのには、猶ほ其の後の事である。去年廣東軍が廣東に歸還し、既に惠州まで下つて來た時、廣西軍はその風をきき膽を失つて、先づ自から逃竄し、我が軍は刀に血ぬらすして凱歌して廣西軍に入つた。これ、物質の恃むべからざるを知るに足るものである。所謂國を固くするに山谿の險を以てせず、天下を威するに兵革の利を以てせざる、その方法は何に在るか。精神を以て之をなすのである。

諸君はみな嘗つて軍事教育を受けた人々で従つて軍人精神に富んで居られる事は無論である。ただ現今の軍人たるには、以前とは異つて、須らく特別の精神を具へて革命軍人となつて、まさに國家を危険より救ひ出さねばならぬ。現勢より論ずれば、中國分割論は表面上鎮靜に歸せるも

の如くであるが、實際はさうでない。以前論議頗る喧しかつた時代には、我國の人士は亡國と民族絶滅を痛心して、之を救はん事を思つた。武昌革命以後は、次第に鎮靜に歸し、外國が再び分割を口にせぬため中國も遂にともに之を忘れて居るが、それは大間違ひである。現今の中國の前途は以前に比して雲行險惡なる事は更に甚しい。南北分立の時局は、亂れに亂れて數年に及ぶも未だ統一し得ず、北方内部もまた再び各々旗幟を樹てて張作霖、曹錕、吳佩孚等の如きはそぶ地盤に割據し、兵を擁して自ら衛つて居り、政治の混亂は滿清にも過ぎ人民は轉々流離してゐる水深くしかも火熱せる中に在るが如き有様で、速に栓をぬいて救はん事を待つて居る。之を救ふの方法や如何。須らく革命の手段を用ふべきである。革命手段を用ふるには、革命の責任を負はねばならぬ。革命の責任とは救國濟民の責任である。諸君は既に軍人たり、また革命時代の軍人として、なほ此の責任を負ふ事能はず、國家が内亂より外患を招くを坐視し、平然として國は亡び民族は絶へるのを迎へるならば、之れ誰の贖職を咎むべきであらうか。

この聽講者諸君の中には、雲南軍の人がある。雲南人は必ず雲南の事を知り、また雲南の事を聽きたいと思ふであらう。雲南に境を接して居る土地には、緬甸があり、安南がある。緬甸は英國に征服され、安南は佛國に併吞されて居る。例を安南にとつて云へば、佛國は安南に對して專

ら民を愚にする政策を採用してゐる。諸君は安南人の讀む書は何であるかを考へて見られよ。それは相變らず昔の八股文なのである。凡そ新知識に關しては毫も聞知せしめず、且つ絶対にさうした事を禁止してゐる。嘗つて三十餘人が安南より潛かに日本に留學したが、その事を聞知した佛國政府は日本政府に其の全部の送還を要求した。日本は國交を害するを恐れて遂に其の請求に應じた。送還された後此の三十餘人の生命如何は知る由もないのである。英國が緬甸に對する場合もまた此の政策を用ひてゐる。蓋し、其の知識が増進し、思想が發達して、脱離して獨立せんとするのを恐れるからである。緬甸、安南の如きは、實に我國にとつて前車の覆轍である。これを見て、振作發奮するに至らず、なほ私利私欲を事として四分五裂の局面を醸成してゐるこの中國の前途を見て、どうして寒心せず居られよう。諸君は更に英國の政策をみて、覺悟する所が有らねばならぬ。彼は西藏の兵を以て打箭爐を來り攻めたではないか。西藏人は中華民國五族の一であつて、勿論明白に中國人である。中國人にして中國を來り攻め、中國人として外國人のために力を貸して中國を來り攻むるのである。かかる一例は、滿清の咸豐時代にも起つた。英佛の聯合軍が阿片事件から中國と戰端を開くや、英國は即ち中國の廣東潮州の人を集めて兵とし、之を潮勇と號し、之をして、大沽を攻め、天津を攻め、北京を攻め、圓明園を焚かしめたのであ

る。凡そ此の戦役に於ける潮勇の行動は中國人にして中國を攻め、中國人にして外國に力を貸して中國を攻めたものである。他にこれ以上の痛恨事が有らうか。現今の國勢は此處に於いてか、民は窮し財は盡き、既に其の頂點に達したのである。凡そ中國人として、またかかる際の軍人として、若しなほ救國濟民を念とせず、外國をしてほしいままに中國を分割せしむるならば、中國は手を束ねて斃るるを待つのみである。諸君は固よりみな嘗つて軍事教育を受けた人々で、無論軍人の職とする所は、外患を防ぎ、國家を守護するに在る事を知つて居る筈である。今先づ、中華民國は完全なる獨立國家であるか否か、外國の束縛を受けぬか否かを問ひたい。余から觀ると、勿論、未だ完全に獨立してゐない。國會は本總統を選出せりと雖も、内亂は未だ鎮定せず、北方の勢力範圍内に屬する省が未だ多數を占めて居る。北方は既に對外的な資格を喪失したが、正式政府は未だ各國の承認を経ない。この危急存亡の時に當つては、先づ内亂を平定し革命以て國を救ふに非ざれば不可であり、革命以て國を救ふには、革命精神を有するに非ざれば不可である。革命精神がなければ、則ち佛國の屬領安南の如く、結局、勢力に屈伏せしめられる。(十四行削除) 故に今日、救國濟民には革命が必要である。革命には須らく精神あるを要する。此の精神が即ち現在の軍人の精神である。併し所謂精神とは、とりとめもなく言ふのではない。智仁勇の

三が此の軍人精神の要點である。よく此の三精神を發揮し得れば、始めて民を救ひ、國を救ふ事が出来るのである。以下章を分つて更に詳述しよう。

### 第二章 智

軍人の精神は智仁勇の三者である。先づ智から述べよう。智とは、聰明にして見識ある事の謂である。之れが即ち智の定義である。凡そ一事について、自己の聰明、見識を以てすれば、充分明白に了解し得て、之が對策も生ずる。そして根本的には道義にも須らく合しなければならぬ。汝詐つて我虞るるが如きは智ではない。智の範圍は甚だ廣く宇宙の範圍が即ち智の範圍である。故によく過去未來を知るものは亦之を智といふ。吾人の世界に於けるや其の智識も事物の増加に従つて同時に進歩するを要する。然らざれば次第に老朽退歩して、精神は日に銷を生ずる。之れ智の反對、則ち蠢となり愚となるのである。

智は何によつて生ずるか。其の由來する所がある。之れを約言すれば、三種ある。一は天生によるもの、二は學力によるもの、三は經驗によるものである。中國古代の學者にも亦、生れながらにして之を知り、學んで之を知り、困んで之を知るといふ説があるが、之とほぼ同様である。凡そ人の聰明は、天より享けた厚薄によつて多少の差別を生ずる。多くを享ければ大聰明、少し

く享ければ小聰明となるが、其の智たるは一である。之れは天生によるのである。若し學問に力を致し、即ち多數人の聰明を集むれば、之れ亦聰明である。ただに現代に則るのみならず、且古人を友とする。かくても時には天生の智に比較して勝ることが出来る。例へば甲乙二人あつて、甲は聰明だが學を好まず、乙は聰明甲に及ばぬながら學を好む事は甲に過ぎた場合、其の結果は乙の得る所は必ず甲より多いであらう。之れ即ち力學によるものである。此の外天生によらず、力學にもよらず経験より得るものがある。諺に曰く、「一事を経験せねば一智を増さない」と、故に經歷した事が多ければ、智識は從つて増加し、所謂、其の能はざる所を増益する。之れは経験によるものである。要するに、智の山つて來る所は、此の三者を出でない。

軍人の智は一に是非を別ち、二に利害を明にし、三に時勢を識り、四に自他を知るに在る。

諸君は皆軍人である。須らく軍人の智が、軍人精神の一部である事を知らねばならない。特に軍人の智が、是非を別ち、利害を明にし、時勢を識り、自他を知る事に在る事を要する。更に左に一々區別して申述べよう。

是非を別つとは何を言ふのであるか。凡そ軍人たるには、先づ自己の立つてゐる地位と其の負つてゐる責任の如何に就いて智を要する。軍人とは、社會の分業の一で、國家及び人民を保護防

衛する責任を有するものである。何をか分業といふ。社會の事業は一人で其れに任じ得るものではなく、農業、工業、商業の如き、みな吾人が自ら其の長所を審らかに知つた上各々其業に携つてゐるので、之れを分業といふのである。更に例を以て明にすると、若し余一人を孤島に漂流せしむるならば、食事の用意から、魚つり、果物の蒐集など一切分擔せしむる人が他にないのである。都會の様に思ふがままに、食事には料理番あり、魚釣り、果物蒐集みな各々其の仕事をする。者が有るといふ譯には行かぬ。故に一人の世界は、社會の世界とは大いに異つて、腹ごしらへを欲すれば、どうしても數役を兼ねなければならぬ。其の困難察すべきではないか。獨り飲食のみ然りと云ふのではない。風雨を避け、寒暑を凌がうと欲しても、自ら大工となつて家屋を作らねばならぬ。都會に於ける如く、大厦高樓を建てるのに、ただ財囊をといて金さへ出せば、自から労働者の仕事をせずとも希望は果される様なものではない。かく觀察すると、一人の單獨生活は多數人の共同生活に比較して困難さに差異がある。若し同時に孤島の漂流者の數が、十人に及ぶ時は、即ち食事、魚釣り、果物蒐集、小屋がけ等の仕事は、必ずしも一身に引受けずとも分業によつて行はれる。かくすれば勞苦も大いに減少し、得る所の効果も亦多大である。社會は即ち分業の行はれる最大の場所である。農工商等の各種の組織を合して始めて一大社會を爲してゐる。



故に社會の事業は愈々別れるれば別れる程多數となり、益々活動的となる。諸君の軍人たるは、亦社會の分業の一に過ぎないのである。彼の農たり、商たり、工たる者は、各自其の事とする所があるため、自ら兵器を執る事を得ないので、其れで軍人によつて保護せられん事を望んでゐるのである。而して軍人の生活は、即ちみな彼等から支給され、衣食住及び行旅の四者、いづれも自ら働く要なく、人が代つてして呉れるのである。然らば軍人の仕事は何であるか、社會に對して擔任する所の職務は何處に在るのか。其れは人民の保護と國家の守護とである。凡そ軍人の分として、まさに爲すべき所の事も亦之に在るのである。然らば如何にせば此の衛國保民の職務をよく盡し得るであらうか。其の最も先決を要し、且つ最も重要な事は、是非を別つ事である。是非は何によつて別つのであるか。軍人の民を保護する所以は民を利すれば則ち是であり、民に不利ならば即ち非である。國を護る所以は、國を利すれば即ち是であり、國に不利ならば即ち非である。是非明かならざれば、即ち最早軍人精神を有せざる者である。何ぞよく國を守り民を衛り得よう。余より觀れば、現今の軍人には、是非をよく明にする者なきには非ざるも、他方また利のため智が昏まされる輩があり、往々ひたすら目前の事のみを顧み、自分は武器を有してゐる、人民に對し求めて得ざるものは何物もないと考へる。是に於いてか軍人の名譽は地を掃ひ、當然

盡さねばならぬ軍人の責任も亦全く拋棄され、民を保護する能はざるのみか、却つて民を害する様になる。社會は如何にして此くの如き軍人を責び、國家は如何にして此くの如き軍人に依頼しよう。諸君は既に軍人たる以上、當に社會の分業である事を考へ、人民に對し國家に對して責任を負はねばならぬ。而して、よく分業をなし、よく責任を負ふ所以は、即ち是非を別つに在る。是非の分別は即ち道に合するか、合しないかに在る。其のいづれを擇ぶかは、ただ諸君に一任する。

利害を明かにするとは何を云ふのか。利害と是非とは本來相結合して生ずるものである。例へば、軍隊の通過するところ、眞に秋毫も犯す所なければ人民は必ず先を争ひ、後るる事を恐れる様にして、雷殛箠食して之を迎へるであらう。故に民を利すれば、民も亦我に利を與へるのである。其の強を恃んで騷擾すれば、民は之を望み見て虎狼を避くるが如くに走り去るであらう。去年、廣西軍と廣東軍との開戦の際、廣西軍が正に前方に在つて攻撃せんとする時、往々にして後方の人民が其の不意に出て種々の方法を用ひて之を破壊した。或は兵器彈藥を奪つたり、或は食料品を供給しなかつたりしたのである。之れは、廣西軍が平生人民を虐待して居た爲め、人民が之れに報復したのであつて、人を害する事は結局自己を害するものである事を知り得る。利害如

何は自ら審らかにするに在る。併し乍ら、利害は務めて、其の遠きもの、大なるものを求め、其の近きもの、小なるものを食つてはならぬ。何をか遠きもの、大なるものと謂ふのであらう。軍人は國を衛り、民を衛るを以て己が職責とするのであるから、其の利も亦此點に在るのである。之は我國現下の國勢に基づかねばならぬ。故に利害は是非と相結合して生ずると云ふのである。是が即ち利であれば、其の利は爲すべきである。非が即ち害であれば、害は行つてはならぬ。之を明にして始めて智と云ふべく、始めて軍人たり、且つ革命の軍たり得るのである。

時勢を識るとは何を云ふのであるか。諸君は今回、遠く廣西に來り、更に揚子江を渡つて北京を衝かんとしてゐる。其の志は中國を統一して、完全に獨立せる新國家を形成するに在るのである。では此事は、如何なる事業であるかとたづねたい。此の事を爲すに當り、果して如何なる事を把握して居らねばならぬか。時勢を審かに識らねばならないのである。古人は、智慧ありと雖も勢に乗するに如かず、(磁基(農具)ありと雖も時を待つに如かずと云つてゐる。即ち時勢を知る事の必要は、固より獨り軍人のみに限るものではないが、軍人に於ては殊に必要である。何を時と云ふのか、之は時機の成熟せるか否かの問題である。成熟すれば事を爲し得て、且つ容易であるが、成熟せざる時は、爲し得ず且つ困難である。例へば果樹を栽培するが如く、果物が既に

熟して居れば採つて之を食ふに其の味は必ず美味であるが、未熟の時には之と反對である。稻作でも亦同様であり、未だ收穫の時期至らねば、助長せんと欲しても、其れは不可能である。何を勢と云ふのか。即ち勢力の順逆と難易との比較が之れである。例へ同一の石でも、之を山下に推し落せば勢は順であり力を用ゐる事容易であるが、若し之を山上に運ぶとすれば、勢は逆であり力を用ゐる事困難となる。時勢の宜しきを得るには、此くの如く審らかに考慮せねばならぬ。此度の北伐は、義軍を以て北方の軍閥官僚を倒すので、正に熟せる果物を採り、熟せる稻を刈るが如く、既に其時至つて居るので、手に應じて落ちるであらう。又高山より石を推し落すが如く、勢に乗じて甚だ速に、毫も力を費すことがないであらう。現今北方の人民は、北方の腐敗せる政府に對し、厭惡の情既に其の極に達して、速に陷穽の中から救ひ出す様に南方の救ひの手を待望して居るのである。大軍一度臨まば、勢破竹の如くであらう。之れ石を山下に推落す例の如く、順にして且つ容易である。ただ問題は、推すか推さざるかに繫つて居り、推せば必ず落下しないものは無いのである。或者は、北方の軍隊は兵器が我軍に比して整備してゐる。北伐豈よく必勝するを得んやと考へて居るが、時勢既に此處に至つては勞半ばにして功は之に倍し、之を爲す事甚だ容易なるを未だ知らないのである。我軍は道々多くの援助を得るが、彼は衆は叛き親しき者も

離れ去るので、軍隊は多くとも、一般人と同様であり、兵器は充分でも、預り物である。故に時と勢とに乗ずれば成功せざるは無い。諸君は猶ほ、國家が未だ完全に建設されないため、軍人もつ希望は甚だ微弱であり、且つ漠然たるもので確と知る事も出来ないと考へられるであらうが此の完全なる國家をつくるのが軍人の責任である。完全なる國家が出来、遠大なる利益を有するに至れば、英米各國の軍人待遇方法を以て、諸君と共に論議しやう。英米の軍人待遇方法は、凡そ兵役に服して一定の年限を経て退役したものには、給料全部を給し、國家は其上相當の業務を擇んで従事せしめ、出生せる子女は國家に由つて給養される。又其の子が服役して、父母を扶養する者が無ければ、また國家が之を扶助する。其の他戰場に於ける死亡者の子女に對しては一定の年限、即ち男子成年、女子は婚嫁の時期まで之を扶養する。父母は終身扶養し、妻の再嫁しないものにも同様である。彼の英米各國の軍人を優待することは此くの如くである。故に軍人もまた争つて死力を盡して國家を衛るのである。我國の軍人は、未だに完全なる國家を有せざる爲め其の前途はどうであらう。希望はどうであらう。みな豫斷する事が出来ないのである。或は今日入隊して明日解散するやも計られない。雲南軍に就いて云へば、ただ完全なる國家なきため、本省を遠く離れて轉戦する事多年、其の苦痛は最も甚しい。今後、自己の遠大なる利益を求めんと

欲するならば、此の革命の時機に乗じて、革命手段を用ゐて新國家を造り出すべきである。而して英米各國の軍人の如く、退軍すれば即ち給料全部を給され、父母妻子も亦みな扶養される事になればそれこそ軍人の利益の、遠くして且つ大なるものである。若し此くの如く行はず、徒らに近利小利を食り、今日は一商店を、明日は一富豪を奪掠し、甚しきは拉夫（人夫徴發）に名を借りて、人を脅迫するとも、得る所は殆んどなく、怨と謗は積つて山の如くなり、ただに口にする程の利益なきのみならず、徒に大害を受けるだけである。即ち去年廣西軍が後方の廣東人の騒動を受け、遂に一敗してまた收拾すべからざるに至つたのは、此の一例である。軍人は救國濟民の責任を有するものである。宜しく新國家の建設を思ふべきである。而して自己の一生、並に子孫の依頼する所たらしめば、其の利は獨り軍人にのみ止らず、四億の人民がみな惠澤を受けるのである。利の遠大なる事斯の如くである。若し僅かに目前の小利近利を貪るのみならば、實は其れは害であつて、利ではない。利害明かならざれば最早自ら其の身を衛る事を得ない。又何くんぞ國を衛り、民を衛り得よう。時機未だ至らぬのであるか。實は十年以前に既に成熟してゐたのであつた。若し武昌革命の際、勢に乗じて北京を打破り、摧破して廓清したならば、北伐が、今日に遅れる様な事には決してならなかつたのである。之れ即ち、果實を栽培し稻を植えるが如く

其の成熟の期に於て之れをとり刈らねば、遂にまた腐爛してしまふものである。時は失ふべからず、一度誤つた以上、再び誤る事は許されない。願はくば諸君、大いに勉められんことを。

自他を知るとは何をいふのであるか。古人曰く「己を知り彼を知る。百戦百勝」と。彼とは敵である。現在北方の軍隊は其の内容極めて雑駁で凡そ三大部分に分けられる。一は奉天派の張作霖、二は直隸派の曹錕及び吳佩孚、三は安徽派の段一派の軍隊、浙江の董、福建の李、陝西の陳の如きは此の一派である。此の三派は兵力相等しく、同床異夢の有様で、相争ひつつも、而かも敢えて先づ動くものはない。即ち相對持の形勢である。獨り吳佩孚は此間に跳梁し、奉天派、安徽派のいづれからも忌まれて居る。吳は元來一貧窮秀才であつたが、旅長となつてからは、南方の金錢を騙り取つて軍隊を擴張し、屢々通電を發して共和に賛成し、自治を建設するを以て口癖にして居たので、一時は人々も彼に欺瞞されたのである。北方の偽政府は、また彼を頼りとして萬里の長城の如き思である。彼は元來、督軍にはならぬと宣言したが、今はどうであるか。偽政府の命によつて、兩湖巡閱使である。彼は元來自治を擁護すると頻りに稱しながら、此度湖南に攻め入り堤を切るが如く大軍を殺倒させたので、湖南、湖北の人民は無慘にも生命を荼毒され、彼の人々は怨を呑むのまあり、争つて彼の肉を喰ひ其の皮を尻に敷かん事を欲してゐる。其の名

譽は最早地を掃つて空しい。即ち彼の内部も亦頗る動搖し、某々、並に舊部下の某々の如きは、亦我軍に心を寄せ、さき頃人を派して了解を求めて來たのである。吳佩孚は、自ら天怒り人怨むを知り、恐らくは北伐軍に當り得ないであらう。近來、また代表を廣東に派遣したが、其の心中如何は特に測るべからざるものがある。將來、よく戈を倒しまにして徐世昌に抗し得るや否やも亦未だ知り難いが、現下の情勢を以て言へば、彼と張作霖とは殊に勢として兩立しない。故に後顧の憂がある。更に約言すれば、則ち此の三派の人々は、固より一人として、北方政府に對して、忠を效し、力を盡さうといふ者はないのである。以上述べた所は、敵の情形であるが、自己の情形に至つては果して如何。兩廣には固より問題はないし、雲南、貴州、四川は等しく一致し湖南も亦湖北に對し反撃を準備しつつある。此外に散在する北方軍隊中には、我が同情者が相當多數である。此の上は、唯共に革命の責任を負ひ、革命精神を發揚し、之を以て敵を制するならば何の敵か破れざらん、之れを以て城を攻むれば何の城か克たざらんである。之れ即ち、南方には主義あるも、北方には主義なく、南方は公の爲めにし、北方は私の爲めにするからである。主義を有するものと、主義を有せざるものとの戦ひ、公の爲めにするものと、私の爲めにするものとの戦ひ、此の戦の結果は、とふまでもなく明白である。單に、今回本大總統が廣西に來つて受

けた人民の誠意ある歓迎を見ても、其の一斑を窺知するに足りるのである。軍人の智が前述せる如く、是非を別ち、利害を明にし、時勢を識り、自他を知るの四者である事は固より疑義がない。ただ望むらくは、諸君軍人たるものは、將校たると士卒たるとを問はず、人民に對しては仁義を以て重しとなし、須らく人民と自己とは一體であり利害は共通であり、分業して事に當つて居るに過ぎぬ事を理解せねばならぬ。

吾人軍人は、耕さずして食ひ、織らずして着て居るが、彼等農、工、商たる人々が我々に衣食を供するのは、即ち我等の保護を期待するからである。若し保護し得ず、却つて之を傷け害して彼等が相率りて去るに至れば、また敢へて農工商を營む者はないであらう。かくては軍事の衣食は將に誰が供給するのであるか。故に其の害を受けるものは結局自己である。故に軍人の智は、須らく道義に合するを以て基準とせねばならぬ。諸君は既に各々天生の聰明を有し、嘗つて軍事教育を受け、雲南軍はまた皆千軍萬馬の間を往來して軍事上の經驗に富んで居て智の由つて來る源は、固よりみな具備して居るのである。誠によく其の精神を奮起せしめ、發揮するならば、何ぞ北伐を愛へ又何ぞ北伐のならざるを憂へんやである。

## 第二章 仁

仁と智とは同一ではない。何によつて之れを知るか。智の貴ぶ所は、よく利害を明にするに在る。故に明哲保身、之れを智と云ふのである。仁は即ち利害の如何を問はない。身を殺して以て仁を成し、生を求めて以て仁を害するなく、仁を求めて仁を得、之れを以つて怨む所がないのである。仁と智の差別は此くの通りで、定義は、此邊から生じて來る。中國古來の學者で、仁を説くものは一にして足らないが、余の見るところに據れば、仁の定義は、實に唐の韓愈の云へる如く、「博く愛する、之れ仁と謂ふ」のを敢えて適當であると考へる。博愛とは、公愛であつて私愛ではない。即ち、天下に飢ゑる者あるは、己が之れを飢ゑしめた爲めであり、天下に溺るる者あるは、己が之れを溺れしめた爲めであると考へる事であつて、彼の父母妻子を愛する事とは差別がある。其の愛する所が大であつて婦人の仁と比較すべきではない。故に之を博愛と云ひ、能く博く愛するのを即ち仁といふのである。

仁の種類は、一に救世の仁、二に救人の仁、三に救國の仁である。

仁の種類には、救世、救人、救國の三者があるが、其の本質は博愛である。何を救世と云ふのか。それは宗教家の仁である。佛教、耶蘇教の如きは、みな犠牲を以て主義となし衆生を救済する。佛教の中國渡來當時には佛教を排斥する者が頗る多かつたが、佛教徒はよく終始堅く持して

動かす其の主義を宣傳して強大なる勢力を占むるに至つた。耶蘇教も亦然りで、獨り中國に於ける傳導者が嘗つて教會堂を破壊され、時には布教師が害を蒙つたのみではない。外國に於いても新教は、いづれも反對に會つたが、其の信者はみな之れを顧みず、また毅然として到る處に宣傳して少しも退嬰しなかつたのである。蓋し衆人を感化するを以て自己の本分として此のために死するならば光榮と考へて居たからである。之れが所謂、身を捨てて世を救ふ宗教家の仁である。救人と云ふのは何であるか。即ち慈善家の仁である。之れは、善を樂しみ施與を好むを以て自己の事とするもので、例へば寒さに苦しむ者には自己の着物を脱いで之れに着せ、飢ゑたる者には自己の食事を之れに與へるが如く、衆人を救濟するを本旨とし、物を吝しむ所がない。郷に在れば、一郷の人其の仁を稱へ、邑に在れば一邑の人其の仁を稱へる。専ら財を投じて人を救ふのは慈善家の仁である。救國と云ふのは何であるか。即ち志士愛國の仁である。宗教家、慈善家と其の心術を同じうするけれども其の目的を異にして居り、専ら國家のために死力を盡し、生命を犠牲にして厭はざるものである。故に愛國心強ければ、其の國は必ず強く、反對ならば必ず弱い。誠に日本に例をとれば、最初は弱小であつたが、露國に戰勝後は、一躍して列強と相對峙して居る。其の理由は何處に在るのであらうか。即ち日本人の愛國心に存するのである。では愛國心は

何によつて知る事が出来るか。旅順の役に當つて、日本は港口を封鎖して露艦の出入路を閉塞せんと欲したが、それには若干の船舶を撃沈せしむるを要する。而かも之れは九死に一生の事である。故に日本の司令官は命令によつて之れを行ふを欲せず、諸將士の志願者を募つたのであるが、決死の士數百人を以て足りるのに、其の結果之れに志願して名乗りを擧げる者遂に數千に達し、抽籤によつて之れが採否を決したのである。傳へ聞く所によれば當時抽籤に應じた甲乙兩人は互に参加を争つたが、参加するを得なかつた方は、竟に海に投じて死し、以て其の決心を表示した。此の事によつて一軍大いに感動して日本は遂に露國に打ち勝つたのである。此れ所謂生を捨てて國を救ふ、志士の仁である。

軍人の仁は果していづれであらうか。軍人の目的は救國に在る故、軍人として國家の爲めに盡力すると云はぬ者はない。併し專制國の軍人と共和國の軍人とは、また多少相違がある、專制國家は即ち君主個人の財産であり、君主を認めて國家となす故、此の專制國の軍人に在つては、ただ一人一族のために忠であり、君主のために死力を出す、人民のために犠牲となるものではないと云ふべきである。共和國に於いては國家は全體の國民に屬して居る故、犠牲も同様に國家のために盡力するに在る。專制國と共和國との軍人の相違點は右の通りである。然らば、國家の本

質の何たるかを、軍人たる者は知らねばならない。獨逸の政治學者の説によれば、國家は三種の要素を以て成立してゐる。第一に領土である。國は大小に論なく必ず一定の土地を其の根據とする。此の土地が即ち領土である。領土とは、此の國家權力の及び得る土地の範圍である。第二は人民である。國家は最大なる團體であつて、人民は即ち其の團體の一員である。人民なくして土地のみを有するとも、國家を構成するを得ない。第三は主權である。土地有り、人民有るも、統治の權力がなければ國家を形成するを得ない。此の統治權は專制國に於いては君主一人に屬してゐるが、共和國に於いては國民全體に屬するものである。

現今の中華民國は、共和國であるとは云へ、なほ完全なる眞正の民主國ではない。即ち武昌革命以後は官僚政治、武人政治であつて、一切の政權は悉く彼等の手によつて自由にされて居る。勿論彼等は共和主義の何たるかを、又國利民福の何たるかを解せず、救國濟民に就いて何等の責任を感じない。我が南方の軍人にして救國濟民を心にとめず、また此の救國濟民の責任を負はねば、いざ知らず、此の責任を負ふからには、出鱈目や空言では濟まされない。須らく一定の主義を有せねばならぬ。かくて始めて仁を成し得べく成功を收め得るのである。さきの革命の先輩烈士が、前者仆るれば後者起ち、死を視ること歸するが如くであつたのは、即ち主義の爲めに

犠牲となつたからである。主義とは何か。三民主義之れである。既に第一章で略述したが、此處にまた分析して説明しよう。

三民主義の第一は民族主義である。此の主義を述べようとすれば、武昌革命以前に溯らねばならぬ。當時漢民族は滿人に支配され、其の土地全部は占領され、二百年間韃子を尊んで皇帝と仰いで居たのである。韃子とは滿洲人のことで、或はまた韃虜とも稱する。初めて關内に侵入して來た際には、起つて之れに反抗する者が多かつたが、結局實力に乏しくて遂に失敗した。揚州十日の慘殺は、眞に痛心の史實である。之れより以來、滿人は日に壓制手段と、民を愚にする政策とを用ゐたので、人民は漸く亡國の痛恨を忘れ甘んじて服従するに至つた。余が革命を提唱して以來、人心稍々感動し、民族主義は漸次勢力を得た。一般志士の害に遇ふものも頗る多かつたが、一人を殺せば復た十人を生じ、十人を殺せば復た百人を生じた。之れに由つて革命思想は全國を震盪し、武昌の起義に及んで、始めて滿人を顛覆し、漢族を復活したのである。然らば、最早今日に至つては、民族主義を説かずともよいではないか。否。さきには、滿人が他民族であり乍ら中國に入つて、帝號を僭稱した故に、吾人は一齊に起つて革命したのであるが、今日は滿族既に去ると雖も、中華民國の國家はなほ半獨立國たることを免れない。所謂五族共和は、實に人

を欺く言葉である。蓋し、藏、蒙、回、滿はみな自衛能力なく、民族主義を發揚し、藏蒙回滿をして我が漢族に同化せしめて最大の民族國家を建設するのは、漢族の決心如何による。若し今にして發奮振起せざれば、將來恐らくは他國の奴隸となるであらう。發奮振起の責任は、最も軍人たるものに頼らねばならない。軍人は國家を擁護するものである。故に須らく中華民國をして獨立國の地位に到らしめねばならぬ。然して後に、民族主義は始めて圓滿に解決されるのである。然らざれば、滿族は既に排斥せられたが、滿族に代つて起つ者は虎視耽々、正に必ずや多數であらうから、其の結果は將に緬甸の英國に征服せられ、安南の佛國に併吞せられたと同様であらう之れ即ち大いに憂ふべき事である。

我國が今日半獨立國の地に顛落した事は、其の不幸の發端をただせば、咎は滿人に在る。彼の滿人は勿論民族觀念の富めるもので、種々の政策を以て漢人を抑壓せざるは無かつた。漢人の文明知識がみな其の上に在るため、漢人がもし優越の地歩を占むるならば大害を受けるであらうと深く恐れ、滿人中思慮ある人々は、常に寧ろ朋友に與へても、家僕に給してはならぬと言つて居た。蓋し彼等は、朋友とは外國を指し家奴を以て漢人になぞらへて居たのである。故に滿清時代は在つては、凡そ土地を割讓し國權を喪失する事は、甘んじて之れを行ひ、決して忌み嫌ふ所が

なかつた。革命以後に於いては、滿清は既に倒れたが、而かも嘗つて失つた國權と土地とは諸外國の手にあつて未だ回收し得ない。國權に就いて云へば、海關の如きは其の掌握に歸し、條約によつて其の束縛を蒙り、領事裁判は未だに撤廢されないのである。また土地に就いて云へば、威海衛は英の手に、旅順は日の手に入り、青島は獨の手に入り、獨逸戰敗後、山東問題となり再び日本の支配を受けて今日に至るも返還されない。此の現象を観察すれば、中華民國は固より完全なる獨立國と稱するを得ないのである。吾人が若し救國を以て自己の任となすならば、堅く民族主義を支持して既に失はれたる土地と國權の回收を實行すべきである。かくて始めて日本、暹羅と共に東亞の獨立國たり得るのである。滿清既に倒壞して種族革命は早や成功を告げた。民族主義は之れを高閣に束ねて可なりなどと云つてはならないのである。

次の民權主義を述べよう。さきの帝制時代には、天下を以て一人に奉仕し、皇帝の國家に對する關係は、之を自己の私有財産と考へ、且つ皇帝は天の生じたるものであると稱してゐた。天子は命を天に受くとか、天性叡智聰明なりとかの諸説は、みな之れを以て人を欺き、皇帝の至尊無上なるを立證せんとするものである。甚しきに至つては、神話鬼語を記して人民の信仰を強固にしようとする。中國の歴史に於いても固より多く見受けることである。現今は民衆の知識が發達



して君權は既に存在し難く、且つ革命思想の影響を受けて、大多數は民權政治に傾いて居り、敢へて將來世界には君主の立脚地なきに至る事を斷言するに憚らない。歐洲各國中に在つては、英國が先覺であつて、革命は最も早く行はれ、立憲國家を作り一切の政權はみな國會に在つて、君主の權力は法律上の制限を受けねばならない。この外、佛國の如きも亦、幾回となく革命を行つて始めて今日の民權國をなしたのである。歐洲戰爭以後、獨逸、露國も亦一變して民權國となつた。獨逸は元來獨逸帝國主義を以て雄飛したものであるが、豈に圖らんや、帝制反對の革命は一舉にして成功し、露國も亦、極端な専制を行つて居たが、政治革命と社會革命とが結局同時に敢行され、遂に勞農政府の建設を見るに至つた。かく諸外國に徴しても、民權主義の發達とその傾向とは既に明白に立證されるのである。次に我國に就いて云へば、滿清顛覆以後、或者は帝制の死灰をなほ燃やし得ると考へ、よつて袁世凱が帝號を稱してゐた時代に、これを勧める意見書を呈した者も頗る少くなかつたのであるが、前後八十日間にして水泡に歸してしまつた。その後、張勳が復辟を企て、兵を率ゐて入京したが、これ亦時を移さず打ち敗られてしまつた。民權に對して君權が勝利を占め得る事は明かである。世界の潮流であり、古今の公例たるものは、強ひて何にしようとしてもそれは不可能である。

君權國とは、君主獨裁國である。故に獨裁政治とも云ふ。民權國は人民共同統治の國家である。故にまた民衆政治とも云ふのである。(但し、代議制度の民權國は、人民が直接に政權に參與するものでない故、なほ純粹の民衆政治と云ふを得ない)試みに商業の經營に例をとれば、個人經營と會社經營との二種がある。個人經營は、主人一人がこれを維持し、會社經營は株主多數が維持してゆくのであつて、君權國は即ち個人經營の如く主權は君主一人にあるが、民權國は會社經營の如く、主權は株主たる多數人に在る。今日の中華民國は勿論一個の民權國である。既に民權國と云ふからには、宜しく四億の人民の共同統治の國家であるべきである。之れを治むる方は、人民に完全なる政治上の權力を與へるに在る。其の權力を分ければ、一は選舉權である。凡そ中華民國の人民たる者は、みな此の選舉權を有する。また人民より官吏に選出され、國家或は地方の立法、行政機關の各事務を擔任するのを被選舉權といふ。此の官吏は即ち公僕である。二は罷免權である。人民は官吏に對して選舉權を有する以上、また罷免の權利を有すべきである。會社の重役の如きは株主の選任により、また株主の解任し得るものである。三は創制權である。人民が輿論に由つて法律を制定する。之れは専制時代の、天子に非ざれば禮を議せず、制度せずと云ふのと異なるものである。四は復決權である。之れは即ち法律廢止の權であつて、法律の不便を

來すものは、人民の輿論によつて廢止若しくは修正變更する。以上の四種は直接の民權である。此の直接民權有つてこそ、民治を行ふものと言ひ得るのである。彼の北方の吳佩孚も亦嘗つては民治に賛成を稱へたが、近來の行爲は、全く其の反對である。彼固より眞に民治を知るものではなく、名義を借りて號令に便し、自己の勢力を維持して、地盤を鞏固にする爲めの兌換券に過ぎないのである。一體、民權とは政治上の權力が完全に人民にあるのを云ひ、少數の武人或は官僚の手に操縦されるのではない。我國は多年專制の弊害を受け、武昌革命以後は帝治より官治に移つたが、民心は抑壓を蒙つた。現に高く民治の標幟を掲げながら、一般人民はなほ直接民權の何たるかを辨へない。よつて吾人は力をつくして提唱し、務めて民權をして日に益々發達せしめんとするのであつて、然る後に民治は實行し得るのである。

民權及び民權主義は、前述の如くである。更に民生主義に就いて述べる。この三民主義は、みな、自由平等の主義であつて、其の効力は元來相通じてゐる。故に主義は各々分派して居るけれども、須らく同時に提唱すべきである。民族主義は、民族に於ける不平等を打破するものである。滿清の專制の如きは、彼は主人にして吾人は奴隸、他民族を以て我が民族を壓制した。不平等のこれより甚しいものが有らうか。故に民族革命は此のために起つたのである。民權主義は政治上

の不平等を打破するものである。之れは對內的で對外的でない點が、民族主義と相違する。君主政治、貴族政治の如きは皆獨裁政治であつて、人民は與り知らない。之れ即ち、一人（君主）或は少數（貴族）を以て多數人を壓制するものである。故に常に此の反動が發生して遂に政治革命となる。若しそれ民生主義に至つては、即ち社會の不平等を打破するもので、不平等の階級とは貧富の兩階級である。大富豪、大資本家の如きは、社會に於いて權利を壟斷獨占し、一般民衆は日一日と其の束縛と專横を受け、苦戰に陥つて居る。故に常に、富める者は其の所有する田地は畦を連ね、貧しき者は立錫の地無きを歎ずるのであつて、勢として社會革命を免れないのである。中國に就いて論ずれば、現今はなほ大資本家專制の弊は見受けぬが、將來産業が發達すれば、必ずまた社會革命の問題が發生するであらう。或は、中國に資本家が無いなら、何ぞ必しも民生主義を提唱するを要せんや、之れ豈に病なきに呻吟するものではないかと云ふ者もあるが、それは中國に於ける民族主義、民權主義はいづれも病を治療せんとして<sup>もく</sup>を求めの類で、民生主義は病を憂へて豫防するものであり今にして圖らなければ、後日必ず病弊となる事を知らぬのである。故に衛生と治療とは自ら異り、一はこれを未然に防ぎ、一は之れを既發に治すものである。中國の今日には大資本家はないが、而かも其の一端は既に現れはじめて居る。先づ上海、廣東の二個

所を例としよう。上海の黄浦灘は、昔は一畝の土地は銀二十兩に過ぎなかつたが、今日の地價は其の幾層倍に昂騰してゐるかわからない。廣東の長堤は、大道路開通以前には、一畝が僅に五六百元に過ぎなかつたものが、今では三四萬元の價を呼んで居るのである。將來、かかる土地は盡く資本家の手に入り、一般貧民の痛苦はこれより生ずるであらう。蓋し資本家は、必ず先づ廉價を以て貧民の土地を買収し、全部買収せる後、また高額の借地料を貧民に支拂けしめるであらうが、貧民は之れを如何ともするを得ないからである。衣食に就いても亦然りである。若し資本家の壟斷する所となるならば、生活と賃銀とが相應するを得ず、遂に富者は愈々富み、貧民は愈々貧しくなるであらう。米國の労働者が賃銀は多額だが尙生活を維持し難く、種々の苦境に陥つて居るのは、その證據である。更に廣西に就いて一例を挙げよう。廣西は元來、山水天下に冠たりと稱するが、併しそれは、千巖競ひ秀いで、徒らに美觀を爲すのみではない。實に廣西の大富源は此間に藏されて居るのである。廣西周圍の石山を見よ、之れは「セメント」の好き原料である。將來産業發達の曉には、此の石を以て「セメント」を作るであらう。「セメント」の販路は甚だ廣く、用途も甚だ多い。此の石山を開發した資本家の得る利益は、將に計算すべからざるものがあり、あたかも米國の石油王の如く、亦洋灰王を生ずるに至るだらう。かく考へると、中國は産

業發達後、資本家が資本力を以て人民を壓制するは固より必然の勢である。若し豫防せざれば、必ず英米の覆轍を踏むであらう。歐洲の二百年前は民族革命の實行期であり、最近百年以來は政治革命の時代であり、現今は即ち社會革命の時代である。此の三者は一脈相通じて居る。故に同時に三民主義を唱導しなければならぬ。但し、英米今日の社會問題を觀て、當に自覺すべきは彼等が政治革命の成功後、更に社會革命に思を致さなかつた故に、今日この弊害を見たる事である。露國現在の新政府の如きは、即ち此處に鑑て政治革命と社會革命とを同時に實行した。所謂勞農政府とは、換言すれば農工兵の政府であり、農、工、兵を以て組織成立した政府である。此の新政府は獨り君主專制を顛覆せるのみならず、同時に資本家專制の打破をも實行した。之れ所謂社會革命であり、また所謂民生問題でもある。各國は此の主義が國內に傳播して人民が其の影響を受けて起つて之れに倣はんとするのを深く恐れて居る。故に聯合して露國と戦ひ、今日四ヶ年に及ぶが、露國に勝つを得ない。之れは露國の主義が勝れてゐるからである。

中國の今日は、民窮して財盡きて居り、其の憂とする所は貧に在る。而して各國の憂ふる所は均しからざるに在る。余より見れば、貧富の問題は、即ち分配不平均の問題である。救貧の方法を謀らうと欲するならば、同時に須らく先づ不平均の問題を詳細に研究するを要する。故に民生

主義は決して愚圖々々してはならない。愚圖つけば三十年後には多數の資本家が輩出して其害は決して淺少ではなくなる。我國の現勢に就いて述べれば、民主主義は豫防政策である。併し將來資本家に對して如何なる制限を設けるか、そして急遽各國が資本家の悉くを一掃せんとする方法に學ばぬ爲には如何にするを要するかを研究して置かねばならぬ。我國現在は尙ほ大富豪が鮮少であるから、將來よし出現するにしても、若し事に先だつて其の弊害を防止すれば、歐米の如く甚しくはなるまい。豫防の方法は如何にすべきか。余の見る所によれば、それは土地と資本との問題に外ならぬ。土地に對しては宜しく先づ地權を平均すべきである。之れは中國古代の井田と、其の目的を同じくして方法を異にするものである。其の方法の大要は二つある。一は地價に照して納税し、一は地價に照して買收することである。地價に照して納税することは、價格の百分の一徵税の法である。例へば一畝二十元の價格ならば納税は二拾錢であり、累進して一畝二十萬元の價格ならば、納税は二千元である。此くすれば地租の納税がみな其の平衡を得る。併し地價に照しての納税には、必ず先づ地價の制定から始めねばならぬ。英國には嘗つて地價局の設けがあつたが、なほ地價計算の不正を慮つて、不服な人民は其の告訴を許され、また官廳に控訴する事が出來た。併し此の方法は到底中國に施行する事は不可能で、徒らに紛擾を増す恐がある。よつ

て各自々身が賣價を申告するに如かない。そして其の申告の價格によつて課税すれば比較的簡便に行はれる。これを心配する者は、地租の少からん事を望んで、價格の申告が不正確であらうと云ふが、實は、心配する所はない。苟くも同時に價格に照しての買收法を規定すれば、此の弊は免れ得る。例へば一畝千元の地價の土地を有する者は、年に當然十元を納めねばならぬが、彼が若し税額を減少せしめんと圖つて、每畝の價格百元と申告すれば毎年の税額は僅かに一元に過ぎず誠に之れは彼に有利であるが、併し一度價格に照して買收されれば、則ち申告の價格百元ならば國家は百元を以て買收し得るのである。損して一向得のない事甚しいではないか。斯様にすれば地主は他日の買收を豫防するため、必ず價格を下げた曖昧な申告をしない。之れ土地問題解決の方法である。資本問題の解決の如きに至つては、産業の振興が先決問題である。中國の現在は貧を憂へる状態で、爲に振興する資力がない。よつて余は外債を起債し、以て生産事業に使用する事を主張する。決して消耗の費に用ひてはならぬ。北方政府の如く肉を抉つて傷をうめるが如き目前の急場凌ぎに用ひず、宜しく之れを以て市場を開拓し、工場、及び一切の鑛山、鐵道等は國有と定むべきである。中華民國は四億萬人共有の國家である。此の種の事業が既に國家の所有に歸するならばそれは四億人民の共有であつて、少數資本家の手に操縱せらるるに至らず、これ

を始めて國利民福と言ふべきである。

以上三種の主義は、軍人精神がそれによつて表現せらるるものであり、また軍人の仁がそれによつて表現せらるるものである。軍人は、救國済民を以て目的となし、救國済民の責任を有する。國と民とは弱くして且つ貧しい。之れを救はんと思はざるは不可であり、之れを救ふに其の道を得ざれば、また不可能である。道は何くに在るか。即ち三民主義を實行し、以て救國済民の仁を爲すのみである。

#### 第四章 勇

軍人の精神は、智仁勇の三者である。智あり、仁あるも、勇以て之れを行はなければ未だ完全ではない。茲に軍人の勇に就いて述べよう。それには先づ勇の定義如何を知るを要する。古來、勇を云ふものは多いが其説は一致しない。或は直往前なきを勇と云ひ、或は事に臨みて避けざるを勇と云ふ。余は最も普通に用ひられて居る用語、不怕の二字が實に勇の定義として、最も簡潔にして最も適切なものと考え。孔子は「勇者は懼れず」と云つて居る。懼れずと云ふ事を勇の特徴として居るのである。孟施舍は古代の勇者であるが、其の言に曰く「余豈に能く必勝を爲さんや、能く懼るるなきのみ」と。之れに由つて觀るに、怕れずは勇の定義として疑ふべき所が

ない。併し、軍人の勇は須らく、主義あり、目的あり、知識ある勇にして始めて可である。然らざれば、一時の意氣に乗じたり、私闘に勇にして公戦に怯であつたり、其の勇を誤り用ひて、害が甚だしい。今、再び勇の種類を分類して述べよう。

勇の種類は一ではない。發狂の勇がある。所謂一朝の忿に其の身を亡ぼし、其の肉親にまで害を及ぼすのが之れである。血氣の勇。即ち一寸人に挫かれたのを以て、之れを街上、役所内で鞭うたんとするが如きが、之れである。無知の勇。所謂螳螂が其の臂を張つて車輪に當らんとするが如きが、之れである。凡そこの數者は皆小勇であつて大勇ではない。軍人の勇は、かの仁を成し義を取るに在つて、大勇である。古人の言に、「小敵に遇つて怯み、大敵に遇つて勇む」とあるが、之れは輕々に勇を用ひ、誤つて大勇を用ひて徒らに無頼の徒の勇となる事を恐れたのである。彼の廣西軍は多く土匪出身である。今回、廣東軍が廣西に援兵を出した際、廣西軍は一度廣東軍に遇ふや、忽ち潰敗してしまつた。その理由は何處にあるか。即ち主義なく、目的なく、知識なき故である。小勇有りと雖も事に當つて何が出來得よう。諸君試に沈鴻英の軍隊を觀察せよ。彼等は廣西軍中頗る善戦するを以て有名であつたが、廣東より敗れて廣西に歸へり、再び廣西より敗走して湖南に入り、更に轉じて江西に入り、殘餘の部隊は二三千に過ぎない。而かもそ

の通過する地方は無人の境に入るが如くである。勇氣を具へた者にさも似て居るが、併し結局其れは強盜的性質のものに過ぎない。眞正の軍人の勇と爲すを得ない。江西軍と沈軍とを比較すれば、江西軍こそ勿論眞正の軍人である。沈軍は先づ江西に至つた時、江西軍はなほ廣西に在つた江西は宜しく江西軍の範圍であるべきなのに、遂に沈軍の侵入を受けた。此時江西軍たる者は、正に發憤して奮起し江西歸還を實行して以て此の恥を雪ぐべきである。且つ江西軍の江西歸還は雲南軍の雲南歸還とは情勢が同一ではない。それは江西省はなほ北方の地盤に屬し、雲南省は既に西南團體であるからであつて、爲に雲南軍は雲南に歸へる必要なく、江西軍は江西歸還を必要とするのである。之を明にするのが、即ち主義と、目的と、知識ある所の大勇であつて、遊俠の勇と異なる所以である。而して眞正の軍人の勇である。

軍人の勇は、一に技能に長じ、二に生死を明にするものである。

軍人の勇の、第一に必要とするのは、技能である。諸君はみな嘗つて軍事教育を受け、現今各國の新戰術新武器に就いては固より耳に熟して詳かであつて、贅言を費すを要しない。蓋し武器と戰術とは固より關係を有するものである。中國に就いて論ずれば、昔は弓箭を用ゐ、今は銃砲を使用して、武器は同一でない。戰術も亦之に隨つて異なる。鎖國の禁令解かれてよりは、英國と

戦ひ佛國と戦ひ日本と戦ひ聯合軍と戦ひ、未だ敗れざるはない。銃砲なきに非ず、ただ戰術を語んじないが故である。戰術を語んじて居れば、昔日安南の黒旗に佛國は手を焼き、南「アフリカ」洲の「トランスバール」の農民には英國も困じたではないか。彼等の用ゐた戰術は、皆民軍の戰術であつて、最も能く勝を制したのである。余も亦此の戰術を中國に適用すべきであると主張する。北方と交戦する際の如きは、最も之が適當であると考へる。約言すると、民軍の戰術中最も採用すべき五種の技能がある。一に曰く命中、二に曰く隱伏、三に曰く耐勞、四に曰く行軍、五に曰く粗食。以下各項に分つて述べる。

何故命中と云ふか。軍隊の戰鬪力の有無は、能く敵を殺すか否かによつて判斷される。故に命中を第一の要件とする。然し命中を以て論ずれば、外國の軍隊も亦未だ必ずしも名譽を擡ままする事は出来ぬ。此度歐洲戦争で、毎日消費した彈丸は、實に幾億なるを知らない。其の戦争の激烈なる時に當つては、毎日使用せるものが十數億に達して居る。併しその效力に就いて計算すれば、一萬發以上でなければ一人に命中し得ないのである。彼等の戰術は彈丸を以て敵を遮ぎり止め、前進する事能はざらしむるものであるから、多くは二千米以外に於いて之を使用し、若し八千米以外幾萬米に達する時は、必ず重砲を用ふる事、さながら歩兵銃を使用するが如くである

併し多くは彈丸を以て敵の前進を遮り止めるのである。この外、空中には飛行機戰、水底では潜航艇戰等々、愈々出でて愈々奇である。なほ砲彈の及ばざる塹壕、若しくは隧道を造り兩軍の兵士が遭遇すれば、徒手を以て渡り會ふ。甚しきは開戰の時にも、音のみで人なきが如く、その戰爭の地點は何處なるかを知り得ない。その消費せる彈丸を推算すれば、極めて多額で、噸數を以て計算すれば、必ず、數千、數百噸以上である。(一噸は中國の十六擔八に當る)かかる戰術は中國に於いて決して學ぶ事は出來ない。彼等の彈丸製造は増加しても減少しないし、且つ彈丸發射は機械によつて人力を費さぬ。現に最新式の機關銃は一分間に一千五百發の彈丸を發射し得る。一百發を一盒として計算すれば、一分間に十五盒を發射するのであつて、それは固より一々命中するを要しない。務めて多く發射して、敵兵を防ぎ止めるのみである。民軍の戰術の如きは之と相反する。その彈丸を視る事、生命の如く、必ず命中するものでなくば、輕々しく發砲せぬが、併し五十發の彈丸があればそれで十分満足する。現在の軍隊を以て論ずれば、一兵士毎に少くとも二百發以上の彈丸を有して居るのである。何を以て、北伐軍は之れを以て少しとなすのであらうか。命中の技能が民軍に及ばないのであるか。諸君は、彈丸の入手補充は、後方からするものと、前方よりするものとのある事を須らく知らねばならぬ。民軍が、彈丸を重視するのは

其の彈丸はただ此の數のみで、敵人に遇はなければ補充の機會がないからである。即ち後方より入手せずして、前方より手に入れるのである。これは獨り民軍のみ然りと爲すのではない。廣東軍が福建を應援し、次で廣東に歸還するまでは、その彈丸の多くはみな敵人より取り、専ら後方の補充に恃む事を爲さなかつたのは、此の明白な例である。銃砲なく、弓箭を使用した時代に於いては、箭を射る事は、發砲するより更に困難であつた。然し昔は百歩にして柳葉を穿つ者があつた。即ち命中を能くするものである。そして戰に臨む際には最も多く携へても三四十本の箭に過ぎなかつた。若し命中能力がなければ的なくして矢を放つに當ならず、僅かに數分間にして矢は盡き、己も亦擒にせられ、かくては何んぞ能く戰ひ得よう。銃砲も亦然りである。命中する能はざれば、彈丸の消耗多くして、而かも敵を殺す効力は微弱である。さきに北京天壇の戰に、段祺瑞の軍隊は彈丸三百萬發を費したが、張勳の兵の死傷は、合計百七十餘人に過ぎなかつた。これは命中し能はざるが故によるのである。此の事實によつて觀るに、彈丸の有効なのは、夫れが能く命中するを以てである。若し命中し得ないならば、彈丸多しと雖も、みな無用の贅物に過ぎない。近來兵士は、往々にして發砲を輕んじ、命中の如何を問はない。發砲の際甚しきは兩手を高くあげ、或は眼を閉ぢる者がある。何ぞ的なくして矢を射るに異る所があらう。須らく彈丸

の貴重なるを知らねばならない。中國には大兵器廠がない以上、決して彈丸を以て前進を妨害するが如き歐洲の戰術に學ぶべきではない。宜しく遊俠の彈丸を見る事生命の如き其の戰術を學ぶべきである。そして平時は須らく射撃を練習して、命中を求め、虚しく射撃せぬ様務めねばならない。之れが軍人の勇あり、恃むありて恐るる事なきの第一要件である。

何を隱伏と云ふのか。即ち避弾の方法である。然しこの彈丸避けは義和團の用いた護符の如きものではない。即ち地形を利用し人體をかくすものである。余は安南に在る際、常に此事に就いて一般民軍に質問したが、人間が地上に起つと的が頗る大となり、敵は一望して知つてしまふ。故に須らく地形の人を埋伏する場所を藉り、又は巖石の背後にかくれ、僅に其の首だけを現して的を縮少して、敵人をして標的を求め得ざらしめ、自己は更に悠々と敵の舉動を探知し、彈丸雨飛の際には、最も深く身體をかくし驚き逃げてはならぬ。かくすれば前後左右必ず跡をつける敵がないからであると、民軍の述ぶる所は斯の如くであつた。之は蓋し經驗より得たもので、操典中の所謂、地形或は地物を利用するのと相暗合して居る。(地形は天然に屬し、巖石の如きもの、地物は人工に屬し一切の建築物の如きものが是である。)故に隱伏も亦技能の一である。何を耐勞と云ふのか。之は隱伏と相關聯するものである。余も嘗つて之を遊俠に質ねたが、隱

伏の秘訣は不動の二字あるのみ。尠くともよく十二時間の勞に耐へ深夜になつて始めて潛行すべきである。彈丸の速力は異常に怪速で、人間がよく風を捕へる程の駿足を有しても、決して彈丸には及ばない。避け走るのには却つて命中を容易にする。忍耐隱伏するの比較的安全なるに如かかいと答へた。これも矢張り立證する實例がある。以前、黃克強が欽廉に於いて事を起した際、或る時、四人だけとなつて山上に逃げたが、之を圍んだ敵は約六百人で、而かも彼等は實際に僅に四人のみである事を知らなかつた。それで來り攻むる時には、三十人を先鋒とした。此の際此の四人は如何にして防禦したか。その事に就いて後で語つた所によると、敵の未だ來らざる間は、隱伏して動かす、敵が來襲して五十歩内外に迫るのを俟つて、初めて發砲し、一發毎に必ず敵二人を倒し、續いて三四發を以て、敵の死者十數人を出して、遂に危險を脱したのである。此の一戦は、全く命中、隱伏、耐勞の技能を有して居たからであつて、若し然らざれば四人を以て六百人の敵に當つて、如何にしてよく生命を全うし得たであらうか。

何を歩行といふのか。現今中國には完全なる鐵道がないので、行軍の際は専ら歩行を恃んで居る。此の練習の法は、ただ日に二十里を行くを要し、十日以後は毎日五里を次第に増加する。此の如くなれば、疲勞を覺ゆる事なく、而かも自ら健脚となる。彼の遊俠の戰術も亦行軍力を以



て稱せられてゐる。之等は實例の證すべきものがある。北軍が一度南方に到れば、常に山嶽の崎  
嶇たるに苦しむが、南軍は平地を歩むが如く甚だ快速である。之が我が長所で又敵の短所である  
故に歩行の術も亦必要なる技能であつて、注意しなければならぬ。

何を粗食と云ふのか。民軍の恃む所の糧食は、焼米であつて、人毎に十斤を携帯して、約六七  
日を支へて餓える事なく、戦に當つても、食事に時間を費す要を見ない。これ亦民軍の特長で、  
正式軍隊に勝れて居る。而して去年湖南の湖北援助の戦役は、最初は占取して居る地方が少くな  
かつたが、後背路からの補充が缺乏した爲め、敗北するに至つた。糧食も亦補充を要するもの  
一である。若し民軍の焼米を喰ふが如くであれば、行軍も極めて簡便であり、食糧を運送する辛  
苦を免れ、而して給養も亦困難を來さない。

軍人の勇は技能以外に、更に生死を明にする必要がある。生死を明にせざれば、勇氣を發揮す  
るを得ない。所謂勇とは、不怕の二字である。蓋し暴虎馮河は人の能くする所であるが、獨り死  
に就いては未だ怕れざるものはない。生を欲し死を憎むは人情の常であるからである。此の問題  
を研究するのは、哲學上の問題である。人生は百年を出でない、百年の後になほ能く生存し得る  
であらうか。無論何としても死なぬものはない。死は既に避くべからずとせば、當に此の機會に

乗じて革命事業を建設すべきではあるまいか。僅か暫時の間の富貴を食らん事を圖つて、かりそ  
めに生命を惜しむが如きは、世に何の裨益する所が有らう。故に死は泰山より重きもの有り、鴻  
毛より輕きものありで、死所を得れば則ち重く、其の所を得ざれば則ち輕いのである。吾人の  
生れた今日の世界は、革命の世界であり、實に生るるに其の時を得たものと云ふべく、我に與ふ  
るに功業を建て姓名を著すの好機を以てしてゐる。彼の湯武革命は、孔子も之を讚嘆して居るが  
それは帝王革命、英雄革命に過ぎないのに、吾人の行ふ人民革命は、平等革命で、空前絶後の神  
聖なる事業である。吾人に先んじて生を受けた者は、之を見る事を得ず、吾人に後れて世に出づ  
る者は、必ずその後れたるを深く恨みとし、且つ必ずや羨望する事であらう。故に今日の吾人は  
その生くるや革命のために生き、その死するや革命のために死す、死所を得る事、未だ此時より  
も勝る時はないのである。諸君、黄花岗の烈士を見よ。從容死に就き、身を殺して以て仁を成し  
た。當時革命のために犠牲となつたが、今日に及ぶまでその大精神は生きて居るのである。歴史  
の上に光榮を極め、その姓名は不朽である。而かも、それは革命失敗のために死せる者である。  
今回の革命の如きは、必ず成就すべき功業である。また何を憚つて行ひ得ぬ事があらうか、また  
何ぞこれが爲めに死するを怕れようや。今日、此の一堂に會した者は、大半二十歳以上の入々で

ある。如何に多くとも更に八十年の壽命を終れば、結局死を免れないのである。病床に死すると戰場に死すると、いづれを榮譽とするか。これ生死の分別を明にするに在る。孟子の所謂「生を有せんと欲する所の者は、生を捨てて戦を取る也」である、故に革命のために死する者は、仁を成し、義を取る者であつて、碌々たる徒輩の終日醉生夢死、何等見る所のないとは異なる。又、匹夫匹婦が小信小義のために自らくびり、水に投じて死するが如きものでもない。既に軍人たる諸君は、死を畏るべきではない。若し死を畏るるならば軍人たる勿れ。須らく軍人の國家のために效す死は、泰山よりも重き事を知らねばならぬ。吾人の死によつて國が生き、吾人の生くることによつて國は死するのである。生死いづれかは自ら選擇するに在る。生死を明にすれば則ちよく勇を鼓して革命事業に従事し、革命軍人たり得る。而して革命成功の曉には、まさに將來の極まりなき幸福を期待し得るのである。必ず死すべき運命の吾人數十年の生命を以て、國家億萬年不死の基礎を置く、その價値の重大なる事、知るべきである。諸君、幸に大いに勉められよ。

## 第五章 決心

一に功を成し、二に仁を成す。

軍人として今日に生れたものは、國家を改造する責任を有する。國家を改造することは、換言すれば、破壊の後に建設を加へて新世界を作る意味である、此の責任を負ふか否かは、全く吾人の決心に在る。決心は何によつて明にするか。それは精神に在る。精神は革命成功の證書であり、保證である。軍人精神は前述した通り、第一の要素は智能である。是非を別ち、利害を明にし、時勢を識り、自他を知つた其の後には、萬事徹底して意の如くならざるはない。第二の要素は、仁である。仁を實行する方法は、三民主義の實行であつて、この三民主義はまた米國大統領「リンカーン」の民有、民治、民享の説と相通するものである。第三の要素は云ふまでもなく勇である。軍人は須らく、技能を具へねばならぬ。かくて始めて、敵と應戦し得る。また須らく生死の辨を明らかにし、事に臨んで逡巡せず、忌疑せざるを要する。此の三者は軍人精神の要素であり、之をして發揚光輝あらしむるには、決心する所がなければ實現されない。然し、所謂決心は、多數人が決心して、衆智衆力を合して之を行ふものである事を要し、少數人の能く行ふものではない。諸君は此度廣西を出發して更に勇奮前進するを要し、廣西の山水は天下に冠たりとは云へ、此處を以て安居樂業の地にするのではない。將に新世界を作らんと欲するならば、一勞以て永逸を求めて始めて可なる事を知らねばならない。之れによつて生ずる結果は二つある。

一は成功。二は仁を成すことである。行ふ所の成功と仁の成就とは、即ち驚天動地の革命事業である。吾人は何故に革命するのか。安樂なる新世界を造らんとするのである。其の成功を期して成功せざるも死を怕るる勿れ。死は即ち仁をなすの意味で、古の志士には、之を求めて得る事の出来なかつた者もある。今回諸君は本總統に隨つて出發し革命事業に従事し、成功に非ざれば、即ち仁を成すの二者あるのみである。成功すれば、莊嚴華麗な國家を形成して、共に幸福を享受し、成功せざれば、同じく一命を擲うつて、以て吾黨の光輝ある主義に殉ずるも亦、身を殺して仁をなすの志士たるを失はないのである。併し、ひとしく死であつても、泰山の重きと、鴻毛の輕きとの差別があるが、若し革命のために死し、新世界建設のために死ぬならば、其の死は泰山よりも重く、其の價値たるや無限の價値であり、其の光榮たるや無上の光榮である。故に諸君は之れによつて進退すべきである。吾人は汚濁の世界に生れて、此の舊世界を打破し、一切の苦惱を除去して以て新世界の出現を求めんと欲するならば、高尚な思想と剛毅なる能力を有する事が何よりも先決問題である。吾國數千年前に、孔子が「大道の行はるるや、天下公の爲にす」と言つてゐる。此くの如くならば、人々は單に其の親を親とし、其の子を子とするのみではない。之れが即ち大同の世界である。大同の世界は、所謂天下公の爲めにするもので、老いた者には養ふ

所有らしめ、壯者は營む所有らしめ、幼き者には教育を授くるを要する。孔子の理想社會が眞に實現し得れば、欲すべきものもなく従つて民は争はず、軍隊も亦必要とならう。今日露國の創設せる新政府は頗る之と酷似してゐる。凡そ、老人、癡疾者、兒童はみな政府が之を扶養して居る。故に之を勞農政府と云ひ、其の主義は貴族及資本家の專制を打破するにあるので、此の爲め露國革命は各國の共同攻撃を被つたが、併し今日既に數年に及ぶも未だ破る事が出来ぬ。之は云ふまでもなく、露國新政府が堅き決心を有するが故にこそ其の主義を貫徹し得て居るのである。若し然らざればどうであらう。露國の敵たる帝制派の勢力は極めて大であり「コザック」の兵力も亦薄弱でなく、且つ之れ以外にもなほ歐米諸國は其の新主義の傳播が自己に不利なるを恐れて交々立つて之れに反對して居り、かかる種々な反對勢力が存在する時に、露國が若し少しでも逡巡するならば、決して成功するを得ない。其の遂に成功せる理由は實に決心あつた爲である。吾人が若し新世界を建設せんと欲するならば、必ず如何にせば始めて建設し得るかを考へ、根據のない話に終らしめてはならぬ。今日の世界は、私利私欲の汚濁せる世界であり、此の世界に生活する人類には、生活の保障もなければまた希望もなく、而かも極端なる苦痛の裡に陥つて居り、是に於てか歴世思想が生ずるのである。若し軍人の地位に就いて云へば、我國には以前から

「立派な男は兵士にはならぬ、よい鐵は釘にはされぬ」との諺があつて、其の意味は、兵士になる人は何としても職業がない人で、生活のどん底にある人だと云ふのである。之れは中國が軍人を輕視するが故であり、また實際に於ても何等の希望なきが故に、此の言葉が生れたのである。余の見地よりすれば、獨り軍人のみならず、社會一般の前途もまた非常に慘憺たるものである。諸君軍人たる者は無論政府の兵士として衣食住を給せられてゐるけれども、漸く自活するに足るのみであり、而かもそれに依つて父母妻子を扶養せざるを得ない。故に此の舊世界に於いては、一人として苦惱より脱し得るものは無いのである。

今日國民の多くは、華僑商人を羨望して居る。諸君は必ずや、彼等は多額の金を有し高枕で憂とする所はないと考へて居るであらう。そして實際は之れに異なる事を知らない。華僑の最初の外國行は、實は奴隸に賣られたのである。廣東語で云ふ猪仔である。昔は、「バンクーパー」人夫募集、南洋人夫募集などが行はれ、澳門等の地に於ては此の賣買を業とする者を猪仔館と稱し、其の奴隸に身を賣つて外國行をした連中は、大概中國人の中でも貧窮で頼る邊なき爲めに始めて承諾した者である。諸君は單に其の今日の財産を見るのみで、昔日の苦痛を知らないのである。且つ一年を通じて、海外に出る者は數十萬人を下らないが、其の財産を作つて歸國する者の數は

極めて寥々たるものである。之れに就いて余は、友人が嘗つて語つた次の話を思ひ出すのである。其の友人が以前南洋に在つた際、或る日外國人と同行して、華僑の經營する礦山と「ゴム」園を通り過ぎた所、彼の外國人が其の友人に之れを指して曰く、之れは皆、君達中國人の鴻圖で、我が歐洲人の領土の精粹を吸収した結果であると。之れには友人も答へる言葉が無かつたが、更に進んで、一大墓地の前を過ぎた。友人は外國人に「此の曩々たるは何であるか」と質問した所、外國人の曰く、何だ墓地ではないかと。そこで友人は、君は中國人が外國に渡航して財産を作ると云ふけれども、未だ中國人で外國に渡航したために其處で死んだ者が、此の墓の櫛櫛の如く、殆んど算する事の出來ぬ程ある事を君は知らないのである、と酬いたといふ話である。此の事によつて見ても、南洋華僑の狀況が大體知られるのである。なほ米國に於ける華僑は、其の生活は稍々南洋華僑に勝つて居る。併し一生の幸福には矢張り制限がある。概ね米國に於ける華僑は、二十五才で渡航して勞働をなし、在外十年、稍々餘裕を得て三十五才に至れば歸國して結婚する結婚以後半々年ならずして蓄へも盡きてしまふので再び渡航しなければならぬ。やがて四十五歳に至つて歸國し、稍々餘裕も出來て家でも新築すれば金はまた盡き、吞氣に暮す譯には行かぬ。第三回の渡航後、始めて田畑を購ふ程度の資金を得るが、併し其時には既に五十五歳である。遠

く異國に赴く事は、昔人の悲しむ所である。かく米國に於ける華僑は三十年間に故郷に在るは一年にも達しない、之れによつても、彼等の安樂ならざる事が察せられる。

余は、更に實例を諸君に示さう。諸君は現在、一千萬の財産を有して居ないが、若し一千万を懐にしたならば、其の愉快や呆して如何と想像されるに相違ないが、余の目撃せる所では、全く之と相反して居る。余が嘗つて、香港より南洋に赴いた際、同船中に財産約二千萬を有する華僑の一富豪があつた。彼と余とは同じ一等船室に在つて常に相談し合つたが、彼は日々その苦衷を語つて、余にその憂を分たんと欲するが如き有様で、最初は余も甚だ不思議な事位に考へて居たが、航海の日を経るにつれて、頗る之が厭はしく感ぜられ、よつて自ら艙の間の三等室に赴き、彼の海外渡航の労働者（即ち賣られゆく猪仔）に會ひ、心中彼等の意中を付度して、定めし労働者の憂愁苦痛は、富豪に比して甚しいであらうと考へて居たのに、全くこの考とは反對に、労働者は一團となつて雑居し、この上もなく樂し氣に、笑ひ興する者あり、歌ふ者ありといふ有様であつた。此時、余はまた何故、富豪は財産多くして憂へ、労働者の如くその樂を味ふに及ばないのかと、大いにいぶかしんで、自分の船室に歸つて來ると、彼の富豪が苦痛を相變らず訴へるの

で居るのに、貴下は既に二千萬の財を積みながら、益々憂を増すと、人情に反するも亦甚しいではないかと告げた。富豪は余の言を聴くや憤然起つて曰く、自分も三十年前には労働者として彼の渡航労働者同様に固より頗る樂しかつた。今は二千萬の財産を有するが、樂しからぬのみか反對に憂は益々甚しい。試みに子女の將來を思ふ時に、妻を娶るにも、他家へ嫁するにも其の費用はみな自分が支辨せねばならぬ。其の上子供には不肖の子が多く、長男は數百萬を費消するし、次男も百餘萬を使ひ込んでしまつた。今後は、子供から孫が出来、孫が又子供を設けるであらうから、僅か二千萬の財産を恃みとして何として維持し得よう。實に憂へざるを得ないではないか、と。此の事實に鑑みるに、財産多しと雖も、なほ苦勞は免れ難いのである。諸君にしても亦一度自己の一身以外妻子に思ひ及ぶ時、此の感なきを得ないであらう。更に一例を挙げると、香港、澳門に於いては、從來財産家は常に其の子孫の浪費を恐れて、財産を慈善團體の管理に托し、その利息の半分は慈善團體に寄附し、殘餘の利息を子孫に與へ、かくすれば永久に保存し得べしと考へたものである。成程、此の方法は當初は行はれもしたが、今日に於ては、何くんぞ知らん慈善團體そのものが名を慈善に借りて金錢を詐取して居る。故に廣東の慈善團體に對しては人が之を目して慈善ごとと云ふ有様である。以上の例でも解るが、現今の世界に在つては、財産

の有無を問はず、一人として苦痛の中に在らざる者はなく、獨り軍人のみ然りと爲す譯ではない。軍人を例として論ずれば、李純や王占元の如きものには幾人がなり得るであらうか。彼等は人民の身も皮も剥いで搾取し財産數千萬に至り、所謂、位尊くして金多しの身ではあり乍ら、一は不慮の死を遂げ、一は位に安んじなかつたのである。彼等以下の者に在つては無論の事である。蓋し現今の社會に於いては、總ての生活に決して香しい結果がないのである。須らく決意して新世界を建設してこそ、安樂を論ずる事が出来る。安樂の新世界は果して如何にして建設すべきであるか。今や中國人は皆、民窮して財盡き其の貧を憂とする時に當り、外國人は中國の富源に垂涎して且つ之を分割せんと欲してゐる。よつて、中國の貧ならざるは明かである。廣西省を以て云へば、其の石山はみな洋灰、即ち「セメント」を製造し得る。將來化學が進歩し機械が發明されるれば、名は石山でも其の實は黄金となり、ただ此の一事を以ても既に富を築くに足る。此の外、廣西の礦産物は甚だ多く、各省も亦此の通りで、外國人は常に之を採掘せんとしてゐる。中國の石炭は、各國に冠たるもので、若し完全に開發される時は、世界數千年間の用に供給する事を得る程で、中國は自ら開發せず、之を地に棄ておるに過ぎない。之は、あたかも珍寶を金庫に藏するが如くで、若し之を開く鍵なくば結局は死藏に過ぎない。廣東の諺に、「鍵をなくした夾

萬」といふ事がある。(註、夾萬とは金庫の類) 中國の貧は正に此の病弊に陥つて居るものである。若し其の聰明智識を以て開發に従事するならば、即ち吾人自身の幸福と、子孫の幸福とは、實に無限である。安樂なる新世界の建設は、即ち此點に繫かつて居るのである。

新世界の國家は、従前の國家とは趣を異にして居る。通常、國家は僅かに治安を維持し得るに止り、民を教育し民を給養し得ない。眞によく民を教へ民を養つたのは、夏殷周の三代に如く者はない。當時は井田、學校、みな制度を設け、教育給養の責任は國家に存して居たが、後世は之と異り、所謂國家はいづれも政治の整備公明如何を問はない。漢の文景、唐の貞觀の治などの如きは、よく治安を維持するを以て善しとしたのである。今日抱懐する新世界建設の希望は、則ち徒らに治安維持のみではない。凡そ教育、給養も亦舉げて國家の取るべき責任とする。試に露國政府を見よ。彼の革命發生は、吾人よりも後れて居るが、其の成績が吾人に比較して勝つて居るのは、其の目的が一人一家の生活を謀るに非ずして公衆の生活問題を解決するに在るからである。牛乳等の上等食料品の如きは、先づ幼兒に支給し、老病者、軍人の順序に支給し、其れから始めて普通人に及ぼす。又、貧民にして學校に入る資力なき者には國家が法律を設けて扶助し、入學せしめる。之れが即ち所謂、人々獨り其親を親とせず、獨り其子を子とせざるもので、教育

給養の責任は國家が有する。大同の世界が小康と異なる所以である。露國新政府の計畫は略々之に近きものである。露國より翻つて眼を我國に轉すれば、其の情況を比較して如何であらうか。露國の革命は、政治の不平等を打破すると同時に財産の不平等をも打破した。而して我國には現在未だ大資本家の發生を見ないから、單に防止政策を行ふを要するに止り、露國に比較して遙に容易である。彼の露國の新政府は名づけて勞農政府と呼ぶが、實際は勞農兵政府であり、其の軍人は皆主義を有し目的を有するが故に、よく勞農と聯合して新國家を建設したのである。吾國今日の軍人にして若し同様に主義及び目的と決心とを兼備して、新しき中國を建設するならば、其の成果は必ずや露國を凌駕するであらう。何によつてそれを知り得るか。露國は寒帯に在るが、中國は溫帯に在る。更に露國には資本家が存在するのに、中國には資本家が存在しない。自然的方面たる人爲的方面たるとに論なく、共に露國に比較して優れて居る。若し將來能く新組織を有する新國家を建設するならば、必ず舊世界の如き苦痛なる世界ではない。今回の革命成功後の事を豫想するに、將に我が先祖傳來數千年間遺留された寶藏は次第に開發され、其の人民の衣、食、住、旅行の四大需要も、盡く國家が經營し、公衆のために幸福を謀るであらう。此の時代に至れば、幼者教ふる所あり、壯者用ふる所あり、老者養ふ所ありで、孔子の理想たる大同の世界

が眞に實現して、莊嚴華麗の新中華民國を造り、且つ歐米を凌がんとするであらう。諸君、此の無限の幸福を思ひ、彼の南洋の富豪の状態及び彼の李純、王占元の状態を見て如何となすか。而して此の幸福を得る所以は今回の革命と、今日の革命軍人とに在るのである。今回の革命が順天應人の事業であつて必ず成功し得るものである事は、既に述べた通りである。若し成功せざる時は如何。古人は嘗つてかく云つて居る、即ち「濟せば則ち國家の靈、濟らざれば則ち死を以て之れを繼ぐ」と。死とは、仁を成す事即ち之れである。仁を成して死するは、極めて偉大なる價值を有して居る。よしや、前者仆れて後者之れに繼ぎ、多數の生命を犠牲にするとも、能く眞正の共和を獲得し得るならば、即ち諸君惜しからざる命ではないか。之れには決心を堅めて革命に従事しなければならぬ。革命成功の後には、獨り公衆の幸福たるのみならず、抑も亦個人の利ともなるのである。誠に一例をとれば、大海を行く船が巖に觸れて將に沈まんとする際、乗客が若し協力して救助せず、なほ各自の荷物を取りまとめることに忙しく、船が其爲に沈めば、荷物のみがよく安全で有り得ようか。吾人の國家に對する關係も亦即ち此の通りである。其の亡び行く様を坐視するならば、將來立身出世の餘地はない。亡國の悲運を救ふ責任は、全く軍人の双肩にかかつて居るのである。今や諸君は、廣西を出發して、行くべき道は、即ち成功と成仁との二者の

外にはない。一言以て之を盡くせば、決心のみ。心決すればよく軍人精神を發揮して、光輝ある革命を成就し得るものであり、中華民國の實利も亦之によるのである。諸君、それ勉めよ。

## 廣西の善後方針

—民國十一年南寧に於て—

余は未だ嘗つて廣西の地を踏んだ事がなく、今回南寧に來つたのが、實に最初である。廣西は十年來、強盜の占據する所となつて居た爲め、滿清顛覆せりと雖も、人民は未だ嘗つて共和の幸福を與へられた事なく、また多數は共和の何たるかをも知らない。かくなつた所以は、實は辛亥革命の際、人民が強盜を撤去するを肯んぜざりし爲で、彼等は假りに之に賛成して、政權を竊取し、爲に人民は欺瞞と壓迫とを被る事殆んど計り知るべからざるものが有つた。現今では既に強盜は一掃されてしまつたから、今日よりして廣西は眞に廣西人の廣西となり最早強盜の廣西ではない。眞に中華民國公有の廣西であり、私人據る所の廣西ではないのである。

本大總統は特に馬省長に命じて廣西の民政を擔任せしめるが、馬省長は眞に、心より民治を擁護する學者で、その學問は廣西に於いて固より得易からざるのみならず、彼は國內に於ても亦有

數の人物である。廣西の同胞は當に同心協力、以て公共の幸福を求めねばならぬ。廣西は從來より瘠の地と稱せられて居るが、今回江を溯つて西上するに際し、兩岸を見るに、みな肥沃の平原である。更に山林、谷、岡等もみな鬱茂としてゐる。之によつて、所謂瘦瘠とは、眞の瘦瘠ではなくして、ただ人力が加へられて居ないのに過ぎぬ事を知つた。安南の土地は廣西に比較して劣つて居るが、佛人の經營二十餘年に過ぎずして、その光景は歐米文明諸國と何等異なる所がない。安南にして能くかくなり得た以上、廣西は當然これをなし得る筈である。併し乍ら、安南今日の幸福は、安南人の享受するものではなく、佛國人がこれを獨占してゐるのである。廣西の省民は宜しく佛人の經營方法に則ると共に、主人公たるの資格を放棄して他人にその處理を一任してはならぬ。本大總統は廣西の善後措置に對し二つの方針を有してゐる。(一)現在、各處に賊の殘兵三四萬の多數が存在して居り、廣東軍の力を以て一々剿滅する事は不可能である。而してこの殘兵も亦、至極苦痛な、至極憫むべき部類のものである。彼等は從來強盜の頭目に隨從して以て生活して居たが、今は依る所を失つて遂に窮して行くべき所がない、彼等は決して生れながらにして悪黨たるのではない。されば此等の人々の爲めに計り、また廣西全省の安寧維新の計から云つて、當然方法を講じて、之を招撫すべきである。本大總統は北伐計畫は必ず實行する。廣



西省民並に同志諸君に希望するのは、諸君が分擔して彼等を勸誘し、極力啓蒙指導されたき事である。此の輩をして、武器をとつて北に向ふ健兒たらしめるならば、無用を化して有用と爲すもので、一舉兩得である。若し此の策を實行し得るならば廣西には斷じて土匪の災害がなく、諸君は建設の事業に従事するを得るのである。(二)各種の資源を開發するには、資本が必要である。廣西は須らく大いに外債を借り以て鐵道を敷設し、鑛山を開き、農場をつくり、工場を建てねばならぬ。此の種々の事業は、みな生産的の事業であるから、若しよく利益をあげる方法を確實に發表するならんには、外人は必ず喜んで投資するであらう。ただ其の資本と人材とを利用するに止どめ、主權は斷じて外人に授與してはならない。萬事自身が主動的地位に在れば、決して危険はないのである。嘗つて其の昔、吾人が借款に反對せる所以は、其の借りて以て浪費するに反對したのである。若し借りて利を與すに用ふるならば、決して反對の餘地は存しない。埃及はよく外資を利用し得ざりし爲めに亡び、日本はよく外資を利用し得て興隆した。安南及び滿清は、外部の物質文明を拒絶してつひ、日本はよく之を吸収して興隆したのである。要するに、廣西の同胞は、今日既に主人公たるの地位を完全に獲得した以上、當然廣西の資源を開發すべき責任を負ふべきである。今日以前廣西にして外人に亡ぼさるれば、夫は陸榮廷の罪である。今日以後廣西に

して外人に亡ぼさるれば、則ち列席の諸君及び本大統領はみな其の責を免るを得ないのである。特に一言、我が廣西の同胞に警告する事は、強盜と國民とは決して相容れない。今既に之を驅逐せる以上、當に共に其の根幹を絶つて、再び第二の強盜の廣西支配を出現せしめざる事である。之れ本大統領の切に希望する所である。

## 陽朔富源の開發

— 民國十一年 —

今日諸君の歡迎を受け、此の機會に諸君と民國の政治を談じ得るのは、誠に愉快に堪へない。眞の民國に改造する事は、即ち國民全體の責任であり、特に民國國民黨員の負はねばならぬ責任である。責任とは何か、即ち民族、民權、民生の三民主義の實行である。之れは近代の所謂、國を民有、民治、民享とする眞精神である。蓋し中國は中國人の中國であつて、決して中國人に非ずして之れを支配する事は許されない。人は萬物の靈長である。よし其の知識の高下、身體の強弱には異なるものがあらうとも、元來階級の不平等はないのである。どうして他人の不平等なる待遇を甘受し得よう。且つ民は國の本であり、本固ければ國寧き道理である。簡単に云へば、民は

國の主人公であり、主人公が安泰ならば國は治まるのである。どうして、強權者が國の政治を亂り、亡省亡國の痛苦に陥らしむるのを容認し得よう。國家の物産、國家の財富は、半ば國家の有する自然の資源であり、半ば國民工作の材料である。衣食住等の生活の本據をどうして他人の理由なき強奪に任せ得よう。如何なる國民なると、如何なる國に生れたるとに論なく、皆、其の國を有し其の國を治め、其の國の權利を享受して、始めて獨立自由の國民となる。之れは天經地義で責任を他に轉嫁し得ない。民國と帝國とは相反したものである。民國は民を以て主人となし、帝國は民を以て奴隸となす。國民は各人みな新智識を吸收する事を願ひ、帝國は各人をみな愚蠢たらしめんと欲して居る。民國は即ち國民の新世界であり、帝國は即ち國民の舊地獄である。此の故に、歐米の自由を愛する國民は數百年前、米國佛國の如く帝國を革命して民國をつくつた。故に今日歐米の新世界を現出したのである。中國は亞細亞洲に於て共和を創始し、本大總統は、中國を新世たらしめんと欲したが、圖らずも事志と違ひ、爲に十年來、徒らに一滿清帝國の名を除き去つて國民は官僚專制の結果を得たに止まり、滿清の餘孽は政權を竊取し、國家は將に亡びんとして人民は其賄に安じない。之は本總統のつくらうと欲した民國とは大いに相背馳せるものである。かかる現象は憎むべき官僚武人の不法によるものではあるが、また一面多數國民、多數

黨員が民國に對して徹底せる理解を缺き、完全に責任を負はなかつたのも深く咎むべき點である。若し國民が理解し、理解せる黨員が責任を負つたならば、中國を世界第一の莊嚴燦爛たる眞の共和國たらしむる事は、回より掌を反すよりも容易である。此の事は廣東軍が廣東に歸還して民國に背反せる強盜を除去するに月餘を要しなかつた事を見ればよくわかる。また、廣東軍の廣西援助について見ても、強盜の本據を掃蕩し、以て廣西を廣西人の手に歸へすに至るまで五十餘日に過ぎなかつた。更に之より推せば、今回の大軍が、北伐を敢行して民國に盤據する亡清の餘黨を一掃し、全國に眞正の共和を恢復する事、亦決して難事ではない筈である。ただ國民が覺醒し、黨員が責任を負ふ以上は、民意の歸する所に順へば足るのである。此の故に、本大總統が諸君の廣西に對して希望したいのは、先づ覺醒し先づ責任を負つて三民主義の實行に相勵まれたい事である。其の實行方法に二つある。一は國民をして世界に關する知識を有せしめ、教育を普及し科學を提唱し、三民主義を實行し、人々をしてみな國家は國民の公有であり、一家一姓の私有すべきものではなく、また腐敗せる官僚や專横なる武人、陰謀政客の治むべきものでもない、中國の權利は小數人が得て享受するものではなく、更に少數強權者がほしいままに人命を絶ち得るものでない事を知らしめる事である。生活上に於ては、日に進歩を求め、衣食住も須らく改善

し、道路は必ず改良しなければならぬ。將に民國を一個の極樂世界たらしめんとするには、國民に充實せる知識がなくては成功は覺束ない。二には、國民をして大なる財富を有せしめる事である。財富を開發するには、各種の産業を振興するに如くはない。即ち陽朔の一事に就いて論ずれば、千山萬嶽に圍繞されて到る處肥沃である。知識なき者は、土地瘠せて民貧しく、治績をあげ難いと考へるが、豈に計らんや、奇形を現して聳え峙つ高山は、みな石灰岩を含み、之れは焼いて石灰にし、また「セメント」を作り得るのである。石灰は農業に肥料とし用ひられ、また工業にも用ひられる。「セメント」は化學の發明せる建築材料であつて、道路を開き、堤防を築き高層洋風建築に用ひられ、人造石を造り得る。一擔の石灰石から「セメント」一樽四斤百がとれその値段は銀六元である。諸君は陽朔はみな不毛の石山で悉く廢物に屬すると考へられ様が、余の眼からすれば、陽朔は到る處みな黄金である。

以上に止らず、石灰岩層中には、極めて厚い石灰層も發見されるし、極めて豊富な鐵礦もありまた金礦、銀礦、鉛礦、水銀礦も石灰岩層中には多く埋藏されてゐる。諸君が若し之れを知り、知つて更に開發するならば、則ち陽朔の人はみな富豪となるであらう。農業も之れと同然で、山野の地味が頗る肥えて居て、樹木及び一切の果樹を植ゑ得る。之れはいづれも人生の必需品であ

るから若し廣く植樹栽培し加工製造するならば、致富の方法は何も之を外に求むるを要しない。而して、國民の知識普及と、物質文明の發展とは全く道路交通の如何にかかつて居る。中國に於ける最も富裕な地方は、廣東及び浙江に及ぶものはなく、其の次は四川及び湖南である。廣東は海洋の交通を有し、四川は揚子江の水運があり、湖南は湘江、沅江、資江三河流をあつめる洞庭湖があつて、交通に極めて便利である。故に物産を運搬して外に出し、財富を内に輸入するを得るのである。廣西は中國の最も貧弱なる省であるが、併し其の埋藏する富源は他省に比較して優れてゐる。何故に貧弱と云はれるのであるか。それは交通の利便を有せぬため、かく云はれるのである。本大統領は今回北伐のため陽朔を經過したのであるが、梧州から此地までは、四百五十里に過ぎぬのに既に十六日を費して居る。若し廣い大道路があるならば、數日の行程に過ぎぬから決して勞を費さないのである。之を類推するに全國みな同様で、民智の啓發と財富の増加とは道路による交通が至便となるに非ざれば成功を見ない。今、廣西の窮迫して居るのは宛も各種の財寶を藏する金庫の鍵を失つた爲め、其の所有する財寶を用ひ得ぬ人と同様で、爲に生活不可能に陥り、甚しきは土地を離れて乞食となり、歐米の新國民は之れを見て、憐憫の情を生じて居るのである。廣西にして斯くの如くならば、他省もまた知るべしである。本大統領は、諸君が先づ

道路の交通を開かれん事を希望する。道路こそは、富源を開發するの鍵である。之れによつて三民主義を實行し、今回の北伐の功を全うし、全國々民の知識を啓發し全國々民の富力を増長し、以て真正なる民國を建設しよう。願はくば、諸君と共に之が貫徹に努力したいものである。

### 兵を化して労働者とせよ

——民國十二年二月十一日、雲南軍廣西軍の歡迎宴會に於て——

楊總司令、劉總司令、各將校、並に同志諸君。今日は楊總司令、劉總司令の歡迎を辱うし、本大總統として誠に感謝に堪へない次第である。本大總統は從來廣東に在つたものであるが、今回何故再び廣東に歸つて來たのであるか。去年六月陳炯明が反亂し、本大總統は廣東に在つてその職權を行使する能はざる爲め、八月戰亂の地を離れて北の方上海に赴いたのであるが、今年正月雲南、廣西の聯合軍及び義に味方する諸軍隊の勢力を得て、叛賊陳炯明を驅逐した。これが今日再び廣東に歸來した所以である。雲南廣西聯合軍は大義のために賊を討伐し現在漸く廣東を恢復したのであるが、併し乍ら、各軍隊が入城した後は、非常に複雑な事態となり、不幸にして主軍と客軍との間に現在大敵を前にしながら猜疑を生ずるに到つた。今日の新聞紙の既に報道するが

如くんば、陳家軍と東路討賊軍とは宣戰して居る。かかる猜疑は萬有るべからざる事である。本來客軍は同様に大義の爲めに賊を討つもので、元來主客の區別は存在しない。若し主客の別を論ずるならば、廣東軍が主であり、雲南、廣西軍は客であるが、去年本大總統の退去を威迫したのは即ち主軍であり、今日本大總統を歡迎するものが却つて客軍となるのである。現在東江に於いて叛亂する廣東軍は、斷じて討伐しなければならぬ軍隊であつて、決して革命的軍隊と云ふ事は出来ない。叛亂するのは勝手だが、併し若し叛亂する者があれば、誅滅せねばならぬ。これは叛亂せる東江の廣東軍を誅滅せねばならぬのみではない、各省の反逆せる軍隊は、みな誅滅せねばならぬ。本大總統は中華民國の大總統である。中華民國を統一的國家たらしむるには今後各省の割據を打破せねばならない。本大總統が今回廣東に歸來したのは、雲南、廣西、廣東の諸軍を統一し、統一せる中華民國を建設せんが爲めである。

我が中國は本來統一して居たのであるが、併し、辛亥革命以來、革命の事業は依然として成功を見ない。この病根は調和妥協の不能にあつた。調和とは元來大公無私、平和的統一を求むるものであるが、如何せん、一般の腐敗せる官僚と軍閥とが起つて共和に反對したのである。例へば袁世凱が帝號を稱へ、張勳が復辟を行はんとしたるが如き、督軍團の謀叛と割據的聯省自治の如

き、之等は遂に國家を四分五裂に導いてしまつた。故に中華民國は統一されて居ない。この不統一が即ち革命の成功して居らぬ事なのである。今回雲南、廣西諸軍が廣東を恢復された、その功勞たるや實に大、その責任たるや實に重かつたのであるが、併し今後の責任こそ更に一層重大である。此の重大なる責任とは、即ち内部を整頓し、廣東を以て模範として西南を統一し、西南を以て模範として中國を統一する事である。統一の方法に就いては、輿論と武力の二方法がある。本大統領今回の廣東歸來は、平和的統一を主張せんが爲めである。何となれば現在全國の人心は實際亂を厭ふて居る。故に輿論は我が後援者であり、又諸君の武力を以て基礎としてゐる。武力と輿論とを有するならば、今回の革命は必ずや成功する。爾來革命は南方より發源したものであるが、併し北方の共和の程度も亦非常に高い。例へば辛亥の年武昌に革命起るや、北方でも數多の省が之れに賛成し、久しからずして統一せる中華民國を形成したのである。吾人が現在共和國家を再び建設せんとするならば、先づ西南の盜賊共の叛逆を除去するを要する。而して更に武力と輿論の力とを用ふれば、北方は必ず賛成する。中國現下の情勢に就いて論ずれば、最も勢力を有するものには、東北には奉天の張雨亭あり、東方には浙江の盧子嘉がある、其の次には段祺瑞の安徽派と、革命發源地たる西南の各省とがある。併し盧子嘉は安徽派に屬して居る故、簡単に

分類すれば、奉天、安徽、及び西南の三系統となる。此の三系統は既に握手を交して提携してゐる。併し乍ら北方には表面は頗る強い様に見える一派が外にある。即ち、直隸、山東、河南湖北の數省に盤據してゐる直隸派である。この一派は北方政府を支配し、惡として爲さざるはない。あたかも古人の所謂「天子を挟みて以て諸侯に令す」と異なる所がなく、専ら武力を以て中國を統一する事を主張する。此の主張に反對する三派がある、之れが只今前述した、奉天、安徽、及び西南の三系統である。この三派は既に聯合して平和的統一を主張して居るが、直隸派は武力的統一を主張し、例へば孫傳芳をして福建を征せしめ、楊森を利用して四川を攻めしめた。また兩廣、及び雲貴の如きも彼等の干涉を被つたのである。彼等の武力は甚だ大ではあるが、併し乍らそれはよく北方に及ぶのみで、南方には及び得ない。去年吳佩孚は南方の事に干涉して、陳炯明と聯絡通謀して彼を叛反せしめた。故に雲南軍が今回陳炯明を敗北せしめたのは、吳佩孚を打ち敗つたことでもある。之れで吳佩孚も既に成敗してしまつた。本大統領の今回の歸來は、専ら廣東の整理に在るが、近來西南は何が故に戰を續けたかと云ふと、共和に反對する叛徒が掃蕩されなからであつた。今や既に陳炯明は除去されたが併し其の餘毒はなほ潮梅、惠州、一帶の地に盤據してゐる。此の一帶の地方は頗る廣大であつて、殆んど廣東全省の半ばを占むるもので、

若し此の餘毒を掃蕩しなければ安んじて泰平を食する事は出来ぬ。此の餘毒がなほ存する以上、大患眼前にあるのである。故に更に諸君は責任を負つて起たねばならぬ。此の大患を除去したならば、暫時休息となり、更に民事を整理して人民の幸福を謀り西南の富源を開発したい。これは從來その機会がなかつた爲め、即ち表面は革命のため、内實は叛逆のために遂に成功し得なかつた事であり、其の他の各省も皆同様である。之れ勢力が陳炯明に及ばなかつた爲であるが、現在陳炯明は既に逃走した。若し廣東の大勢を以て根本とし、内亂を鎮定したならば、この成功の機會は、以前に比較して一層大である。本大統領は今回香港を經過し、頗る大きな機會の有る事を感じたのである。香港政廳の態度は從來極めて吳佩孚に賛成して居つた。例へば香港の新聞紙は極力吳佩孚のために宣傳したが、陳炯明の叛逆後は、數ヶ月内に中國が統一され得ないのみならず加ふるに廣東の軍隊は掠奪凌辱爲さざるなく、政治の腐敗は日一日と甚しく之を見た香港の外人は吳佩孚が眞に無能なるを知り、彼等の從來の主張が大いに誤つて居た事を悟つたのである。故に今や、根本より方針を一變し、まさに眞正なる國民黨と親善をつくさんとしてゐる。現に吾人は、個人及び黨に對し極めて好意的な援助を得た。即ちこれは成功の一大機會である。革命の成功と否とは、古今内外の歴史を繙き見るに、一に武力により、一は外交の力によつて

居る。外交の力が武力を助くることは、あたかも左手が右手を助けるのと同一である。嘗つて米國は獨立して英國の支配を倒した。その成功せる所以は、一半は勿論本國に於ける武力の血戦によるが、併し他の一半は、佛國の與へた外交的援助によると云ふべきである。若し専ら武力のみよる時は、決して成功は期し難い。洪秀全の革命の如きは、廣西より湖南、湖北を征服し、建都南京に至つたが、遂に成功しなかつた。此原因の大半は、外交に於ける失敗によるものである。(原註、外交的援助がなかつた)故に革命の成功と否とは外交問題が頗る重大なる關係がある。吾人は現在香港の外交的援助を既に得、更に諸君の武力的基礎を有して居るのであるから今後の革命の成功と統一とを極めて速かならしめんとするならば、即ち平和的態度をとり、以て輿論の後援を獲得するを要する。故に本大統領が今回廣東に歸來するや、その主張は、第一、平和的統一、第二叛亂軍隊の掃蕩、第三兵士を化して勞働者たらしむること、第四一部の軍隊の洗練これである。若し法則を無視して過剰の軍隊をそのまま存置せしめるならば、四川と同様に兵士が過剰なため常に戦争が絶えぬ。從來既に主軍と客軍とが相争ひ、現在また内部で相戦つてゐる。眼前兩廣の兵が多く患を起す様は、眞に四川と同じである。この災害を消滅せしめんがためには、當然速かに不良の軍隊の存置に就いて法を設置すべきである。

本大總統はさきに上海に於いて宣言を發し、兵士を労働者たらしむる事を主張し、奉天、安徽兩派は頗る之に賛成して居るが、ただ直隸派のみは不賛成である。吾人の主張は先づ裁兵して後統一せよであるが、直隸派の主張は、先づ統一して後裁兵せよである。諸君は、裁兵即ち統一の方法であり、先づ裁兵して後統一するのが眞の統一である事を理解せねばならない。若し果して先づ統一して後裁兵するならば、其れは偽統一である。袁世凱の如きは、嘗つて裁兵を行はず、統一を看板にして莫大な外債を借り、我が革命黨を打ち敗つたのである。又、二軒の家が武器を持出しての喧嘩の際、平和的解決を行はうとするには、先づ武器による争ひを停止せしめねばならない。佛教に説く所の「屠刀を放下すれば立ろに成佛」すである。吾人が成佛を望むならば必ず先づ屠刀を放下せねばならぬ。此の道理は甚だ容易に理解し得るものである。本大總統の主張する裁兵に至つては、兵士を變じて労働者たらしめるもので決して其の有する軍隊を完全に撤廢するのではない。現在の兵士の情態に就いて云ふと、廣東に於ける俸給は毎月僅かに七八元を給するのみで、時には食費に事缺く時もある。其の他、毎日午前の教練、午後の教練、夜間の教練と總計七八時間の多きに及び、一旦戦争となれば更に一命をも捨てねばならない。此の状態は實に苦痛であり、誠に憐むべきものである。獨り廣東の兵士が此くの如きのみならず、各省の兵

士も亦之れと同様である。兵を變じて労働者とせる後は、毎月の仕事は六時間に過ぎず、労働方面よりするも頗る樂であり、給與は、從來の俸給の外、別に俸給同額の賃銀を支給する。簡単に云へば二倍の俸給を得る事が出来るのである。労働の種類に至つては、或は道路開設工事、或は極めて大なる工場の經營等、其の爲す所の労働は永久的で臨時的のものではない。斯く述べてくると、兵を變じて労働者とする以前に在つては、兵士の俸給は誠に少く、教練も又辛らく、生命も危険であるが、既に之を實行すれば、兵士の俸給は二倍となり、労働も節度に叶ひ、生命も亦安全であるから、彼等は必ずや労働者たらん事を望むであらう。過般の歐洲大戰後、歐米聯合軍合計數千萬の兵が、數年ならずして、大半を裁兵し得た所以は、即ち此の授職方法を採用したからである。本大總統も今回廣東に歸來して、兵を變じて労働者となし、即ち歐洲大戰後の各國の裁兵法を利用して、西南方面の交通を整頓し、一切の産業を發展せしめたいと考へる。諸君は吾人の革命が、如何なる事を爲さねばならぬかを理解するを要する。其れは、人民の爲めに幸福を謀ることであり、革命の責任は、民を愛することであつて、民を害する事ではない。本大總統は明日より一個の方法を案出して内部を整理し、西南をして一の模範たらしめ、東北各省をして誠心から吾人に對せしめ、自ら武力を用ひずして全國を統一しようと思ふ。若し各省が西南革命

が大義に従ふものであり、止むを得ざるの時に及んで始めて武力を用ゐんとするものなるを知るならば、自ら「東面して征すれば西夷怨み、南面して征すれば北狄怨む」の理となり、所謂「仁者は天下に敵するなし」で、大武力を用ゐる事は不必要となり、各省は極めて歓迎するであらう。各省が歓迎するに至れば、使用する武器は極めて小さくてよろしい。吾人は今晚より、此の責任を背負つて起ち、諸君は將來大いに奮闘して、更に新たな局面を造り出さねばならぬ。今回雲南、廣西諸軍の援助を得て、叛賊陳炯明を驅逐した事を、本大統領は深く感謝するものである。特に諸君のために乾杯致したい。

### 國民は人格を以て國を救ふを要す

——民國十二年十月二十日全國青年聯合會にて——

中國基督教青年會諸君、本日諸君の光臨を得て歓迎の意を表することを得るのは、余の欣幸とする所である。

余が今日廣東に於て此の歓迎會を開催したのは、二種の資格を以てしたのである。即ち一つは西南諸省を代表し、西南行政の主席としての資格であり、他は中國國民黨を代表し、之が領袖と

しての資格である。青年會の諸君に就いて言へば、歓迎さるべき點は極めて多く、一言にして之を盡すことは出来ない。青年會の主旨に付ても、智育德育體育の三項を以て國を救ふことを標榜しており、此點だけでも世人に歓迎さるるに充分である。従て我々救國を理想とする黨員が、之を歓迎するのも當然のことである。救國の事業は、先きに多數人によつて提唱されたが、國內に於ける進行の程度は極めて少く、只我々國民黨全體が身を捨てて國を救ふべきを主張してゐるのみであつて、民國成立後十餘年を経過した今日、大團體にして來つて救國の事に當るべきを表示するものは存在してゐない。然るに今青年會が其の大團體を以て救國の事に當るべきを聲明した。廣州に於て此種會合の開かれたのは、之が最初である。故に我々國民黨は之に對して特別歓迎の意を表するのである。

我々人類の天職は如何なる事を爲すに在るか。最も重要な天職は人羣の社會をして日々進歩せしむるに在る。而して之が方法としては協力一致し、一つの理想の下に相互勉勵し、努力精進して最上の人格をつくらなければならない。人類の人格が立派なものになれば、社會は必ず進歩するであらう。我々の社會は古今幾多の人格によつて改良され、草昧なる時代より現在に至る迄、已に幾多の進歩を見てゐるのである。然し現在社會の道德は未だ極端に迄は進歩してゐな



い。人類の來源に就いては基督教の説によれば、世界人類は天帝が六日の間に創造したものであり、近來の進化論に従へば、人類は極めて簡單なる動物から、久しい間に變成して複雑な動物となり、猿となつて更に人間となつたものであるが、動物から人間に成つて、未だ久しからざる爲、人間性の中には多少動物性が残つてゐる。換言すれば多少の野獸性を帯び、人間性は割合に少いのである。であるから我々が人類の進歩を欲するならば、高尚なる人格をつくらなければならぬのである。人類の人格が高尚になり野獸性が減少すれば、自然に惡事をなさなくなり、完全に人性のみになれば道德が高尚となり、道德が高尚になれば爲すことは自然軌道に従ひ、日々進歩して、眞に萬物の靈長となること出来るであらう。

上述の如く科學と宗教との見解の不同は人類の來源に關するものであつて、此の一見解の不同から科學と宗教との争ひが発生し、今日に至る迄、未だ止る所を知らないのである。只人類の智識は古代とは非常に異つて居る。即ち今日の人類の知識は多くは科學的知識であり、古代人類の智識は多くは宗教的感覚であつた。而して科學的知識は迷信に服従せず、それを觀察と實驗的方法によつて仔細に研究し、數度の研究に謬りが無い場合、始めて之を智識と見做すのである。之に反し宗教的感覚は古人の傳説神話を、其の事の眞否に係はらず總て信奉するものであつて、

此點では當然科學の優秀を認めざるを得ない。我々は現在遠方の物を見んとすれば、望遠鏡を用ふれば明確に之を見ることが出来るが、此等も宗教が科學に及ばない一例である。然し近時宗教家も古人の口傳を其の儘信奉することの不便を知り、新舊約聖書を改新し、書中の文字の範圍を擴張して古人の説の不足を補はんとする主張をなす者が有るに至つた。次に宗教の優れた點と言へば、天人一體又は神人一體の説である。即ち進化論から言へば人は動物から進化したものであるが、已に人間となつた以上、更に神に迄進化すべきものであつて、之が爲には高尚なる人格を育成し獸性を消滅せしめて、神性を體得すべきであり、斯くて始めて人類の進歩は其の極點に到達し得るとなすの點である。

中國に於ける青年會は始め米人によつて發生したものであるが、現在では各省とも非常に發達し、中國七八萬の會員が一致團結して、已に一個の頗る強固なる團體になつてゐる。余も曾つて二三十年前、此の團體と往來し、従つて會員の友人は非常に多い。然し當時此等の友人は、談國事に及べば、自分達は政治は問はないことにしてゐる。だから國事は論じないと言ひ、我々革命人より見れば頗る奇怪に思はれた。そして青年會は畢竟するに何をなさんとするものであるか、其の團體は何の爲の用意に結ばれたものであるかの疑問を我々に起さしめた。然るに其後余が米

國に行つた際、偶々總統の選舉中であつたが、社會各般の人々は皆某地の某氏が總統の運動をなしつつあるとか、某地の某氏に對する投票數はどうであるとかのことを悉く熟知し、毎分毎秒の新聞に非常に注意し、眞に學國熱狂の状態であつて、殊に青年會の會員は最熱心に此事を討論してゐた。總統の選舉に付て討論するのは即ち政治を談することであり、國事を云爲することではないか。而も其の青年會が中國に在るが故に政治を問はないとすれば、實に奇妙なことになるではないか。

政治と云ふ言葉の意義に二種ある。此字を英譯すれば Politics となるが、英語の Politics なる言葉の意味は甚だ廣く、用途も甚だ多い。余が嘗つて外人の家で晚餐をとつたことがあるが、食後主婦が其家の主人に對して No family politics to-night と言つた。此の言葉を直譯すれば、今晚は家庭の政治を談じないとなり、更に意譯すれば、今晚は家庭の是非は言はない、と言ふことになる。之は一例であるが、politics なる語には三つの意味があるのである。一つは國政であり政府の執行する國家の大事のことであり、他は黨争即ち政黨間相互に用ひられる詭謀のことである。更に今一つは是非を意味すること前述の家庭の是非云々の場合と同様であつて、外人は普通是非のことを politics と言ひ、他人の是非を言ふまいと言ふ時には No politics と言ふ。中國の

留學生で外國にゐる者は此の No politics なる言葉を聞くことが非常に多いであらう、だから此の字の使用の眞意を仔細に研究しない者は、歸國して、外國人は皆政治を談ぜずと言つてゐる、だから我々も政治を問はないのだと言ふ様な説を爲すに到るのである。試に觀よ。外國人が果して政治を過問してゐないかどうか。何故歐洲大戰中、中國在住の外人が、悉く歸國して從軍したのか。身を捨てて從軍するのは政治を過問することではないか。更に中國に在つて傳教に携はつてゐるのは、英米佛獨等の各國人であり、彼等の教會は異つてゐるが、信奉するのは均しく耶蘇上帝であつて、夫々其の本國內に於て信奉する宗教も、總て大體に於て同じであるに係らず、一度開戦するや、各國の教徒は夫々自國を守つて、彼此相殘殺した。此の事實より觀れば、究極に於て宗教が重要であるか、政治が重要であるか、更に宗教家は政治を問はないものであるかどうか解るであらう。宗教家は政治を論じて不可ないのである。故に余も今夕諸君等と共に政治を談じたいと思ふ。

政治を言ふには國家の事に論及せねばならぬ。國家は責任として政府を樹立して、人民の幸福を謀らねばならぬ。政府に關しては近時各國間に二種の説が行はれてゐる。一つは政府は人民を保護し、代つて其の幸福を謀るものであるから、當然存在すべきものであるとなし、他は政府は

人民の幸福に干渉するものであり、其の権限が餘り強大すぎるから、之を縮少して零とすべきである。と主張する、換言すれば政府の必要は無い、無政府結構であるとす説で、之は露國に於て最も發達したものである。之は露國の従前の專制政府が餘りに暴虐であつた爲に、之を打倒して無政府状態にせんとする所から出たものである。然らば究極に於て政府は人類にとつて有益なものであるか、無益なものであるか。來場の諸君は人類を改良し國家を救ふことを主張して居られるから、當然政府は無用なりとの論をなす様なことは無いであらう。國家の基礎が穩固なるを得るのは、其國民の文化が進み、相互團結して國家を守るからである。而して國民各個の進歩は其個人個人の努力に依つても得られるものであるが、政府が有れば其の事を提唱し幫助し得る便益がある爲に、一層進歩が速かであり得るのである。故に我々が高度の社會文明と速かなる人類の進歩とを欲するならば、政府は無用なもので無いばかりか、非常に有益なものなのである。唯其の政府が不良なものであれば、社會の進歩は緩慢であるばかりか、時としては之が爲に社會は進歩し得ざるに至るものであつて、斯の如き先例は古今中外に極めて多いのである。我中國は有史以來四千餘年になるが、此の間社會文明の最も發達したのは周の時代であつた。周代の種々なる哲學科學等の文物制度の如きは、外國に於ては今日始めて之を有するに至つた程のものであ

る。然らば何が故に周代には斯くも絢爛たる文明を有し得たかと言ふに、夫れは文武成康等の諸王による良政府が存在してゐたからである。然るに其の後秦の始皇の焚書坑儒の事があつて以來政府は不良となり、文明は退化し、古代已に存在した文明迄も其跡を絶つに至つた。更に清朝となつてからは一代は一代毎に悪化し、遂には亡國滅種の憂さへ有るに至つた。茲に於て今を去る十二年前、多數の志士が救國保種を念じて革命を敢行し、斯くて滿清を傾覆して民國を建設し、人民自己の能力を以て國家を挽救せんとするに至つた。然るに民國成立後十二年、徒らに民國の名のみを有つて其實なく、清政府は已に打倒したが、其餘毒は未だ肅清さるるに至らず、殘存した官僚と武人とが悉く政府を占有して了つた。之が爲に民國は未だ人民の手に無く、完全に武人官僚の掌中に在るのである。先きに我々は革命志士の奮闘によつて滿清の手に亡ぶること無きを得たが、今後繼續して奮闘せざるに於ては或は武人官僚の手に滅びなければならぬかも知れない。若し我々が彼等をして中國を滅さしめざらんとするならば、一般民衆は之が爲に同心協力して奮闘しなければならぬ。青年會の主旨は體育德育知育の三項を掲げて人類を改良し、國を救はんとするものであり、之れ全國民の歡迎する所のものである。國家は人類の集つて成れるものであり、各人は皆一個の立派な國家を造成し得る機會を有するものである。従つて吾が國家を

改善せんとせば、先づ各人が其の人格の向上を計らなければならぬ。中國の團體で立派な人格を有するのは青年會である。故に青年會は良好なる國家を造成し得る團體である。青年會の會員は已に七八萬人に達して居り、此の七八萬人が總て上々の人物とは言へないにしても、其の中必ずや數千人の立派な人格を有する者があるだらうことは信じ得られる。此等の數千人の指導があるからこそ、青年會は一個の人格を有する團體たることが出来、又此の故にこそ全國の志ある青年が喜んで入會し立派な人格となるのである。我々政治に與る者が、中國を改良して一つの完美なる國家たらしめ、四億人の悉くを人格者たらしめんとせば、如何にすべきかと言ふに、之が爲には源流を清からしむる意味に於て、全國民の人格を向上せしむる必要があり、夫れには國家全體を變じて青年會たらしむればよいのである。斯くすれば四億の國民全體が人格を涵養し得るであらう。此の方法は中外人共に未だ考へ及ばなかつたもので、此の「人格を改良して國を救ふ」方法は中國の創意に係るものである。

前にも述べた通り中國の青年會は米國から傳來したものであるが、米國は歐戰後世界第一の富強國となつた爲に、人民は國家の事を管理する必要が無く、又政府に代つて奮闘しなくても能く一等國としての榮譽を享有し得る様になつた。と云つて米國人の此の國事を過問しないと云ふ道

理を其儘中國に移すのは不可である。米國には良好なる政府があるが、中國政府は不良である。だから青年會も米國に在る間は米國式であつてよいが、中國に於てはそれでは不可である。諸君の中、渡米した者は記憶してゐるであらうが、米國に行けば上陸前、船の一二三等のうち何等に乗つてゐても米國人がやつて來て尋ねる。お前は中國人か、日本人かと。そして日本人であれば自由に上陸出来るが、中國人は税關で検査を受けなければならぬし、之が爲に數日間煩しい目に逢はされて、始めて自由上陸を許されるのである。余は嘗て米國に行つた時、税關内で三週間を過したことがあつた。然し之などはまだ幸な方で、甚しきに至つては、旅費と時間とを空費し而も検査による種々なる苦痛を受け、目的の米國を眼前に見ながら上陸することが出来ず、乗つて來た其船で其儘中國に送還される者さへある。米國人が智育、德育、體育を主張し青年會を組織して個人社會の改良を計つてゐるのは頗るよいことである。然し只管米國人にのみ學んで、自己の事のみを念頭に置き、國事を念としないのはよくない。何故かと言ふに彼等の地位と我々の地位とは大なる相違があるからである。我々が外國を旅行する際、彼等外人が我々の中國人なることを知つた場合には、例へば以前の桑港の大旅館の如きは我々の宿泊を許さなかつた。上海の外國公園には以前「犬と中國人とは入るべからず」との掲示が出されてゐた。斯く觀じ來れば

我々中國人が世界に於て如何なる地位を占むるかが知られるのである。然らば四千年の歴史と文明とを有する中國四億の國民は、何が故に斯くも其の國際的地位に於て一落千丈するに至つたのであらうか。之れ即ち我々中國人が自ら奮起せずして墮落したからである。何が故に墮落したか。各人が人格の向上を計らなかつたからである。我々が國際的地位を恢復せんとするならば、我々は墮落してはならない。而して墮落せざらんとすれば人格の向上を計らなければならぬ。青年會が中國に於て成立してから已に二十餘年になる。そして會員の人格は全部が全部立派だとは言へないにしても、會全體としての人格は已に養成されてゐる。然らば此の養成されたる全體的人格を以て如何なる事を爲すべきであるか。此點簡單に言へば、諸君の爲すべき事は諸君の平常の主張たる人格救國でなければならぬ（拍手）中國人の人格は已に極端に迄墮落して居る。彼の多數官僚武人の如きは、只地位の昇級と金儲との如き私利私慾のみ事とし、國事は總て之を擱いて顧みないのである。斯る人格をしも尙墮落せずと言ひ得るか。我々は國を救はんとせば先づ彼等を除去しなければならぬ。而も彼等を除去するには、一兩人の力を以てしては駄目なのである。従つて我々は個人々々の力に依つて國を救はんとしても、夫れは不可能であつて、之が爲には必ず大多數人の同心協力によらなければならぬ。此の故に須く青年會の此の團體を以

て去つて救國の事に當らなければならぬことになるのである。

談じて團體救國の事に到れば、國民黨中、國家の爲に一身一家を犠牲にし、最も誠心誠意を以つて去つて救國の事に當つた最も有名なる人物には、黃花岡の七十二烈士があり、彼等の前には陸浩東、史堅如の兩名がある。而して陸浩東と史堅如とは實に青年會の會員にして且つ國民黨の黨員を兼ねてゐた者だつたのである。即ち彼等兩人は青年會員としての人格と、國民黨員としての資格とを以て、來つて此の犠牲的行爲を爲したのである。然し同じ青年會員の中にも北京に去つて官途に就いた者もある。此等の會員を陸浩東、史堅如等と比較すれば、其の人格には雲壤も只ならぬ相異があるのである。若し北京に去つた此等の會員をして香港、廣東に來らしめたならば、亦陸浩東、史堅如たり得ることも出來たであらう。故に我々は一生の事を爲すに當つては、萬々謬れる道を行くこと無き様注意しなければならぬ。若し正道を行き得て來つて救國の事に當ることが出來れば、如何なる者と雖も歓迎されるであらう。國民黨の分子は複雑ではあるが、革命以前彼等は已に國家と民族とに滅亡の危険のあることを知り、自ら來つて救國の事に當つた。故に革命以前には彼等の人格は世人に歓迎されたが、革命後國家種族に危険なきを知るや、只管陞級と金儲とのみを願ふ者が増加し、従つて黨の分子は益々複雑となつた。今回國民黨が廣

州で大會を開催した際、其の討論の最も重要な問題は、彼等を如何にして淘汰するかと言ふことであつた。若し此一事を実行し得れば、國民黨も諸君等の青年會に負けない程のものになるであらう。

余は青年會に對しては、最大の希望を有してゐる。今回開かれた廣州の會合では、討論すべき問題も自然非常に多いことであらうが、決して徒らに空言に托し、散會後抛擲すると言ふ様なことがあつてはならない。各人は必ず自己の郷里に歸つてからも、青年會の提唱してゐる人格救國の事を實行しなければならぬ。果して青年會に此の力があるかどうか。余は三十餘年來の革命の經驗によれば、青年會には確に此種能力がある。諸君は自己の能力を卑下してはいけない。事實諸君は爲し得るのである。然らば諸君の能力は要するに奈邊に存在するか。青年會の歴史について見れば、成立以來已に二十餘年を経てゐる。而も今日始めて救國を提唱するに至つた。我々國民黨は革命と救國の事業とに従事すること既に二十餘年になるが、未だに成功するに至らない。然し諸君は今日から救國の事を始めても、決して遅くないばかりか、寧ろ今が其の絶好の機會なのである。何となれば現在の情勢は従前と非常に異つてゐるからである。一例として都會の交通について言つても、我々が以前革命をなしてゐた頃、廣州には轎子ばかり有つて自動車は無

かつたが、現在では自動車がある。何處かに行く場合、轎子と自動車と、どちらに乗つた方が速いか。勿論自動車が速いに決つてゐる。之と同様現在では何をすることも、總て非常に容易であり、且迅速である。従つて諸君が國を救はんとすれば、現在では其の成功は極めて速く、此點自動車に乗ると同様である。即ち我々國民黨が轎子に乗つて二十年間走つて未だに到着しない處に、諸君は自動車に乗つて忽ち到着し得るのである。

嘗つて我々國民黨の爲した革命は、各省が之に響應して遂に滿清政府を消滅せしむるに至つたが、清朝殘留の官僚武人は未だ消滅せしむるに至らなかつた爲に、民國は名あつて實無きが如き状態となり、國民黨の主張する眞の民國は未だ其の建設に成功するに至らない。然し現在四川は國民黨の手中に在り、湖南も同様我黨のもので、兩廣は言ふに及ばず、其他の省にも三民主義を歓迎するものは甚だ多い。斯の如く國民黨は武力には失敗したが、其の提唱する主義は決して失敗してゐない。而も尙大功を告成せしめ得ない原因は、究極に於て奈邊に在るのであらうか。此原因を簡單に言へば、全國の大多數の人民が、猶十分に革命の道理を知らないからである。而して人民が革命の道理を知るに至らない原因は、宣傳が普遍的でないからである。若し國民黨に青年會の如き完全なる組織があり、到る處に於て革命の道理を宣傳し、以て人民に十分此事を理解

せしめ得たならば、人民は自然我々の主義を歓迎し、來つて民國の建設に當り、従つて民國は夙に成功してゐたであらう。貴會は二十二省に夫々頗る完備した機關を有してゐるから、其等の機關をして諸君の主義を宣傳せしめ、全國の青年子弟に救國の道理を知らしめたならば、夫れこそ諸君等の爲に大なる救國の能力と爲し得るであらう。我々は以前革命の總機關を日本の東京に設けたが、當時一萬人の黨員があり、此等の黨人が救國を發起し、革命を提唱してゐたのであるが其後其等の一萬人が夫々歸國して各省に分散し、各々我黨の主義を宣傳したのであつた。當時に於ては犠牲的精神が非常に強く、之が爲に一度び武漢に兵を擧ぐるや、直ちに清朝を打倒し得たのである。然るに革命後犠牲的精神が漸次消滅し、従つて我々の能力も次第に縮小して了つた。更に國民黨員には生命の危険があるが、青年會員には此の危険が無い。従つて我々が黨員の増加を謀ることは、諸君等が會員の増加を謀るのに較べて、數倍の困難がある。現在國民黨に屬する各省の分子には、生命に對する危険は無いが、彼等は入黨を以て官途に就く捷徑と心得てゐる様な状態で、黨分子は一層複雑となつてゐる。之に比し青年會員が一致奮闘するに於ては救國の希望は頗る大なるものがある。只、救國に當る場合は、須く自己の長所を、最も夫れに適合する方面に向つて利用してこそ、始めて良好なる成績を擧げ得るのである。若し之を用ひて當を得な

かつたならば、諸君が斯くも大なる能力を以てし十年二十年の後になつても必ずや良好な成績を擧ぐる事は出來ないであらう。莊子に曰く「宋人の手に龜せざる藥を善くする者あり、世々布を漂すを業となす。客有り、百金を以て其法を賣らんことを請ふ。族を聚めて謀つて曰く、我世々布を漂すも、得る所數金に過ぎず、而も今技を百金に鬻ぐ、請ふ之を與へんと。以て吳王に告ぐ。越と難有り、吳王之をして將たらしめしに、冬越人と水戦して、大いに越人を破る。因つて地を割きて之を封す。能く手に龜せざらしむるや一なり。而も或者は封ぜられ或者は漂布を免れず。則ち用ふる所の異なるなり」と。此の言葉の意味は、手を保護して、冬の龜を防ぐ彼の藥を、宋人は用ひて當を得ず、世々單に布を漂した後の手に塗つてゐたに過ぎなかつたが、吳人は之を適當に用ひ、冬の水戦に於ける兵士達の耐水用に供した爲に、遂に一國の主となるを得たと言ふのである。諸君等青年會の斯る大なる能力も、若し用ひて其當を得たならば、必ずや以て國を救ふことが出来るであらう。

余は今日諸君の爲に一つ貢獻をしようと思ふ、諸君は此の貢獻に付いて聞く前に、余が國民黨の領袖であり、國民黨の從來の革命は彈丸を以てしたものであるから、今余が諸君の爲にせんとしつゝある貢獻も、矢張り諸君に彈丸を用ひさせることであらう等と間違つた想像をしてはいけ

ない。彈丸による方法は余は已に過去に於て之を用ひて來た。諸君も承知の通り社會の改良は、破壊と建設との兩部分に分けることが出来る。而して破壊の事は我々國民黨が已に爲して來たが、建設の事に至つては、今猶少しも之を爲してゐないのである。建設は多岐多端に互つて行はねなければならぬが、其中最も重要な一事がある。此一事が何であるかを知る前に、我々は先づ自國の國情を明かにせねばならぬ。現在北京城では曹錕が中華民國の大總統をやつてゐる。中華民國と言ふ名稱は余が始めて名付けたものであるが、此の名稱の有する意義は果して何であるか。諸君も中華民國が帝國でないことは知つてゐるであらう。帝國では皇帝一人が國の主人であるが、民國では四億人が國の主人となるのである。で我々人民が眞に國の主人となり、萬の國に優る國を造らうと思へば、必ず國家の政治をして全民政治たらしめなければならぬ。曾つて世界に於て全民政治を最も完全に、且つ簡單に説いた言葉は「リンカーン」Of the people, by the people, and for the people なる言葉である。そして此の意味を譯すれば民有、民治、民享となるのである。即ち我々は自國の國情と此の三つの意思とに立脚して、清朝を倒し、民國を建てたのである。斯くすることに依つて民有の目的は既に達したが、十二年來政權は悉く武人と官僚とに掌握され、人民は國事を管理し得ざるばかりか、日々兵災の禍を受け、流離して其の所を失

ひ、到底民治民享の實は擧げ得ない状態にある。眞の全民政治には、必ず先づ民治が必要であつて、然る後始めて眞の民有民享の實を擧げ得るのである。最近北京政府が頒布した偽憲法にも、其第一條に中華民國の主權は國民全體の所有なる旨を明記してある。之は曾つて余が南京で頒布した臨時約法を襲踏したものであるが、其の實國家の行政は總て曹錕吳佩孚等が、滿清の官僚と契約労働者に過ぎない議員等として之を處理せしめてゐる。斯る状態でどうして民治民享の實を擧げ得ようか。現在の民國は事實官治、政客治、武人治であつて民治ではない。近時國民黨員が廣東に集つて戰爭をしてゐるが、之も武人の專制と其の民治反對とに起因するものである。十餘年來廣東では諸事皆一般武人官僚の專制を受けて民治を施行することが出来ない。だから我々は彼等を打破せんが爲めに連年兵を用ひてゐるのであつて、人民は之が爲に連年兵災の苦痛を受け建設も出來ず、其結果政府に對して怨嗟の心を抱くやうになつてゐるのである。然し我々の求むるものは眞正の民治であり、一勞永逸の計を爲さんとするものであるから、人民に暫く斯様な苦痛を受くることを忍んで貰はなければならぬのである。然るに一般人民と清朝殘留の官僚とは程度が甚低く、眼光も狭小で、徒らに偷安の計をなし、眼前の太平を享有し得れば、之れ民治なりとの謬つた考へを持つてゐる。眞正の民治は余の主張する民權主義を徹底的に實行し、地方



自治を實行し得るに至つて始めて實現し得るものである。然るに現在民權主義は毫も實行し得て居らぬ。民權主義を實行し得ねば、民治とは言ひ得ないし、民治を施行してゐなければ民國とは言ひ得ない。

諸君は人格救國を提唱されて居るから、諸君の團體の人格は必ずや充分なものであらうと信ずる。而して此の充分なる團體の人格を以て救國事業を爲さんとするに當つて、余が諸君に貢獻せんとする方法は「地方自治」である。余の主張する地方自治は、兵事完結後、全國を千六百餘縣に分ち、各地方の事は夫々地方人自ら之を治め、政府は毫も干渉しないと云ふのである、十餘年來此の方法を實現する機會がなかつたが、現在廣東には之が爲の機會がある。只だ困つたことには人材が足りないのである。余が諸君に望むのは、諸君が全國の人民に如何にして分縣自治を實行するかを教へられんことである。若し千六百餘縣の悉くが自治を實施し得るならば、自然中華民國は成立するに至るであらう。之に反し全國人民が自治を實行し得ずして、官治に依倚してゐるならば、中華民國は永遠に成立し得ないであらう。現在北京の多數官僚は救國と治國とは總理總長にして始めて之を爲し得ると考へてゐるが、過去に於て總理總長になつた者は少くなかつた而も誰一人として救國治國の實を擧げ得る者は無かつたではないか。余自身も開國當時總統とな

り、其の後も總裁總長となつた、其都度餘り多く治國の事を爲すことは出来なかつた。で現在では民國の建設は上層部からしたのでは不能であつて、今後の民國建設は下層部からしなければ駄目だと思つてゐる。中國人の普通心理では何事によらず總て上層部から着手すべきものであると考へてゐる。家を建てるにも、下部の土を動かさず、基礎工事をしない前に柱を組んで、梁を上げ、梁を上げた後改めて下層建築に着手する。之に依つて見ても「上から下へ」になるではないかと言ふのである。然し外國人は之と異り、家を建てる際にも、下から上へと造つて行く。余は會つて一度一人の田舎者が上海の街を散歩し、多くの労働者が一箇所の空地を非常に深く掘つてゐるのを見て、奇怪に思つて、傍の人にどうしてこんな繁華な處に魚池を掘るのかと尋ねた所傍にゐた上海人が、あれは魚池を掘つてゐるのではない。洋屋を建ててゐるのだと答へてゐるのを見たが此の例に依つても中國の普通人は、家は上部から作るものだと言ふことのみを知つて、外人が大家屋を建てるに、先づ一つの非常に堅固な基礎工事をつくり、下層部から作り始めて一層一層と大家屋にして行くことを知らないことが解かる。今、諸君が國を救はんとするに當つて諸君は已に地方自治の方法を知つて居り、又青年會は團體的能力を有してゐる以上、地方自治を實行するに當つて何一つ缺けてゐるものはない譯である。要言すれば地方自治の各般に互つて必

要なのは人材である。譬へば廣州の如き此の兩三年の軍事期間内に市政廳を組織して廣州市の自治に關する仕事をさせてゐるが、市政の處理に通曉せる人才が少くない爲に、近來の成績は廣州に來遊した外人で驚かない者は一人も無い様な有様である。若し世が太平となり、更に進歩を求めたならば、成績は一層觀るべきものがあるであらう。現在の廣州市は一つの試験に過ぎないのである。諸君は青年會に於て體育、知育、德育を研究する以外に、若し地方のことを爲すことに興味を有するならば、別に一箇の地方自治研究會を組織するか、又は地方自治學校を開設して専門の人材を養成し、之を一年もやれば尠からざる人才を作り得るだらうし、三年もやれば非常に多くの人材を作り得るであらう。人材が出來て其等の人々が我々と協力することになれば、現在の廣州同様、我々は二三縣を諸君に提供して試験用に供するであらう。若し成績がよければ、之を廣東全省に擴張し、惹いては之を全國に及ぼせば、中華民國は必ずやよく治るであらう。諸君は若し救國を想ふならば、先づ治國を學ばなければならぬ。治國の方法を知らなければ、諸君は一塊の土くれに過ぎないものであり、救國の事も何處から着手してよいか解らないであらう。現在の中國は四分五裂して殆ど一個の國家を成してゐない。吳佩孚の如きは武力統一を想ひつつあるが、之は究極に於て成功するものであらうか。中國の歴史から看れば必ずや不成功に終る

であらう。楚漢の戰に於て項羽の兵力は劉邦に比して遙かに強大であつたに係はらず、結局項羽が失敗し、劉邦が成功したのは何故か。最も簡單な原因は項羽は武力に依頼したが、劉邦は入關後、約法三章を制定し、事毎に皆寛宏大量を旨とし、民心を主としたからである。最近の例に見ても袁世凱の兵力はあんなに迄強大であり乍ら、洪憲帝國は僅かに八十三日で没落して了つた。之を以て見ても武力の頼むべからざるを知り得るであらう。更に之を歴史に徴して見ても、諸君が知つてゐる通り「王は大なるを待たず、湯は七十里を以てし、文王は百里を以てせり」と言はれてゐる。然らば彼等が七十里或は百里の狭小な土地を地盤として、而も中國を統一し得たのは何故であるか。之れ實に彼等成湯と文王とが非常に立派な政治をしたからである。諸君も救國を想ふならば、極めて小さな地方に善良なる政治を布かねばらぬ。廣東省の數縣は、喜んで諸君の試験用に提供するであらう。斯様な方法は我々國民黨の早くから考へてゐたものである。只人才が缺乏して居た爲に施行するに至らなかつたのである。然るに今青年會は斯くも多數の人才を以て救國の事に當らんとしてゐる。須く「文王は百里にして而も王たり」の心思を有しなくてはならない。斯くてこそ始めて中國を治めることが出来るであらう。諸君等の如き學識ある人才は去つて普通人民に自治の知識を教へ、教師の傳教方法に倣つて徐ろに之を行はなければならぬ。

青年會の組織を以てして斯様にやつて行つたならば、全國人民の自治能力は必ずや其の培養に成功し、全國の人民は必ずや自治能力を有するに至るであらう。斯くて全國の人民が民國の國民としての資格を有する様になれば、國家も一個の大なる青年會の如きものとなり、全國の人民の全部が體育、智育、德育を兼備した人格を有するに至るであらう。

諸君は今日聞いた此の話を直ぐに忘れてはいけない。必ず實行しなければならぬ。余は本日中國基督教青年會の諸君を歓迎し、諸君の爲めに上述の如き多くの貢獻をしたのであるが、諸君は此等の貢獻を採納し、去つて救國の實行に當られんことを余は切に希望する。能く諸君等の全部が此等のことを實行するならば、此の歓迎會も決して無駄ではなくなるであらう。余は衷心諸君等の人格救國の成功を祝福する。

## 求學と救國

——民國十二年十二月二十一日嶺南大學學生歡迎會に於て——

諸君、余は今日、此地に参り、嶺南大學學生會に臨んで、諸君と相見ゆる機會を得た事は、余の非常に嬉しく感ずる所である。諸君は中華民國の育てた俊秀であり、將來民國の建設事業を繼

ぐべき責任を有して居られるのであるから、余は諸君に對して大いに希望したいものを持つてゐる。

中華民國開創以來、今日に及ぶまで既に十二年を経過したが、此の十二年間は、一日として紛亂の中に暮さぬ日はなかつた。さきには南北分裂し、今は、各省、各地方の分裂があつて、干戈相見え、糜爛を極めてゐる。此の原因は、滿清政府を承繼した後、舊國家に對する破壊事業がなほ成功せず、ために新國家が建設に従ひ得なかつた爲である。將來破壊の成功せる後、次いで一新民國を建設するには、どうか、今後の諸君が此の大責任を背負はれん事を希望せざるを得ない。

今日諸君に對して、若し専ら國家の大事を論ずるならば、千緒萬端、到底一二時間を以てしては説き去る事は出来ない。只だ、今日余は嶺南大學に参つて、學校内を參觀し、その規模の宏大なると秩序の整然たるを見て、非常に感慨深きものがある。今此の感慨に就いて諸君と語り合ひたいと思ふ。

嶺南大學は廣東省に在るが、諸君がこれ迄に學ばれて知らるる通り、此の學校の宏大な規模と整然たる秩序は、他の學校に比較して、廣東に於いて第一と云ふべきものなるのみならず、中國

西南各省に於いても一ありて二なきものと云へる。何故に廣東では、ただ一嶺南大學のみが立派で他に立派な學校がないのか。西南各省に就いて見て嶺南大學同様の他の學校が存在しないのは何故か。それは此の大學が米國人經營であるからであり、諸君が此處に於いて受ける教育は、米國の教育であり、諸君は此の學校内に生活すれば、米國本國の學校に在學するのと差違がない。吾人が、何故に米國にはかく立派な學校が有り乍ら中國には無いのか、中國は何故に自身の手で創立經營し得ないのかを推測するに、それは、歐米の文明が最近二百餘年間に急激な發達を遂げ米國は最近數十年に最も進歩したからである。その國內の状態は、ただに教育が立派に行はれて居るのみではない。工業、商業及び一切の社會事業はいづれも中國に比して遙に進歩せるものである。一方中國の一切の事業は、今日に及んで腐敗の極點に達してしまつた。腐敗の原因は、人民が墮落した事である。歴史の跡をたづねる時、中國は果して從來常に外國に及ばなかつたであらうか。嘗つて、幾朝かに於いては中國は常に外國に比して優つてゐた。故に此の腐敗墮落の現象は、近來に至つて漸く生じたものに過ぎない。更に現在中國青年が教育を受けて居る状態を述べると、全國到る處に戰亂があつて、一般人民は死を免れる爲めに寧日がない。かくては何人かよく其の子弟を學問せしむる力を有し居るだらうか。また學校に在つて學問する青年のうち、幾

人かよく諸君の如きかかる好機會を與へられ、かかる立派な學校に在つて高等の外國教育を受け得るものが有らうか。單に廣東の人口に就いてのみ云へば、人口三千萬と稱するが、その十分の一として約三百萬の青年が居る。當然此等の人々も諸君と同様に教育の機會を受くべきにも拘らず、現に此處には諸君千數百人のみが、此の機會を與へられて居るに過ぎない。諸君、自己の與へられたる機會が如何に尊いものであるかを三思せられよ。

現在、民國に於いて、人民が教育を受けるには、みな平等の機會を有すべきである。今日の情態に就いて見れば、彼等が高等教育を受ける事の不可能は、平等の機會を有してゐない事を意味する。諸君が現在、斯様に高等教育を受けて居られる事は、諸君の機會が、彼等に比して恵まれて居り、諸君が現在享けてゐる幸福は彼等に比して厚いのである。將來學成れる後には、まさに何等か貢獻する所あつて社會を改良し、彼等をして今後よく平等の機會を得るに至らしめねばならない。

諸君は教育を受けてゐる現在、將來學成つた後に社會に貢獻するため、一體何を爲すべきであるかを豫じめ考へて居られるであらうか。諸君はなほ卒業前であり、知識も大いに發達して居らず學問も成就して居らないので、勿論諸君に必ず何を爲さねばならぬと責備する事は不可能であ

るが、豫め之を行ふ前に、如何なる準備を爲すべきであらうか。如何なる事に注意を拂ふべきであらうか。余の考では、此の時代に在つては、第一に立志である。立志は讀書人にとつて最も緊要な事柄である。

中國讀書人の思想は、みな士は四民の上に立つ者にして、農工商の人々に比して一段と高いものと考へて居り、二三十年前の學生達は一種の志を有してゐた。即ち家に閉ぢ籠つて勉強する時代には、いづれも試験に及第して翰林院に採用され、その後更に大官たらん事を期してゐた。余が今日諸君に希望する所は、左様な舊思想による立志ではない、翰林院に入つて大官たらんとする志より、より一層大きなものである。中國幾千年來、志を有する人は固より少數ではなかつたが、彼等のこうした舊思想の立志は、専ら個人の發展、個人の幸福を謀る事に重きを置き、近代の思想とは大いに相容れない。近代人類の立志の思想は、社會の發達、一般の幸福を謀る點に重きをおく。事實をあげて説明すると、我が中國の青年が、抱くべき志望は如何なる點に在るか、それは中華民國を改めて建設し、將來民國の文明をして、各國と相並んで歩調を一にせしめる事である。吾人現在の文明はみな外國よりの輸入物で、全然外國人の提唱によるものである。これ實に、幾千年來未だ嘗つてなき大恥辱である。若し吾人が志を立てて、國家を改良し、萬衆一心

協力奮闘したならば、なほ歐米の跡を追ふ事が出来よう。若し然らざる時は、中國は事毎に人後に落ちて、永遠に自ら發達する能はず、永久に進歩しないであらう。その極端な結果としては、中國は滅亡の淵に沈むの外はないのである。故に現在の青年は、國家を以て己が任となし、將來の社會を建設する事業の責任を背負はねばならぬ。この志願は一體如何にして立てられるか。古今内外の歴史を見ると、世界に於て極めて著名な人は、全く政治方面のみで成功せる人、政權の上にて一時極めて力ありし人々ではない。この種の人は後來その名を忘れられるに至つてしまふ。極く知名の人々は、完全に政治の範圍外に在る。簡単に述べれば、古今の人物にして名望甚だ高きものは、彼が高位高官であつたからではなく、彼の行つた事業が成功せるためである。若し或る事業が成功し得たならば、即ち高名を享け得るのである。故に余は諸君が立志して、大事を爲さん事を求め、大官たる事を求むべからずと勸告する。

如何なる事を大事を爲すと云ふのか。簡単に云ふと、如何なる事たるとを問はず、ただ徹頭徹尾、徹底して成就する、これ即ち大事である。倒へば、嘗つて「ベスト」と呼ぶ佛國人は、専ら普通の肉眼では見る事を得ないものの考察に努力した。このものは、極めて微少で、至つて用途もない通常人の視力では見るを得ないものである。普通人から見れば必ずや、何の事やらわから

ぬものに何故暇をつぶして研究する必要があるか、と考へるであらう。併し「ベスト」はその構造性質と、他のものに對する關係を、徹頭徹尾研究して一種の系統ある結果に到達し、このものを微生物と名付けた。この微生物の研究により、微生物が各種の動植物に對して害を與へる事極めて大にして、之を撲滅する事の必要を發見した。現在世界の人類が此の微生物を撲滅する事を知つた爲めに受けた利益は、何程あるか知れない。例へば従前は、蠶が此の爲に病を起すことを知らぬため、常に多數の蠶が多くの糸を吐かないで利益は極めて薄かつた。現在では、蠶も亦病を起すことがあり、病を起せば糸を吐く事が出来ぬので、其の病を受ける原因を考察し、之れが一種の微生物に由る事を知つたので、此の微生物を絶滅させれば、蠶の病も充分醫やし得て、立派な繭をつくる事が出来る様になつた。現在、廣東から毎年産出する生糸は數千萬に及ぶが、多數の人は、未だ蠶の病を醫やす事を知らない。若し、蠶をいためる微生物を絶滅せしむる事を知つたならば、更に無限に収入を増加せしめ得、其の利益は如何に大きなものであらうか。現在全世界に於て、蠶をいためる微生物除去を知る事に由つて、得る所の總利益は、又如何に大であらうか。併し、「ベスト」が微生物研究の志を立てた當時には彼と雖も斯かる大利益を齎さうとは知らなかつたのである。此の故事を引用して證明しようとする意味は、微生物は本來極めて微小

のものであるが、併し之れと動植物との利害關係を研究し、ある具體的結果に到達して人類に貢獻するならば、それは頗る大きな事であると云ふ事である。「ベスト」が志を立てて研究したものは、頗る小さい物とは云ひ乍ら、彼は之れに徹底した結果を得たので、即ち大事を成就したので、彼は歴史の上に名譽ある名を残したのである。我が中國從來の人は、みな「ベスト」の如きかかる志を立てる事を知らず、ひたすら、登第して宰相たらんとし、或は更に皇帝たらんとして志を立てたのである。秦の始皇帝が出遊の際、劉邦、項羽いづれも之れを見て、各自に感嘆の意を洩らし自己の志を表現してゐる。項羽は曰く、「彼取つて之に代るべし」と、又劉邦は「大丈夫當に是の如くなるべし」と云つてゐる。此の兩人の口吻は同一ではないが、併し彼等の志望は毫も異なる所がない。換言すればいづれも皇帝たらん事を期したのである。此の思想は、次第／＼に普通人の中にまで傳播された。故に之れより以後、中國人はみな皇帝たらん事を期し、他の事を願はない。民國成立以來、袁世凱の如く皇帝たらん事を望まないとすれば、即ち一般軍閥の如く督軍巡閱使たらん事を願ふ。之れも亦間違つてゐる。何となれば、そうした地位に到達せんとすることは極めて容易ならざる事であり、障礙物も頗る多い。彼等は志を立てて必ず其の地位に到達せんとするが故に、殺人放火、人類を殘害して悔いざるに至るのである。諸君、果してかかる

志望は立派なものであらうか。斷じて好ましからぬものである。故に吾人は何としてもかかる志望を絶滅せしめねばならない。學生の立志に際し重視すべき點は、決して何かの地位に到達しようなどと考へてはならないことであり、何等か一事を實行せんと期すべきことである。何となれば地位は個人に關係するものであり、何等かの地位についた所が、それは單に個人の幸福を謀り得るだけである。併し、事業は一般民衆に關係あるもので、何等かの事を成就すれば、一般の幸福を謀り得るのである。近代の人類の思想が、一般の幸福を謀る事を重要視してゐる事は、余が既に申上げた通りである。また諸君の知らるる如く、大事を爲して成功せる數多の人物は盡く學校に在つて書物を勉強した人ではなく、未だ一度も學校の門をくぐつた事のない人もある。よく大事業を成就し得るのは、其の人の天生の長處によるものに過ぎない。普通人が其の行ふ事に誤なからんが爲めには、古人の長所に則つとる必要がある。故に吾人は學校に入つて讀書し、古今内外の人の知識、才學をとつて自己の援助者として大事を行ふ、かくすれば其の大事は容易に成功するのである。

諸君はまた、現在農科に進んで、耕作の學問を學んで居るから、將來卒業しても只單なる一農夫に過ぎない、と云ふ事勿れ。知らずや耕作も亦大事業なる事を。昔は后稷が民に農業を教へ、

五穀を栽培せしめた。それは農業の事たるや、人民に極めて有益なる事であつたからである。彼は勞働を厭はず、百姓を指導したので爾來百姓はその恩徳に感激心服して彼を皇帝としたのである。其の出身を論ずれば、后稷は一個の百姓親爺に過ぎない。その百姓親爺も亦實に皇帝となつたのである。その昔、皇帝たりし者は、其の數幾千であらう。而かも現在は世人みな彼等の姓名を忘却し去つて、ただ百姓親爺たりし后稷のみは、今に至るも世人が忘却しないのである。今日は、科學が進歩し、外國新發明の農具は、舊時代に比して遙に優れ、勞力は半分足らずで而かも效果は従前に倍し、只々一人の耕作によつて數千人の食料を得る事が出来る。諸君は現在農科に在學するもの、學成るの曉には、外國農夫の如く一人の耕作によつてよく數千人の食料を作り得ても、なほそれで止つて居てはならぬ、更に最新の科學の原理を用ひて、耕作方法を改良し、以て一人の耕作によつてよく數萬人、若しくは數百萬人の食料を供給する事が必要である。それこそ、志あるの士と云ひ得るのである。つづめて云ふと、諸君が現在學校に在つて學問されるのは、如何なる科學に論なく、例へば文學、物理、化學、農學、そのいづれであらうとも、ただ自己の性質に近いものを選び、その部門を反覆研究し、其の他其の部門に關係する科學も亦仔細に參考し、他の理論と方法とを借り、その部門の科學の發展に資し、徹底的に研究し以て成功せる

結果を求めればよい。さすれば、中國の後稷が民に耕作を教へし如く、又佛國の「バスト」が微生物の動植物に關する關係を發見せる如く、いづれも、恩澤限りなき大事業である。

余は更に今一つ故事を挙げやう。英國人の「ダーウィン」は、最初専ら蟻及び多數の昆虫を研究し、後には一切の動物を考察し、仔細に觀察推論して、竟に進化論の原理を唱へ、現在では此の理論を擴大充實して、單に一切の動物の變化の法則を包括するのみならず、社會、政治、教育倫理等種々の學理もその範圍外に脱出する事を得ない。故に「ダーウィン」の功勞は、世界多數の皇帝の功勞より却つて多大である。全世界の皇帝の數は幾千であらうか。諸君の多くは、彼等の姓名を知らないであらうが、現在諸君は、恐らく誰一人として「ダーウィン」を知らぬ者はなからう。故に「ダーウィン」の功勞は、實際皇帝を凌駕して居るのである。かく論じて來ると、如何なる事たるを問はず、ただ徹底して成功し得れば、それが大事と云ふべきである。故に微生物を考察して得た理論は大事であり、蟻を研究して得た理論も亦大事である。ただ吾人は讀書の際に、自己の本能を用ゐる必要がある。本能とは何の事か。之れは自己が喜んで爲さんとする事である。即ち自己が喜んで爲す所の事は、徹底して行ひ、以て最後の成功を求め、途中で新を喜び舊を厭ひ、珍しきものに心を移してはならない。それが、即ち立志である。立志は、今日或る

志を立てたなら、明日或る地位に到達せねばならぬとするもので有つてはならない。從來の皇帝たらんとする思想は、過去の陳跡で、根本から之は打破するを要する。立志とは、ある一事を徹底的に成就し世界に於ける新發明をなす事である。若し新發明が行はれたなら、世界に於ける地位も大いに得る事が出來、諸君は自らその一席を占め得ないことを嘆くには當らないのである。

吾人の立志は更に中國の國情に合致するを要する。四十數年前の如きは、中國は多數の學生を外國に留學せしめた、殊に米國に渡つたものは最も初期である。彼等は米國に入るに及んでは、中國が何故留學生を派遣したか、又學問が成つた後、中國は如何なる所に用ゐんとするかには無關心であつた。米國に行けば只だ米國人同様に學問すればそれで充分であると考へてゐたから、その爲に彼等は外國に留學の時代には、「ジョージ」(佐治)「ウィルヘルム」(維廉)「チアリー」などと自稱し、中國の姓名さへ不要とし、歸國の後には、ただに中國の起居飲食が氣に喰はぬばかりでなく、中國の言葉さへ話せない有様であつた。故に久しからずして中國がいやになつて米國に歸つてしまふ。その中でも、志を立てる事、稍高尚な者は米國に歸來後、學問研究を繼續するが、そうした學生は中國の飲食起居、並に人情事理に就いては少しも知らず、その思想行爲は米國人と寸毫も差別がない。故に彼等を中國人と云ふ事は出來ない、米國人と云ふべきものであ



る。これより一等下の者に至つては、米國に歸來後、日々懷手で遊び暮し何等の仕事もしない。最早學生ではないから、官費または家庭よりの仕送りも取消され、甚しきは一身の生活を維持し得ない。茲に於いて惡事に染つて了ひ完全に地つきの無頼漢に變じてしまふ。中國の留學生であつて、歸國して中國の國民となる事なく、遂に米國の無頼漢となる。これに、如何なる利益が有らうか。また甚しきは、米國に留學中は、中國人の住居する大地にさへ足踏みせず、人から國籍を問はれても中國人であると云はない者がある。この種の學生は、一體その性根を何處に据えて居るのであらうか。かかる學生は志なきものと云ふべく、ただ人に學ぶ事を知るのみで、學んで自から事を爲す事を知らない徒輩である。

諸君は、現に嶺南大學に在つて、米國人の教育を受くる事多く、中國人の教育を受くる事は少い。學校の内を見れば、周圍には草花や樹木の趣があり、洋館や舗道の建造物があつて、この華やかな文明の雰圍氣と、學校外の大塘、康樂等の荒涼たる有様とを比較する時、眞に天壤の差もただならぬものがある。我が中國人の現在の痛苦は、毎日の生活に、少くとも三億の人々が、朝に夕を計られず、朝の食事を憂へ、終れば更に夕の食を憂ふる状態である。されば中國は世界中最も貧弱な國家である。諸君はかかる安樂、幸福を味ひつつ、國民同胞の痛苦を思ふ時、まさ

に惻隱の心を禁じ得ないものがあるであらう。孟子の所謂「惻隱の心なきは、人に非ざる也」でこれは諸君生れ乍らにして有する良心である。諸君はまさに何等かの方法を講じて、この貧と弱とを救はんとする志を立つべきである。總ての人が志を立て、共に救貧救弱の責任を背負つて、同胞を救はねばならない。若し總ての諸君が、みな此の念願を抱くならば、將來、中國は弱國を轉じて強國とし、貧窮を變じて富裕となるであらう。多くの外國留學生は歸國後、國々で、外國が現在かく文明を有する原因は、彼等に優越なる點があるからだと言くが、斯様に語る人々は、自ら甘んじて下流に居るもので、中國の歴史を讀まず、中國は數千年間常に文明の國であり、以前は常に富強であつて、現在に至つて始めて貧弱となつた事を知らないのである。かかる觀念よりして、外國と比較する時には、現在の中國は、最も貧弱なる國家であるばかりか、更に最も愚昧な國家ですらある。事々物々、みな人を外國に派して學ばしめねばならぬことは、恥辱も甚しい事である。中國が外國に派遣した留學生は、その最初には米國へ赴いたが、次いで歐洲各國に而してその大多數は日本に赴き、極めて盛んな時代には凡そ三萬餘人に上つた。世界の何處の國にもかくも多數を一時に或る一國へ派遣した例はない。余は當時頗る奇怪に感じた。何となれば此の問題に就いて既往の歴史を検討して、計らずも、唐朝の西安建都時代には、京師内の外國留

學生が一時三萬餘人に及んだ事を明にしたからである。此の三萬餘人中、日本は一萬餘人を派遣して居り、其餘は、波斯人、羅馬人、印度人、「アラビヤ」人及び其他の歐洲人であつた。これによつて唐朝の時代には、世界中、中國人が最も知識を有して居た事が明瞭であり、さればこそ各國人はみな中國に留學生を派遣したのである。日本人は中國を學んで、その國內の制度を盡く中國の制度に改めた。それで現在の建築、衣服及び一切の文物、典章、制度は中國と何等異なるところがなく、其のいづれもが唐朝の舊制度である。其の時代、中國の領土は、殆んど亞細亞大陸を統一し、西は裏海にまで及んで居たのである。以上述べた如く、吾人の祖先は實に富強を極めて居たのに、何故にまた現在貧弱なること此くの如くなるを致したのであらうか。どうして、外國同様の富強に變じ得る方法が無いのであらうか。此の原因を探究すると、それは現在の人々が発奮し得ないからである。發奮し得なければ、墮落である。墮落は實に好ましからぬ性質のもので、吾人は之れを拭ひ去らねばならぬ。中國人の天性の聰明才智に就いては、現在米國に於ける留學生がいづれも米國人と比肩して劣らず、全米内の如何なる學校に於ける學生でも、毎學期の成績平均数は中國學生がいづれも米國學生に比して遙に凌駕して居り、此の事は米國人全般の承認して居る所である。歴史によつて證明するも、中國は富強の時代が多く、劣弱の時代は少い

民族の性格について見ても中國人は實際外國人に比して優れて居る。而かも現在の國勢が斯く衰微した事は當然と其の咎を吾人の墮落に歸せざるを得ない。墮落せるが故に今後發奮し得ないならば、如何にしてか國家の富強を計らう。吾人が國家の富強を圖らんとするには須らく自から精神を振起し、一致團結、步調を一にして奮闘しなければならぬ。斷じて私利私慾を思ひ、ただ自己の地位獲得のみを知つて、國家の如何なる地位に在るかを知らざるが如き事であつてはならぬ。吾人にして此の志望を有するならば、之れが國民の意氣となるのである。中國は二百餘年前、亡國の苦痛を嘗め滿洲人に征服された。其の後二百餘年間統治されて、事毎に壓制され元氣を打挫しがれ、全國民は首をたれて屈伏し、敢えて發奮しなかつた。吾人近來の墮落の原因は、根本は此處に存してゐる。十二年以前に我が革命は漸くにして、滿洲人の政府を倒し、滿洲人の束縛を解いたが、依然として多數外國人の束縛を蒙つてゐる。之れは、滿洲政府の末年に、彼等は自ら事を行ふ事能はざるを知り、天下が遂に漢人の手中に失はれん事を恐れたが爲めに、彼等は「寧ろ朋友に贈るも家奴に與へず」と主張し、中國の領土、主權を多數外國人に分與してしまつたからである。我が漢族再起の後、固より獨立國たるにも拘らず、滿清政府が領土、主權を外國人の手中に讓渡する契約を結び、今尙ほ之を回收しない爲に、今日に至るも尙ほ獨立し得な

いのである。諸君の知らるる通り、朝鮮は日本に亡ぼされ、安南は佛國に亡ぼされた。朝鮮安南はいづれも亡國で、朝鮮人、安南人は共に頗る苦痛に惱んでゐる。併し我が中國の地位は果して如何、有體に云へば、朝鮮安南に比してより一層低いのである。何となれば、朝鮮はただ單に日本の奴隸であり、安南は佛國のみの奴隸であつて、彼等の國は亡びたが、ただ一國の奴隸たるに止まる。我が領土、主權は、現在各國人の手中に抵當として押へられ、各國人から束縛されて居る。吾人の現状は、實に各國人の奴隸に外ならない。諸君におたづねしたい。一體、ある一人の奴隸となるのが苦痛であらうか。それとも衆人の奴隸となるのが苦痛であらうか。當然衆人の奴隸となる方が苦痛が甚しいであらう。何となれば、或る一人の奴隸となれば只だ尾を振り憐を乞ふて、其の意に順つて居れば、即ち主人の歡心を買ひ得る。併し衆人の奴隸となると、諺にいふ「姑の意に従へば嫂の御機嫌を損ずる」と言つた國難が伴ふ。諸君は如何にして一切をあしらす事が出来るか。此の故に吾人の地位は朝鮮人安南人に比して一層低い。若し朝鮮安南に水害天災が生じた場合には、日本や佛國は之れを救濟する。そして彼等は之れを當然爲すべき義務と心得て居る。嘗つて、米國南部の諸省には黒人奴隸の制度が存在し、黒人奴隸は、主人から衣食住の支給を當然受ける利益を有して居た。現在の中國に若し水害天災が突發して、外國人が二三百萬

も義損金を寄附すれば、彼等は當然盡すべき義務を果したとは考へず、却つて大きな慈善を施したと考へるだらう。日本や佛國が、朝鮮安南を待つに、それを慈善だと考へて居るであらうか。故に吾人の現在は、多數外國人の奴隸となり、ただ彼等に對して義務のみを背負はされ、彼等から權利を享くる所がないのである。

今や、白鵝潭には十數隻の外國軍艦が碇泊してゐる。彼等の來意は、全く吾人に對する示威である。此種大恥辱は、我が祖先の未だ嘗つて受けた事のないものである。今日敵兵は城下に臨んでゐるのである。諸君は學徒であり、四民の上に在るもので國家を背負ふべき責任ある先覺先知である。一體如何なる方法を以て、此の大恥辱を雪ぐべく、中國を挽回救濟すべきであらうか。諸君は現に學問研究時代であるから、當然學問より着手すべきである。學問を以て中國を救ふには、畢竟如何なる方法を用ふべきであるか。諸君は現に米國の學問を學ばれて居るが、米國の歴史を讀く時、米國の興隆した所以は革命によつて齎らされたことを知る。米國は英國より脱離せる當時、人口僅かに四百萬、土地僅かに十三省のみで、完全に荒蕪の地であつた。人口に就いて述べれば、中國現在の約百分の一に過ぎない。中國は現在、四億の人口を有し、土地は二十二省物産又非常に豊富である。若し果してよく米國革命のあとを學ぶならば、米國は左様に小さな基

礎によつて、尙ほよく今日の大功業を成就したのであるから、人口多く物産に富む中國の將來の結果は、米國に比して當然遙に優れなければならない。米國が百分の一の人数を以て荒蕪の地を開拓し、一百餘年にして國家を富強ならしめた、其の比例を以て論ずれば、吾人は百倍の人数を以て、既に開拓された土地を整頓するのであるから、國家を富強ならしむるには十年を要するに過ぎないだらう。吾人が此の目的を達成せんとするには、即ち、諸君が國家建設の大志を立てる事を必要とする。米國が嘗つて革命せる頃の人々に學んで之と同様、一同協力同心して奮闘せねばならぬ。併し諸君は米國に學ばれても、決して従前の米國留學生の如く、ひたすら自己を米國人に變ずる事に努め、國家の事に無關心であつてはならぬ。必ず米國の學問を利用して、中國を化して米國の如くならしむる事を要する。國家の大事は、一個人の單獨でよく成功し得るものではない。多數の人材を必要とし、その一同が心を合せて努力してこそ始めて容易となるのである。多數の人材を有するには、人材を造る立派な學校を設けねばならぬ。ただ嶺南大學一つではいけぬ。廣東省には數十の嶺南大學を必要とし、中國には數百の嶺南大學を必要とする。そして數十萬或は數百萬の優良な學生をつくるならば、中國は大なる利益を受けるのである。若しひたすら米國人たらんことを學んで、それに満足して國家の如何になり行くをも顧みないならば、吾人

が外國に赴いた際、彼等は却つて吾人を卑劣なる中國人として嘲けり笑ふであらう。何となれば、個人に就いて云ふても、中國人の顔は黄で、米國人の顔は白。諸君が如何に學ばれ様とも自分の顔色を變じさせる事は到底出來ないではないか。諸君は、では學問するに他に如何なる方法が有るか。吾人が立派ならんが爲めには、須らく全國の民衆が悉く立派である事を要する。ただ國家を富強ならしめ、世界の一等国となしてこそ、其の時こそ、吾人の顔色は黄色からうとも、外國に赴いて自分から中國人であると名乗つて、少しも一等国民たるの名譽を失はないのである。

諸君は余を歓迎して演説を清聽されたが、余の諸君に希望するものは、即ち諸君が志を立てられ、盛んなる國民的意氣を有して、専心一事をなし、國家を援助支持して富強ならしめられんとである。此の中國を富強ならしむる任務は、即ち諸君の責任である。諸君が、此の責任を擔はれんこと、之れが余の希望である。

### 成功は軍隊の力に倚らずして黨の力に倚るを要す

—民國十二年十二月一日國民黨改組に際して—

同志諸君、今回の我黨の改組は主として本黨の勢力を中國内地の各省に擴張せんが爲である。從來我黨の勢力は多くは海外に在り従つて海外には地盤と同志とを有してゐたが、中國内地の勢力は甚だ薄弱であつた。之が爲に我黨の數年來の國內に於ける奮闘は専ら兵力を用ひ、兵力の勝利は我黨の勝利、兵力の失敗は我黨の失敗となつてゐた。今回の我黨改組の唯一の目的は、只單に兵力にのみ依倚せずして、黨それ自身の力に依らんことを期するにあつた。

然らば黨自身の力とは何か。之れ即ち人民の心の力を指すものである。今後我黨は人民の心の力を黨の力とし、此種の力量を以て奮闘せんとするのである。而して人民の心の力と兵力とは二者並行し得るものであるが、兩者の中究極に於て何れを基礎とすべきであるか、又何れが最も依倚するに足るものであるか、此の點を明かにしなければならぬ。單に兵力にのみ依ることは頼むに足りない。何となれば兵力は勝敗常なきが爲である。故に我黨は先づ一種の力を基本とし基礎とすべきであつて然る後初めて兵力に恃み得るのである。基本となり基礎となる此種力量が無い場合は、兵力が有つても結局頼むに足りないものである。

我黨が中國内地に於て、兵力を用ひて勝利を獲たことは、既往に三回の經驗がある。武昌に義兵を起し清朝を覆滅して共和を建設したのが、我黨の兵力による成功の第一である。次で袁氏が

帝と稱するや、討袁軍を興し彼袁洪憲を打倒したが、之が我黨の兵力による成功の第二である。張勳の復辟運動に抗して護法を提唱し、其後徐氏が退位し陳炯明が謀叛するや、北方の武人も護法運動を承認するに至つた。之が我黨の兵力による第三回の成功である。然し乍ら皆革命の目的を達することは出来なかつた。則ち兵力に關する限りは成功したが、革命は未だ成功しなかつたのである。之は何が爲であるかと言ふに、我黨に力量が缺けてゐたからである。然らば如何なる種類の力量が缺けてゐたかと言ふに人民の心の力が缺乏してゐたのである。當時中國の人民は革命に賛成せず、多くの者は革命の爲に奮闘することをしなかつた。故に革命は人心の支持を得なかつたのであつて、恰も源無き水、根無き木の如きものであつた。近時逆徒陳炯明が其の部下を率ゐて廣州に迫るや、我軍は其の奮闘的精神に本づいて之に抵抗し、既に陳逆の部隊を粉碎し廣州方面の戦は成功と言ひ得るのであるが、將來如何なる程度に迄効果を收め得るか、如何なる結果になるかは全く豫測し得ないものがある。換言すれば將來收め得る結果が果して善果なるか悪果なるかは豫知し得ないのである。故に我黨は、今後の奮闘に於て敗れざらんが爲には必ず先づ人心を收攬しなければならぬのである。若し其の結果國內の人民と吾黨とが同一の志望を有し彼等が皆我黨と共同して革命の爲に奮闘する様になれば、革命の成功は疑ふ餘地無いものであ

る。蓋し兵力による成功は頼むに足りないが、黨員の力によつて奮闘して獲られた成功は、充分  
依倚するに足るものだからである。換言すれば兵力に依頼する間は成功と言ひ得ないが、黨員の  
力によるに至つて初めて成功と言ひ得るのである。即ち兵力に依る勝利は眞の成功に非ずして黨  
員の力による勝利こそが眞の成功なのである。

然らば黨員による勝利とは如何なるものかと言ふに、總ての黨員が夫々責任を負ふて黨の爲に  
奮闘し黨の爲に其の主義を宣傳することであつて、一人の黨員が黨の主義宣傳に努力し、其の結  
果能く千數百人を感化し得たならば、此の千數百人が同様に黨の爲に主義を宣傳する結果、更に  
數十萬人又は數百萬人が感化されることとなり、之を推し廣むれば我黨の主義は自ら偏く全中國  
の人民に普及さるるであらう。之れ即ち主義を以て征服し得たのであつて、此の方法によれば民  
心は能く悦服するものである。之れ所謂其の心を得る者は其の民を得、其の民を得る者は其の國  
を得と言ふべきものである。

中國は辛亥革命より今日に至る迄既に十二年を經過してゐるが、國內の紛糾は愈々甚しく、政  
治經濟等各般の社會は、却つて退歩の現象を示しつつある。其の原因は奈邊に在るか、要言すれ  
ば我黨の奮闘が未だに功を奏しないのは、辛亥革命前の黨員は一人として奮闘しなかつた者が無

かつたに引換へ、辛亥革命以後は其の熱心さが消滅し、漸次奮闘の精神を喪失し、人皆が辛亥革  
命によつて清朝を覆し得たことを以て革命の全部的成功なりと考へ、繼續して革命事業に従事す  
ることを肯んじなかつた事が其の最大原因である。斯かる謬れる思想の發生原因に付ては、稍々  
詳細に之を述べなければならぬ。

武昌に於ける義舉の當時、余は漸く海外より上海に歸來したのであるが、長江の南北皆革命に  
賛成せざるもの莫く、上海の一隅に居た腐敗しきつた官僚までが出でて革命の爲に奔走すると言  
つた様な状態であつた。余が上海に着くや黨の同志は勿論、學界の人士や紳商甚しきは老いたる  
官僚達迄が一齊に來つて余を歓迎したが、其の中の一人の官僚の如きは、極めて鄭重に人に語つ  
て言つた、「現在革命軍が起つて、革命黨が滅びたことは結構なことである」と。當時余も此の言  
葉を聽いて頗る奇異の感を抱いたのであるが、久しからずして、革命黨員の經營に係ると稱せら  
れ、國內の輿論指導に當つてゐる某新聞紙も斯る論調をなすのを見て、益々奇怪なりとの感を深  
くした。一般の官僚は革命以前に於ては清朝の爲に努力し、革命黨員を殺すことを以て能事とし  
てゐた關係上、革命軍興るや只口先きのみで革命に賛成したに過ぎなかつた。當時の一般官僚は  
革命黨に何程の力量があるかを知らず、只革命を怕れてゐた。之れ若しも「革命軍が起り、革命黨

が興つた」ならば、必ずや彼等は存在し得ないこととなるからである。故に「革命軍起つて革命黨消ゆ」なる文句を造り出して、革命黨を牽制せんとしたのである。然るに革命黨員までも之に附和するに至つた。其後民國が成立するや幾多の政黨が簇生し、共和黨、統一黨等種々雜多にして縷述するに耐へざる程であつたが、其等は皆政權の獲得を目的としたもののみであつて、完全に革命黨と稱し得らるるものは一つも無かつた。茲に於て宋教仁、黃興等の舊革命黨員は、他の人々が政黨を有するに對し、我々の政黨無きを理由として相率ひて國民黨を組織したのである。

余は國民黨の組織された當時は既に臨時大統領の職を辭してゐたが、其頃の中國の形勢を觀察して我黨が不利な立場にあることを意識して甚しく悲觀してゐた。即ち我黨が成功しても我黨が抱持する三民主義と五權憲法とを實施し得なければ、何等の希望をも有し得ないのである。故に余は一切を放棄し暫時身を局外者の地位に置いたのである。其後國民黨が成立し、北京に本部が設けられ、余は理事長に推されたが之を辭した。當時の余は政黨參加を欲しなかつたのみでなく一切の政治問題にも關與しない考へだつたのである。然るに一般の舊同志は、余が理事長に就任しなければ、黨を解體しなければならぬ故に是非就任しろとの事であつた。仍て峻拒するも如何かと考へ、只余の名義のみを用ふることを許し、一切黨の仕事には關係せず、純然たる放任的

態度をとることにした。然るに宋教仁の暗殺事件起るや一般の同志は異常に憤激し、而も之に對してとるべき處置方法無きや、遂に連名にて日本に電報を打ち余の歸國を促した。其後余は上海に歸り宋の暗殺が全く袁世凱の指圖によるものなることを知つた。之には人證物證共に備はり、宋暗殺の前後に往復した總ての電文は悉く探し出して入手することが出来たのである。斯くて宋教仁暗殺の主謀者が袁世凱なることの疑ふ可らざる確證を得たのである。茲に於て一般の同志は之に對する對策を余に問ふた。仍て余は事既に茲に至りたる上は、只舉兵あるのみなる旨を答へた。蓋し總統たる袁世凱が暗殺を使喚するに至つては、法律による解決は斷じて不可能であり、解決方法は只武力有るのみだからである。然るに一般の同志は宋教仁暗殺事件を單なる個人關係の問題なりと誤信し、之が爲に天下の兵を動かすは至當ならずとなした。余は同志を極力勸誘し此の事件が個人問題にあらざる旨を説き、速に兵を起して武力によつて解決しなければ他に方法無きを主張したが、同志達は依然余の説に賛成しなかつた。當時全國の輿論は此問題に對して極度に憤激し、外國人も袁の所爲を非難し、之が爲に袁の外債募集計畫は大打撃を受けた程である。當時の黨の勢力も左程薄弱ではなかつたのであるから、此機に乗じて繼續的に奮闘したならば我黨は大いに爲す所有り得たであらうし、袁氏を討つことも不可能ではなかつたのである。然

るに各同志が賛成しなかつた爲に、遂に機會を逸してしまつた。其後間も無く袁氏は外債募集に成功し、資金を手にした彼は武力政策を實行し、遂に我黨に向つて示威をなし、先づ我黨の四都督の職を免じ、我黨も遂に起つて之に對抗し斯くて第二革命が起つたが。時既に遅く遂に失敗に歸した。

第二革命の失敗後各同志は多く日本に亡命した。彼等の大部分は失望落膽してゐたが之に反し余は至極樂觀してゐた、先づ同志の奮闘的精神を復活せしむることの必要を感じ、以て我黨の革命事業を繼續せんとし、仍て日本に於て中華革命黨を組織し我黨の革命分子を集合して専ら革命事業に従事することとした。以前は公然と革命を唱ふることを敢てせずして革命黨なる名義を用ふることを避けて同盟會を組織したのであつたが、今回は公然と中華革命黨なる名義を以て號令した。然るに當時日本に亡命してゐた同志は、日々革命を言ふも究極に於て之を實現する如何なる勢力があり、如何なる方法があるか、要するに不可能な事ではないかとの考へを抱いてゐた。即ち二年前我黨が成功し、十餘省の地盤を有し、十萬の金も三四十萬の兵をも調達し得た際にも尙且つ袁氏に抵抗し得なかつたものが、一敗地に塗れた今日何の勢力と何の方法とあつて革命を進行し得るかと考へたのである。故に余は再三同志に苦勸して言つた。「成功から失敗まで三年

の歲月を経たに過ぎないではないか。以前の黨の地位のみを考へずして、此の間の時間をも考へなければいけない。若し以前の黨の地位のみを考へ、十餘省の地盤と資金と兵とを有し乍ら、尙且つ失敗したと言ふ様な考へ方のみを以てすれば必ず行き詰まるものである。時間的に考へなければいけない。成程二年前は十餘省の地盤と資金と兵とを持つてゐた。然し更に三年以前のことを追想しなければならぬ。三年以前我黨の士は悉く亡命の徒ではなかつたか、何程の地盤があり、何程の資金と兵力とがあつたか。我黨の成功は時間にして三ヶ年に過ぎない。此の三年間の出來事を一場の大夢と思つて、再び以前の革命精神に還らなければならぬ。庚子以後、一年に一度又は二年に一度と總計十有餘度の革命を起し、起しては敗れた。然し敗れても同志は未だ曾て失望したことはなかつた。然るに武昌に於ける成功後、却つて熱を失ふに至つたのは何事であるか。三年前に於ける同志は總てが皆百折不撓、屢々仆れて屢々起ち上つた。何たる奮闘ぞ、何たる熾烈なる革命精神ぞ。余は今日同志が従前の如き精神を回復し、續いて奮闘されんことを希望する。清朝を滅した當時の我黨に果して何程の力量があつたか。大衆は皆之れ赤手空拳ではなかつたか。武昌に革命の烽火を擧げた時も何等特殊の方法が有つたのではなかつた。只大衆が必ず清朝を覆滅しなければならぬと言ふことを明瞭に意識し、人皆が此種の信念を有し、人皆が



此の理を知つてゐたに過ぎなかつたのである。而も當時に於ては其の然る所以を證明するに足る事實とは何も無かつたのである。今日我々は失敗し亡命してゐるが、我々の信用は益々増大し、我々の經驗は益々豊富となり、而も之を證明するに足る事實まで有るのである。故に今回の失敗は三年前のものに較べ、より多くの信用と經驗と證據とが有る譯である。而も三年前には失敗しても全部の者が繼續大奮闘したのに、三年後の今日は、失望して敢て續いて奮闘しやうとしないのは何事であるか」と。各同志は余の此の言を聽いてより一齊に以前の革命精神を恢復し、共に起つて中華革命黨を組織した。而して中華革命黨の唯一の目的は、革命精神を以て主義の實現を圖るにあつた。其後袁世凱が帝と稱するや、中華革命黨は起つて廣東、山東、其他長江流域の各省に義兵を起した。幾許もなくして袁氏は死し、黎元洪が之を繼いだ。然るに此時も各同志は又續いて奮闘しやうとせず、各人は皆黎氏が復職した以上民國各般の政治は彼が漸次整理するであらうから、續いて彼等が革命に従事する必要はないであらうと考へた。後、張勳が復辟運動を興すや余等は護法を實行したのであるが、革命は終始徹底し得ず少功を收め得れば直に安堵し、奮闘を中止して妥協を思ひ、遂に革命事業は未だに成功し得ないのである。

以上述べた我黨の奮闘は、多くは兵力によつたものであつて、其の爲に勝敗定りなかつたので

ある。若し此儘推移する時は我黨の成功の希望は絶無となり、三民主義も遂に實現し得ざるに至るであらう。茲に於て今回改組の必要を生じたのである。然らば今回の改組に當つて希望する所は何であるかと言ふに、我黨が一つの中心勢力となり、今後各同志が奮起し眞剣革命事業に努力し、各同志は之を以て夫々終身の事業と心得、以て三民主義、五權憲法の完全なる實現と我黨の成功とを期せんとするに在る。但し其の成功は、單に戦争にのみよることは不可である。何となれば戦争は軍人に倚るものだからである。現在の一般軍人は多くは主義に暗く、彼等は元々主義の爲に戦ふのではなく、夫々自己の地位を上げ、金儲けをせんが爲に戦ふのである。故に單に此等の軍人にのみ依倚してゐたのでは三民主義の實現は不可能である。即ち現在の軍人は偶々其の機會に逢着して、無意味なる提携をなしつつあるのである。彼等によつて革命事業を遂行せんとしても、結局頼むに足りないであらう。要するに我黨に必須なものは革命精神でなくてはならない。而して又吾人は三民主義に對しては、之が爲に犠牲とならんことを冀ひ、之が爲に喜んで奮闘する程の強固なる信念を持たなくてはならない。吾人に若し此の決心と願ひとが有り、之を全國大多數の民衆に宣傳したならば、彼等も同様に此の決心と願ひとを有するに至り、従つてより多くの同志を得て反對黨の勢力を削減することが出来るであらう。

現在我黨の有する黨員は實に少數である。吾人は應に團結を固うし、一種効果的な方法を工夫して宣傳に努力し、最短期間に廣州百餘萬の民衆悉くを變じて革命黨員たり、又我等の同志たらしめ、更に又若干期間を費して宣傳に努め、以て廣東三千萬の同胞、惹いては全中國四億の同胞をして、其の過半數を革命黨員たり、我等の同志たらしめ得たならば、之こそ眞に我黨の大成功であつて、斯くてこそ眞に國民黨黨員の勝利と言ひ得るのである。然らずして兵力によつた場合は、百戰百勝しても成功したとは言ひ得ない。上述せる三度の勝利の如きは其の實例であつて、勝つては敗れ得ては失つた事實を見ても到底成功とは言ふことが出来ない。何故然るかと言ふに之には幾多の缺點があり、施すべくして未だ施さざる幾多の工作が残されてゐるのである。而も革命以前に於ても其の以後に於ても、未だ嘗て此種工作を施したことが無いのである。何故かと言ふに吾人がより効果的な方法の有ることを曉らず、且つ知識が足りなかつた爲に、斯る道理を知らなかつたのである。之が爲に多くの革命黨員は革命の成功後反つて名を革命に藉つて箇人の利權を謀り又は箇人の勢力を養ひ、強勢に成れば却つて革命を傾覆するの行爲に出た。斯くて三度の革命の成功を通して、依然革命主義は實現さるるに至らないのである。其の最大の原因は専ら兵力に頼り、黨員自らが其の責任を負はなかつたからであつて、之が爲に斯る惡結果を生んだ

のである。辛亥革命以後今日に至る迄宣傳事業は殆ど停頓してしまつてゐるが、革命の成功以前には我々は皆宣傳に従事したものである。只當時の宣傳方法は悉く箇人の宣傳であつて、組織と系統とを有しなかつた爲に收め得た効果も少く、全く個々別々な宣傳に過ぎなかつたのである。而も武昌舉兵後は此の個別的な宣傳さへもしなくなつた。即ち人は皆革命既に成功せりとなして奮闘を停止し、従前の成功が兵力の成功であつて黨員自身の成功でなかつたことには思ひ至らなかつた。我黨が眞の成功を欲するならば、今後は軍隊にのみ頼らずして黨の同志各自が奮闘努力し、其の奮闘も昔日の如く個別的ならしめず、系統と紀律とあるものたらしめなければならぬ。

以前事に従ふに當つて組織と系統とが無かつたのは何故であつたかと言ふに、之には依るべき先例と規範とが無かつたからである。然るに現在一人の好き朋友鮑君（註、「ボロヂン」）が露國から中國に來られた。露國に革命の發したのは我國に遅ること六年であるが、而も彼等は一度の革命によつて能く其の主義を貫徹し、其後革命政府は日に増し鞏固に趨きつつあるのである。同じく革命であり乍ら何故露國は成功し中國は成功し得ないのであるか。之れ蓋し露國の革命の成功は全く黨員の奮闘によるのであつて、一方に黨員の奮闘があり他方に兵力の援助があつたか

らである。故に吾人が革命の成功を欲するならば、露國の方法と組織と訓練とを學ばなければならぬのである。多くの人は露國は過激派が政治を執つてゐるのであるから、彼に學ぶことは過激主義を學ぶことではないかと考へてゐる様である。成程革命勃發以前には多くの過激なる思想が發生したが、之れは已むを得ないことである。然るに其の革命黨の首領達は多くは豊富なる學識と深遠なる理想とを有する人々である。其の立論の過程に於て過激なるもののあるのは蓋し免れ難いものである。(五十六行削除)

## 革命の成功は主義の宣傳による

——民國十二年十二月三十日各黨員に對する演説——

諸君、今回國民黨は改組して活動方法の宣傳を重視し、軍事を重視せざる事に變更し、今日、この問題を提出したのである。何故に、活動方法は宣傳を重視するを要し、軍事を重要視するを要しないのか。諸君の知らるる通り、我々の革命の方法は、滿清を倒して後は萬事軍事に重きを置いて居たが、それ以前は宣傳に重きをおいて居つた。この原因は、其の後軍隊を組織する機會が従前に比して多い點にあつた。其の効果について云へば、いづれが大であらうか。勿論、宣

傳活動の効果が大きであり、軍事活動の効果は小さい。譬へば、武昌の起義に就いて云ふと、表面上軍事活動の成功とは云へ、併し乍ら當時武昌に在つた軍隊は清朝の訓練せるもので、我黨の訓練せるものではない。起義の以前から、彼等は吾人の宣傳を受けて、吾人の主義を理解して居たので、それで主義のために革命したのである。故にかかる成功は完全に宣傳活動の成功である。假りに當時武昌の軍隊が毫も宣傳を受けず、革命の理論を理解して居なかつたなら、特に我黨は別に一支隊を派して彼の清兵と交戦し、彼等を盡く一掃しようとするし、彼も必ず一命を棄てて我々に反抗して來たであらう。それでは吾人の革命も恐らくはよく成功して居なかつたであらう。又吾人が一隊の兵を有しても、その吾人の軍隊に對して一向宣傳を重視せず、兵士が寸毫も何故に革命すべきかの道理を知らないならば、かかる軍隊を以て清兵と奮闘しても、勝敗の數は未だ必ずしも逆睹し得なかつたであらう。武昌の起義に於いて、當時よくその目的を達した理由は全く滿清の軍隊が自ら動いた爲であり、此故に事を發して忽ち成功するに至つた。彼の清兵が自ら動く力を持つて居た根本原因は、全く吾人の宣傳の効果に由るものである。彼等は宣傳を受けすべて吾人の主義に賛成して居たから吾人に對して反抗して來なかつた。かく敵の軍隊を用ゐて吾人の事業を成就するが如き、その收めた効果は、何と素晴らしいではないか。清朝を倒壊し

てからは、吾人の思へらく、軍事に勝てれば、必ずしも宣傳に重きを措かずともよい、と、甚しきは宣傳などは、緊要な事には關りのない事だと看做すに至つた。故に全國をあげて、是非善惡もなく、軍閥の専横を惹起するに至つた。これは吾人が責任を負はざるを得ない事である。今、吾人が、再び進歩を圖り、吾人の革命主義の完全なる成功を希望するならば、武昌起義以前の革命方法をとりもどし、宣傳に重きを置かねばならぬ。故に、今回の改組以後、諸君に對して宣傳方面に奮闘せられん事を請はんとするのである。

吾人は既往の歴史によつて、世界に於ける文明の進歩が大半は宣傳によつて居る事を證明しよう。譬へば中國の文化の如きは、何から來てゐるかと言ふに、全然宣傳によつてゐる。諸君の總てが御存知の如く、中國で最も有名な人物は孔子であるが、彼は列國を周遊して何を爲したか。其の當時の人に主として堯舜禹湯、文武周公の道を宣傳したのである。彼は詩書を刪定し、春秋を作つたが、之れは何の爲かと言ふに、後世に對し、主として堯舜禹湯、文武周公の道を宣傳したのである。故に之が全國に傳播して現在に及んでゐる譯である。今日中國の舊文化が、よく歐米の新文化と肩をならべてゐる原因は、全く孔子が二千餘年前に於て行つた所の宣傳事業のお蔭である。更に佛教の如きは、印度よりはじまつて亞細亞洲全部に流行し、信者の數は他のいづれ

の宗教よりも大分多いが、全く之といふのも「釋迦牟尼」が宣傳に巧妙であつた效果に由り、また耶蘇教の如きも、以前に歐洲より「アメリカ」洲に傳はり、近代は亞細亞洲にも擴まり中國に旅行しても、到る處彼等の教會堂が存在してゐる。斯様に普及した理由は矢張り耶蘇教徒が宣傳が上手であつたからである。宗教が、よく人を感化する所以は、即ち彼等には一種の主義があつて人をして信仰せしめるからで、普通人にして若し果して其の主義を信仰するならば、それが深く喰入つて骨に刻みつくから、主義の爲めには死ぬ事が出来るのである。斯かる原因のある爲め、布教者は往々にして其の教のために奮闘し、生命を犠牲とするも敢へて辭せない。故に宗教の勢力は政治の勢力に比して遙に偉大である。吾人國民黨の革命せんとする道理は、中國の政治を改革し、三民主義と五權憲法を實行せんとするものである。吾人の此の主義は、宗教の主義に比較して、更に一層切實である。何となれば宗教の主義は、未來の事並に現世以外の事を講ずるものであるのに、吾人の政治の主義は、現在の事及び人類の直接痛苦を覺える事を講ずるからである。宗教は未來の靈魂の爲に幸福を謀り、政治は眼前の肉體の爲に幸福を謀るものである。未來の靈魂について説き及べば自然空虚に近く、眼前の肉體について講じれば自然根據がある。こゝにいふ風に、宗教の徒が空虚な道理を傳へても尙ほ無限の効果を收め得るのである。吾人

政黨の宣傳は、實證すべき道理を有するから、不成功を恐れる必要はない。政治上切實なる道理を實行するに、大體二つの方法がある。一は武力を用ひ民衆を壓迫し、強迫して之を行ふもので中國古代の政治變革は、概ね此の方法を用ひた。他の一は、宣傳によつて、人心をして悦んで誠實に服従せしめ、喜んで命令を奉ぜしめて行ふ。此の方法は、中國の歴史ではあまり多くを見ない。中國の政治改革を實行する人の最大の缺點は、すべて自ら私し、自ら利する事である。許多の英雄豪傑はみな皇帝たらん事を願ひ、従前獨裁制を創成した。武力を特に使用しなかつたのは僅かに湯武革命あるのみである。彼等は最初七十里、及び百里の地盤を以て根據となし、善良な政府をつくり、全國民をして心服せしめた。故に兵を用ひ一度動けば、即ち東西して征すれば西夷怨み、南面して征すれば北狄怨むの有様で、全國民が盡く非常に歡迎して彼等に反抗しなかつた。即ち之れは既に宣傳を受けて居たのによる。故に當時の中國の人民は數百年間幸福を享樂したのである。後世の人みなが、彼等の革命を稱して曰く、「夫に順ひ、人に應ず」と。現今に到つては、人類の政治思想が極めて發達し、民權の學説が頗る普通化したから、一層武力を用ひてはならぬ。人々が心から悦んで服することを必要とする。すべて吾人の主義を歡迎してこそ、それでこそ容易に成功し得るのである。革命成功の最も迅速な方法としては、宣傳は其の九分、武

力はただ一分を用ふればよろしい。吾人國民黨は此の數年武力による活動があまりにも多く、宣傳活動はあまりにも少かつた。今回の改組により、宣傳活動に重きをおいて、從來の弊害、缺陷を救はんとするのである。

諸君は宣傳の任務を負つては、應に根氣を持たねばならぬ。今日は熱心に活動してゐても明日は熱がさめてしまふ様な龍頭蛇尾ではいけない。何となれば、人心を悦服心服せしめんとするには、一朝一夕、一言一動ではよく効果を收め得るものではない、吾人の主義を知らず識らずに移し植えて、深く人心に喰ひ込むことが必要であり、それでこそ効果がある。吾人が斯かる効果を收め得んが爲めには、宣傳を繼續的事業として行はねば不可である。若し繼續して行はぬならば革命の道理は明白にならない。もし眞に革命の道理が明白となつたなら、それは根氣があつたらぬ。吾人は必ずかかる目的を達成しなければならぬ。之が吾人の意志である。何人と雖も事を爲すに當つては或る意志を有する。古人は、志あれば事竟に成ると云つて居るが、此の一語を以て個人に就いて云ふならば、市街に喜々として、或は忙しげに絶えず往來してゐる人々は、みな其の思は金儲にあるが、彼等が結局其の志を得たり得なかつたりするのは何故だらうか。ある

者は能く財産家となり了せる、之れは志を得た者である。併し此種の意志は私利私慾に過ぎない。他人の利害と相衝突し容易に人のために消滅されてしまふ。故に大多數の人々はみな志を得ない。更に一種の意志は政府公共の志で衆人が之に對して行へば、容易に成功し得る。所謂、衆志城をなすのである。革命黨が其の昔滿清顛覆を思ひ、後に至つて、果然民國を建設せるが如きは、正しく志あつて事竟に成れるものと云へよう。滿清顛覆に就て言へば、昔太平天國も亦同じく斯る志望を抱いたのに、當時は何故成功しなかつたのであらうか。原因は如何なる點にあるのだらうか。洪秀全は、廣西金田村に義兵を擧げ、湖北、江西、安徽を打ち從へ、都を南京に建て彼等の革命は一應成功したと云つてもよかつたが、後日に至り、曾國藩、左宗棠、李鴻章一味の人々が出現して破壊した爲め、遂に失敗した。滿清はかの曾國藩、左宗棠、李鴻章一味を利用し得、其の爲め彼等の天下をよく維持し得たのである。曾國藩、左宗棠、李鴻章はみな漢人であり洪秀全も亦漢人である。洪秀全の反對する所は元來滿清であつて、漢人ではないが、併し當時は漢人にして滿人に反對せねばならぬ事を知る者が極めて少く、漢人は自ら相傷け相殺し合つて、滿人が坐ながらにして漁夫の利を占める結果を作りあげたのである。明朝漢人の國亡んで以來、排滿の擧は幾度なるかを知らない。其の失敗の原因は、いづれも漢人同志互に反對し合つたから

である。もし漢人が反対しなければ、太平天國の革命はもつと速に成功して居たであらう。辛亥の年、武昌に起した義舉は、全國の戦争二三ヶ月に過ぎずして大成功を告げ、太平天國は十數年戦を交へて而も成功するを得なかつた。其の間の主因は、全國の漢人が自ら支持したかしないかにある。辛亥の時は、漢人は自ら相支持するを知つて居たので、滿清の國家は一押しに倒れ、太平天國の際は、漢人自ら相支持するを知らなかつたので、洪秀全が一生かかつても矢張り滿清は倒れなかつた。漢人が自ら相支持する道理を知るか知らぬかは、全國の漢人が漢滿の區別について理解するかしないかに由るもので、辛亥の時は全國の漢人が漢滿の區別を理解して居たが爲に武昌の漢人が一度起義するや、漢人にして再び漢人に反對して滿人の天下を支持する者がなかつた。國民が漢滿の區別を明にするしないは、革命を主唱する人が普遍的な宣傳をするかしないに關はつてゐる。辛亥の年に武昌で起義する以前、吾人革命黨はいち早く民族主義を發明し、一般の有識者は、此の主義を全國に宣傳し、一より十に傳へ、十より百に傳へて大衆心を一にし、直前奮闘し、後に至つては、人々はみな漢族を復興するには滿人を排除するに非ざれば不可である事を知つた。故に武昌起義の後には、漢人にして再び滿人を援助するものはなかつた。滿人が漢人の援助なくしてどうして能く維持し得よう。辛亥の時漢人が滿人を排除した様な事は、人々が一

つの力にならねば出来ない。これを集團的な力（群力）と云ふ。かかる集團的な力は甚だ大きなものである。革命の事業は頗る大であるから、四億人の力を用ひてのみ、始めて容易に成功する。一人や二人の力では成就し得ぬ。何となれば一人や二人の個人の力には限りがあるからで、例へばもし一個人で百斤の品物を十里運搬するのに毎日十遍運搬出来るものなら、一人の力で毎日千斤は運べる。其れなら百人の力を用ふれば毎日十萬斤をはこび得る。もし果して四億人の力を用ふれば一日に如何程運搬し得るだらうか。四億人は百日間には何斤運搬し得るだらうか。四億人が同時に貨物を運搬し得る事實がないため、諸君はなかなか容易にはかかる集團的な力の如何に偉大であるかを了解し難いだらう。よつて吾人は動物の集團力を以て、之れを證明しようと思ふ。各種動物の力の用ゐる方は、二種に分けられる。一は孤立的な力で、一虎山にあれば群獸谷を空しくするが如き之である。虎は群棲し得ない動物で、その用ふる所の力は孤立的な力である。他の猛獸、獅子、豹の如きも皆同様である。他の一は、集團的な力である。動物中、天生最も社會的なのは蟻である。彼等は群棲し、時にはその數幾千萬ともなる。蜜蜂も亦群棲すること極めて多いのみならず、非常に條理が立つて居て、彼等は一の巢に住み、皆それぞれ職とする所があつて事にあたり、巢を造るもの、食物を探すもの、花をつまむもの、門を守るもの、蜜を醸すもの、

などがあり、更に首領たるものがある。之は先づ蜂王とも云ふべきものであらう。あたかも國家と同様、行政、立法、司法、等種々の職員があつて毫も紊亂せず、事をなすに當つても、その權限を越えたり侵したりする事なく、またよく相互に援助し合つて居る。蟻の用ふる集團的能力に至つては、一層容易に見出される。例へば吾人が郊外を歩いて、遇々風雨にあつた時など、常に無数の蟻が、泥を用ゐて一條の極めて長い隧道を作り以て雨風をさけて出入に便ならしめて居るのを見かける。若し、斯様な仕事を、一個の蟻が行ふならば、あんな極めて弱い力で、極めて僅かの塵や泥を運搬して、一條の長い隧道をつくるには、どれ程の時間を費やしたら成功する事だらうか。併し乍ら、無数の蟻が、みな泥や塵を運搬し力を合せて共同製作し、少を積んで多となすから、短時間内に極めて長い隧道を作り上げるのである。人の天性は動物の天性とは同じくない。多數の人は、よく群棲するが、然し社會性の程度は蜜蜂や蟻には及ばない。例へば、多數の蜜蜂は一處に同居し、彼等はその一群中に於いて、各々其の仕事を通り、相互の職務に對しては互に相侵犯しないし、また互に責任の轉嫁もせぬ、すべて各自の職務を盡し終始かはらない。特に門番の蜂の如きは、尾の上に劍を藏して居り、彼の職務は一群全體を保護するものである事を知り、もし強暴なものが群の安全を侵犯するに際會すれば、彼はその尾を以て之を刺し、命を

捨てて抵抗する。即ち生命を犠牲にするも亦辭さない。かかる奮闘精神は、眞に死を視る事歸するが如しである。斯様な死を視る事歸するが如き特性は、教へて出來たものではなく、生れると共に自然に存するもので天性と云ふべきものである。人間には斯様な天性はない。兵士の如きも、必ず幾多の訓練を経なければならず、それで漸く應戦し得る。戦に臨んだ時には、それでも生死利害を考へ、その職分に違反するものがある。近來文明國の兵士は、職務を死守して利害を計らないが、併し彼等の天性純厚を以てしても尙蜜蜂には及ばぬ。中國の兵士に至つては、お話にならない。俚諺にいふ通り「好い鐵は釘には打たない、立派な人間は兵士にはならない」と。彼等を好き兵士たらしむるには、須らく幾多の教訓を経て懸命に使用しなければならぬ。もし忠實の一點に就いて云ふならば、蜜蜂と比較して更に其のへだたりは大きい。蜜蜂は生れると共に天性社會的性質を有し、一群の中に在つて各々その事を司り訓練を加へる必要がない。即ち自然である。人も亦、生れて多少の社會的性質を持つてゐるが、それには須らく訓練を加へなければならぬ。然る後始めて社會的性質が進歩するのであるが、進歩の極點に達しても、まだまだ蜜蜂には及ばないのである。蜜蜂は天賦を發揮して、勇往直前、毫も顧慮する所がない。人は誰でも後天的訓練によるもので、熟練せねば容易に先天的な特性をも喪失してしまふ。こうした理由か



ら、人類中には常に許多の亂臣賊子が發生し自ら相傷け相殺してゐる。が、蟻と蜜蜂の中には、斯様な現象はない。

吾人は中國が進歩して三民主義、五權憲法に極めて合致せる國家を造る事を要求する。それには、集團的力を用ふるに非ざれば不可である。集團的力を用ゐんとするには、衆智衆力を集めねばならぬ。諸君が奮闘されるには、一個人、一部分に依頼して、孤立的な力を用ゐてはならぬ。孤立的な力を用ふれば、その効果は頗る小さく、頗る緩慢である。民國成立以來、袁世凱、趙秉鈞といつた風の官僚を生じたが、そうした官僚は、滿清時代に在つては、元來極めて従順であり民國になり初めて降つた時も亦共和に忠實で、謹んで命を奉じ敢えて法を犯さなかつた。その理由は何處にあつたか。滿清を顛覆した後、民國が成立し、さうした舊官僚輩はなほ民國の如何なるものか知らなかつたからであるが、人民も同様如何にして主人として彼等を監督するかを知らなかつた。而して專制時代には皇帝が主人として彼等官僚を管理したので、彼等は皇帝の威權が彼等の官を任免することを怕れて、その故に彼等は奴隸の如く平伏して居た。民國になれば本來人民が主人であり、當然彼等を監督すべき權限を有するのであるが、併し、最初は奴隸の地位を脱して忽然として主人の地位に昇つた爲に、まだ如何にして主人として、民權を實行すべきか

に不知案内であり、爲に彼等は眼中主人なく、勝手氣儘に振舞ふ様になつた。革命が成功し、民國が創建されたのは、元をただせば先覺者が奮闘して出來たのであるが、普通の人民は一向にさうした由來を知らなかつた。民國成立當初は、彼等官僚はなほそれ等の先覺者が來つて干渉するのを恐れ、敢えて亂暴な事はしなかつたのであるが、その後、官僚と軍閥とが一味となるに至り、彼等は度胸を据えて政權を把握し、法に違ひ紀律を亂す等惡として爲さざる所は無かつた。袁世凱の様に皇帝になるとか、張勳の様に復辟運動をするとか、でなければ曹錕の如く金錢で大總統を買つて、武力を用ひて民國に反抗謀叛した。お蔭で今日では人民の國家ではなくて完全に官僚と軍閥の國家にされてしまつた。人民の天性は、元來蜜蜂や蟻の如く生れながらには秀でて居らない。故に善良の方面に變化し得る原因は、大半學習によつて居り、普通人は學習せねば何事をも知らないのである。故に先覺先知の人々が彼等に知らしめんとせば、當然之を行つて教へなければならぬ。教とは即ち宣傳である。一より十に傳へ、十より百に傳へ、百より千に傳へ何處々々までも之を繼續すれば、四億人に傳へ得られるであらう。もし四億の人々が盡く吾人の主義を理解したなら、彼等は吾人が中華民國を建設するのを歓迎するだらう。かかる偉大なる事業を成就するべく、ただ我黨のみがその實力を有してゐるのである。我黨は主義を有し、他黨は

主義を有しないが故に、彼等は國家を作り上げる事をしない。これは何處から出發してゐるのか。一體、國家とは何であるかと云ふに、國家とは人々の生死のある所であり、國家の基礎は人民の思想の上に置かれて居る。世界に於て、現在共和國が多いのは何故であらうか。また從來帝國が多かつたのは何故であらうか。勿論、國民の政治思想には、各々異なる所があり、國家を改革すると言つても、決してその河や山を全部變改するのではない。たとへば廣東を改革するのは、決して白雲山を河南に運搬してしまふのでもなければ、東江、西江、北江の河道の方向をすべて變更してしまふと云ふのでもない。ただ人心改造を要するのみである。人民の舊思想を除去して別に新しい思想に取換へる。これが即ち國家の基礎の革新である。國家が新しい基礎を有すれば丁度新家屋を建築するのと同様、家の土臺がなつた後は牆を作り棟をつくるに、何の大きな困難が有らう。我黨の三民主義は、即ち無形の中に人民の思想を改造するものである。何をか三民主義と云ふ。簡単に云ふと、民有、民治、民享であり、詳細に云へば、民族主義、民權主義及び民生主義である。この三つの主義の内容は、全國の生權をすべて人民の手に歸せしめ、一國の政令は盡く人民によつて發せられ、得る所の國利は人民が共に享受する。この三つの内容は、民有、民治、民享の六字が包括してゐる。五權憲法は三民主義の思想に基き、以て國家を組織する

ものである。あたかも蜂の巢に於いて、その中の、食料蒐集、採花、門番等の任務をすべて其の蜜蜂が分擔し、各々その事を司つてゐるのと同様である。總括して云へば、三民主義と五權憲法とはみな建國の方略である。一個の國家を建設する事は、さながら一個の蜂の巢を作るが如く、巢の内に在る蜜蜂は、他を損し自己を利する事を許されない。整々として秩序があり、毫末も相互に相衝突する事なきを必要とする。吾人は將來の國家を、民有、民治、民享、即ち世界に於いて最も安樂なる國家たらしめ、此の國家内の人民を、世界に於ける最も安樂なる人民たらしめたい。吾人が此の目的に到達せんがためには、現在の廣東の少數の國民黨員を以てしては成功し得ない。多數の力を用ゐる事が必要である。願はくば全國民こぞつて之が爲め同心協力されたい。されば成功は容易である。全國民はみな吾人と行を共にしなければならぬ。即ち吾人の主義を理解しなければならぬ。若し然らざれば、彼等は吾人と行を共にせざるのみならず、更に却つて吾人に反對するであらう。外國人の奴隸となるが如きは、本來誰しも心より悦んで希望する所ではないが、併し以前の漢人は、中國皇帝が外國より來れる滿人なるを知らなかつたのである。故に曾國藩、左宗棠などの漢人は、滿人の奴隸たる事を希望して漢人に反對した。それは彼等が其の當時、ただ忠君は大義であり清朝の深仁厚澤に我等は反對する能はずとのみ理解し、滿漢の區別と

民族思想とから、漢人が滿人の皇帝たる事に反對せざるを得ないものであることを知らなかつたからである。故に彼等は一生涯外國人の奴隸となり、却つてそれを以て光榮と考へた。辛亥の年に至つて、全國の漢人の思想は從來とは大いに相違してきた。されば武昌に革命一度起るや、全國之に響應したのである。吾人は此點を考慮する。故に革命に従事するには、吾人は何を以て革命の主義を要するかを宣傳せねばならぬ。嘗つて民族主義を宣傳して滿清を顛覆するに頗る効果をあげた。吾人は現在宣傳に従事するに當り民權主義と民生主義とを民族主義同様に重要視するを要する。嘗つて民族主義を宣傳した時代は、漢人と滿人とを比較するに過ぎず、極めて容易に人をして理解せしめ得た。現在民權主義と民生主義を宣傳するには、簡單なる比較が困難で、人をして理解せしめるのはなかなか容易でない。何となれば、環境は人を束縛するものであるから譬へば、老囚人の如きは、牢内に住居すること十數年にもなれば、一時歸つてくる様に命じて放つて外部に出すと、彼は矢張り元の牢に歸つてくる。彼は已に監獄に久しく住んでその習慣が自然となり、元の監獄に歸つて來ると非常な自然に感じ、もし他の場所に行けば不自然を覺えるのである。また諸君の御存じの通り、米國で最も著名な南北戦争は黒人奴隸制度に原因して居る。當時米國の南部には幾百萬の黒人奴隸が居つた。北部は商工業中心の省、南部は農業を主とする

省で、そのため數多の黒奴を有し、彼等をして耕作に従はしめてゐた。戦争の原因は、北部が人道主義を主張し、人々の平等を要求し、奴隸制度は存在すべからず、政府は巨額の費用を出して彼の多數の黒奴を贖へ」と唱へた。南部は、人民は財産の保護を受ける權利を有する、黒奴は彼等の財産であるから政府は干渉するを得ずと主張して、北方の主張に反對し、この争端から南北戦争が発生し、其の後北方が勝利して南方は失敗し、奴隸解放を實行し、かの數百萬の黒人を自由ならしめた。その奴隸であつた以前の時代には、其の衣食住はみな主人がととのへたもので非常に完備して居り、奴隸であつた以前の時代には、其の衣食住はみな主人がととのへたもので非常に完備して居り、其の時の生活は全く安樂であつたと考へ、一旦主人を離れてからは、自分では如何にして衣食住をはかつてよいやらも知らず、一時は生活に苦痛を覺えたのである。諸君は御存じの如く、米國の二大偉人は、一人は「ワシントン」であり、一人は「リンカーン」である。此の「リンカーン」が有名になつた所以は、奴隸解放である。黒人は現在に到つてこそ彼に感謝せねばならぬ事を知つて居るけれども、解放された初は、感謝する所か、却つて彼を悪罵せんとした程であつた。當時多數の黒奴は常に「リンカーン」を痛罵して曰く、我等は嘗つては極めて安樂であつた。何だつて彼は我等をいためつけるのかと。吾人革命黨は滿清を顛覆し、人民

を奴隸の地位より一躍主人の地位に就けた。人民は主人となつて感激しないばかりか、暫時目前の苦痛を受けるため、却つて謾罵せんとする。常に曰く、我々は昔は安樂であつた。革命以後國亂れ民窮してゐる。眞に命を受けた天子が出現せねばならぬと。或は曰く、清朝の復辟之れでよろしい、民國などは全く無用だよ、と。では御伺ひするが、以前の人は、官吏に賄賂をすれば尻を打たれねばならなかつた、今日では斯様な刑罰は受けない。ただ此の一事を以てするだけでも民國は結局、好いか悪いか、どうであらう。吾人は民國の長所を理解せしむる爲め、普遍的な宣傳を以て民衆を感化する事が必要で、斷じて萬が一にも武力をのみ用ひて人を壓制してはならぬ。武力をのみ用ふれば一時は成功しても、根本より人の思想を改造し、人の習慣を變更する事は出来ぬ。丁度現在陳炯明の軍隊が敗走し、陸榮廷の軍隊が放棄敗走した如きものである。彼等は何故、地を棄て、敗走したのか。其れは彼等の思想が北京は從來眞の受命の天子が出た所であるから其れが本物で、民國は偽物であると考へたからである。更に、民國六年陸榮廷が北京に赴き、今更宣統に叩頭せんとするが如き、かく奴隸根性の改められぬのは、米國の黒奴が解放當初一向に奴隸根性を失はなかつた道理と同様である。吾人は根本から彼等を改造變化せしめねばならぬ。其れで彼等を感化する方法を案出しなければならぬ。感化とはつまり宣傳である。諸君は

此の任務を負擔されたが、其の方法は、須らく臨機應變なるを要する。現在關係ある問題、即ち外國人が軍艦を用ひて示威を行ふのに對して吾人が彼等に反抗するが如き問題を、民族主義に應用するを要する。民族主義を説明せんとするのは、頗る容易であるが、民權主義を説明するのは困難であり、民生主義を説明せんとすることは更に困難である。多くの人々は從來ただ民族主義を知るのみであつて、現在漸く民族主義を理解した所である。民生主義を講じても現在の所では大概の人はまだ知つて居らない。吾人、宣傳を擔任せるものは自ら先づ理解するを要し、而して始めて相手も理解し得る。若しさうでなければ其れは盲人が盲人を導く如く、どの道から行つてよいかを共に知らないであらう。

革命の成功する以前、廣東人の間に、民生主義を包括する様な俗語があつた。この言葉は民生主義を歓迎するもので、民衆に對する宣傳に持つてこいの材料である。何となれば、普遍的宣傳には極めて無知な民衆に對しても演説せねばならぬから、一般人の極めて歓迎する氣持はどんな處にあるかを知り、彼等が極めて歓迎する語を以て説けば、數多の人を感動させ得るのである。必ずしも非常に大きな力を費やさずとも、かくすれば頗る大きな効果を收め得る。此の言葉は吾人革命黨が云つたものではなく、普通の人々が自分でこしらへたものである。ではどんな言葉か